
UNITY FORCE－HEXA ～リヴェラル・クラフト～

ナット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

UNITY FORCE－HEXA　　＼リヴェラル・クラフト＼

【Nコード】

N2668P

【作者名】

ナット

【あらすじ】

西暦2203年、地球は未曾有の危機に陥っていた！

突然現れた宇宙生物！暗躍する魔術師！破壊を振りまく大怪獣！

国連軍人の青年、高校生の少女、ジャンク屋、考古学者の4人を軸に、展開される近未来ロボットSFファンタジー！

プロローグ（前書き）

＊まえがき＊

この作品は、2007年にとあるサイトで発足した「オリジナルロボット製作委員会2007」という企画に基づいて執筆されています。

本来は複数人で設定を出し合い、数人の執筆者が持ちまわりでストーリーを書いていくというものだったのですが、早々に瓦解し、現在にはほぼ忘れ去られてしまったものを参加者の一人だった自分が再構成したものです。

設定や一部展開、描写などは他の参加者が作ったものであるので、問題があるようなら消します。また、その企画が出たサイトさんのほうにも一応投稿してあるので、やはり問題があるようなら消します。

が

しかしです。せっかく設定を出し合い、なんかそれっぽい世界観が出来上がって、しかもキャラクタにそれなりの愛着がわいてくると、このまま野ざらしにして腐らせるのも何かもったいないような気がしたので、この際自分で書いてみようと思いついたわけです。

文章力も構成力もそんなに無い自分ではありますが、何とか完結させたいと思っています。

プロローグ

西暦2105年。

化石燃料の枯渇より端を発した世界的経済危機と、それに誘発されたように起こった第3次世界大戦は、誰もが予想だにしなかった結果に終わる。

機動兵装「JGS-M001 防人」。

日本のとある中小メーカーが研究中だった巨大人型ロボットの存在が、この戦争を大きく動かした。

全長20m弱。戦車と戦闘機、そして歩兵の長所だけを抽出し、短所を極限までつぶした鋼鉄の巨人。電撃的投入と同時に各戦線にて多大な戦果を挙げたそれらは結果、日本を中心とした数ヶ国による世界的に見て小規模な連合体を一躍大戦の覇者にせしめたのだ。約50年にわたる戦争に終止符が打たれ、世界は新たに発足した国際連合の統括のもとに、「垣根のない世界」を樹立させるにいたる。

しかし、それを良しとしないものもいた。

西暦2123年、オセアニア、おもにオーストラリア大陸を反国連派が掌握。国連軍は即座に機動兵装部隊を投入し事態の収拾に当たらせたが、反国連派も機動兵装を持ち出してきたことにより、以後80年近くにわたる泥沼の戦いが繰り広げられることとなった。

時は進んで西暦2180年。日本の九州地方に、なぞの飛翔体が落着くという事件があった。当時終息に向かいつつあったオーストラリア紛争において、反国連派が使った弾道ミサイルではないかという噂がまことしやかにささやかれたが、国連軍は情報をかたくなに秘匿。爆発もせず、また当時第3次世界大戦により壊滅状態に陥っていた九州地区は大した復旧もなされていなかったために目立った被害はなく、そのため一年と経たずして噂は急速に風化して行

った。

オカルト界限では、UFOではないかという意見が頻出していたのを、一応追記しておく。

西暦2101年にオーストラリア紛争は一応の終息を向かえる。なぜ一応と前置きしたかといえば、それが人の手によってなされたものではなかったためである。

夷。そう名づけられた異形の存在の出現である。

疲弊しきった反国連派勢力はその撃退かなわず、”遺跡”より際限なく現れるそれらにあつという間に飲み込まれてしまった。

夷はオーストラリアのみならず、同時多発的に世界中に出現した。各地域の常備軍はこれらの初撃を辛くも撃退したが、戦力差はいかんともしがたく多数の被害を出す。その後大規模な夷の襲撃は鳴りを潜め、月に2、3体が現れる程度の出現頻度となった。

事態を重く見た国連本部は、対>夷<専門調査委員会、通称「マレビト」を開設。本格的な調査に乗り出すことと相成った。

そして、西暦2203年――

ここに四人の男女がいる。

一人は若い軍人。若くして激戦地を経験し、身体ともに強く、逞しくなった青年は今、神妙な顔つきで渡された転属の辞令を敬礼を持って受け取る。

一人は年若い少女。群青の髪を揺らし、風に加護を受けた少女はいま、ひと時の平和の中にあつて今日もまた級友と姦しくお喋りに興じている。

一人は幼さを残した女性。敬愛する祖父より譲り受けた己の居城を切り盛りするため、今日もまた変わらず激務に励む。経営者に、休みはない。

一人は若い考古学者。正しく正義の心を持ち、心優しい青年は、今日も新たな発見を求めてまだ見ぬ秘境に分け入る。知的好奇心は

原動力となり、彼を動かす。

彼、彼女らは、今はまだこれから己の身に降りかかる大きな四つの物語に、気付けてはいない。

同時に、自身が”主人公”であることも、認識してはいないだろう。当然といえば、当然だ。

さて――

地球は今、未曾有の危機にさらされている。

はるか宇宙の深遠より来るなぞの来訪者

”現在”と”過去”をつなぐ門と、現れる客人

純粹であるがゆえに闇に身を窺す探求者たち

暗躍する武器商人と、傭兵

そして……

人類は、今まさに岐路に立たされている。

すなわち、存続か、滅亡か

どちらの道が選ばれるのか、神ならぬ私の身には……いや、神ですら

何も分かっていないのかもしれない。

これは、そんな瀬戸際を戦い抜いたヒーローたちの戦闘記録であり、ラブコメであり、神話である。

【UNITY FORCE—HEXA くりヴェラル・クラフト】

物語は、今から始まる。

第1話

それは、宇宙の深淵を切り裂いて現れた。

流れるような流線型をしたそれは、一見すると岩の塊にしか見えない。しかし、単なる岩にしてはありえない軌道を描き、慣性に引かれるわけでもなく宇宙を進む。度重なる軌道修正を経て、その先端がさしたものだ。それは、太陽系において唯一水と呼ばれる物質を蓄え、唯一生態系が営まれている青い星。

その星の名は――。

UNITY FORCE―HEXA 〈リヴェラルクラフト〉
―― Stage001 STM急襲 ――

――2000年という月日は、かつて非武装を美徳とした国を世界一の軍事大国に仕立てるのに充分な年月だったといえるのだろう。

国連軍九州基地の嚴重な正面ゲートを見やりながら、一人の青年、佐藤勇作はそんな得體もないことを考えていた。彼が今まで勤務していた岐阜の基地も相當のものだったが、こちらとは較べるべくもないだろう。

（旧北九州市がそのまま基地になってるんだから、でかいのも当たり前か……）

正確には、それに加え旧博多市の一部も入っている。第三次世界大戦の折、壊滅した九州地方を復興する名目で始まった計画が、いつの間にか国連軍基地の建造計画に摩り替わっていたというのは、有名すぎる噂話である。

「IDと通行許可証の提示を」

ゲートで検問を行っている兵士に求められるまま必要書類を提示

すると、確認が取れたのか「お待たせいたしました、中尉殿」と敬礼してゲートを開けてくれた。勇作も敬礼を返すついでに、彼の階級を見る、彼は伍長だった。

「お勤めご苦労。あ、伍長、ちょっといいかな」

「は？ 难道ありませんようか」

「この基地は今日が初めてでね。できれば司令部の位置を教えてもらいたいんだが」

前述したとおり、この基地は旧北九州市をすっぽり覆うほどの広大な敷地を持つ。当然徒歩のみでの移動は困難を極めるため、基地構内にはバスや電車までが走っている。手持ちの地図だけでたどり着けるかどうか、少々心もとない。

「ああ、それでしたら――」

勇作の頼みに、門兵の伍長は快く応じてくれた。

と、いうわけで特に問題も無く、正面ゲートから電車を2本、バスを1本乗り継いでやっと到着した司令部は、基地の諸施設とさほど変わらない中層のビルだった。その5階、基地司令執務室のプレートがかかった部屋の前で、勇作は居住いを正す。

（なかなかどうして……緊張するもんだな）

軍に入隊してかれこれ5年たつが、転属を言い渡されたのも初めてならその挨拶も初めてである。前の基地でもめったに顔を見ることはなかった基地司令という役職、やはり緊張する。

かれこれ逡巡があったが、まあそれも数秒のこと。腹を決めた勇作がそのドアをノックしようとした、そのときだった。

「っ……」

振り上げた拳がドアをたたく寸前に、プシュッと圧搾空気の抜ける音とともにドアが開いた。宙を切ったその拳は、運悪くドアの向こう、ドアを開けた張本人の胸板をノックして止まった。

「し、失礼しました！」

その張本人、略式軍装の上から濃緑色のコートを羽織っていた男は、中尉の階級章を襟首につけていた。ついさっき中尉に昇進した

ばかりの勇作はあわてて敬礼し、謝罪する。

「いや、いきなり戸を開けたこっちにも非はある。気にしないでいい」

男は苦笑しながらそういうと、「失礼」と一言告げて勇作の脇を通り抜けていった。

「中尉。そこに突っ立っていいないで、入ってきたらどうだね」

しばらくその男を目で追っていた勇作に、部屋の中から声かけられる。内心しまったなと思いつながらも、勇作は努めて冷静を保つと、毅然とした態度でその声の主の下へ歩み寄り、びしつと音がするのではないかというほどの敬礼をして見せた。

「はっ！佐藤勇作国連軍中尉、本日を持って岐阜基地より転属となりました」

「うむ。国連軍九州基地へようこそ、中尉。貴官を歓迎するよ」

そんな勇作に穏やかな動きで敬礼を返すのは、老年の男だった。全体的にシックな木目調で統一された室内の、最も上座に座る男。襟元の階級章から彼が准将であること、そしてこの九州基地を任されている人物だということがわかる。

「当基地司令の東だ。これからこの基地で生活することになるのだし、覚えておいて損はないだろう。国連軍人として、貴官の責務を果たし、キリキリ働いてくれたまえ」

「はっ！」

不敵な笑みを浮かべる東司令からの言葉に、勇作は直立不動で返す。なかなか食えない人物のようだ。

「まあ、着任の挨拶はここまでとして、各種書類の提出などは事務官の指示に従ってくれたまえ。貴官のこれからの任務だが、向こうでは何か聞いているかね？」

「特務部隊への転属だと聞き及んでいます」

東の問いに、勇作は数瞬おいて答える。実際、思い返したところで聞いているのはこれくらいだ。

「なるほど、それはまた遠まわしな言い方だな」

勇作の応えに苦笑する東は、一拍おいて続けた。

「君には、これからとある機密度の非常に高い部隊へ所属してもらうこととなる。厳密に言うとな国連が直接管理している部隊でな、国連軍とは別系統の組織になる」

「つまり国連直下、ですか？」

勇作は息を呑むように言う。ただの転属だと思っていたら、なかなかスケールの大きい話だったようだ。自然と緊張感が漂う。

「うむ。まあそういうことだ。【アース・ガーディアンズ・フォー】……縮めてE G Fが、君のこれからの職場になる」

「E G F……」

勇作は、噛み締めるようその名を呟いた。そのどこと無くヒーロー然とした響きは、勇作の男心をくすぐると同時に己に課せられた使命の重さを感じさせる。

「まあそういうわけで、私から話すことはこれくらいだな……榊原大尉、後は任せてもいいかね？」

「ええ。お引き受けしますよ、司令」

司令が応接セットに座る長身の男に声をかける。勇作も先ほどから気になっていたが、どうやら彼は勇作の出迎え組だったらしい。榊原と呼ばれた男は、そういつて立ち上がると、勇作の前にきて右手を差し出してきた。

「E G F J P N第一連隊所属、第一機動戦闘小隊兼試験小隊長の榊原だ。よろしくな」

「は！」

そういつてがっかりと榊原の手を取る。

「詳しい話は榊原大尉から聞くことだ。解散したまえ」
「敬礼！」

榊原の号令に勇作が敬礼すると、東もくたびれた感じではあったが答礼する。

退室する榊原の後ろについて、司令部ビルのエントランスまで降りる。車寄せには一台の軍用車が停まっており、榊原に乗車を促されるまま勇作もシートに身を預ける。

「出してくれ」

ハンドルを握る下士官にそういうと、彼は軽くうなずいてキーを回した。

「さて、さっきも一応自己紹介したが、EGFJPN第一連隊所属、第一機動戦闘小隊兼試験小隊長の榊原戟だ。お前には、今後俺の隊に入ってもらおう」

発車してから、戟はシートにもたれようにそういった。

「まあ話すべきは山とあるんだが、それは本部についてからじっくりとするとして……勇作、おまえは、異星人の存在を信じるか？」

「い、異星人ですか？それはまた……いきなりですね」

戟の問いに、勇作は答えに詰まる。実際勇作にしてみれば唐突にすぎる話題の振り方だったから、当然といえば当然だろう。

「そうですね……地球人がいることですし、他の星に生命体がいるところでおかしくはないのだろうとは思いますが。いかんせん真面目に考えたことなどはなかったもので」

「まあ、そうだろうな」

そういつて苦笑する戟。だが、次にはいささか真剣な顔になって、言い放った。

「地球は今、異星人から侵略を受けている」

「……一体、私になんのようです？バーン准将……いえ、父さん。姉さんまで」

『テイク……聡明な息子のことだ。感付いているのだろう？わざわざ私がこんな通信を送っている意味に』

九州基地本部ビルの一 corner、機密の確保された通信室の corner で、先

ほどの若い中尉が画面に映る壮年の男と対峙していた。壮年の男の階級章は准将の輝きを放っており、胸につけられた記章の類がただならぬ身分であることを主張していた。ただの中尉風情が直接対談するような人物ではないだろうし、中尉の身分ではおいそれと使えないような設備を使っているのも、彼の生家に関係している。画面に映る男も、それと対峙する中尉も、美しい銀髪だった。40〜50代と思われる男の彫りの深い顔は、威厳に満ち溢れている。

バーン家という一族がある。西欧貴族に端を発し、その高いスキルを買われて国連軍内外に強い影響力を持つようになった軍人一家だ。こと機動兵装の扱いに関してはずば抜けたものをもっており、「専用機持ってこそそのバーン家」と謳われる名門である。

現在画面を介して対峙しているのは、その家長と末弟である。

「……わかりませんね。息子の顔でも見たくなくなっただけですか？」

うすうすは感付いているが、中尉の男、テイク・バーンとはぐらかすように言った。表情は変えず、父、オルティッドの顔を正面から見据えたままで。

『……入隊してからもお前はバーン家を頼らず、今までやってきた。私はお前を過小評価はしているつもりはない。むしろバーン家の中でも上位に入る器量の持ち主だと思っている。だが、もう限界だろう？』

「何をおっしゃりたいのかと思えば……」

『テイク、私のところへ来い』

「……御冗談を」

テイクは父の言葉に思うところがあったのだろう。一瞬いぶかしげな顔をするが、すぐに表情を戻した。

『このままでは、お前の才能が潰れるだけだ。はっきり言わせてもらおうとショナーのような者の下におっても出世は望めんど。コードジットがない今、お前を後ろ押しする者はいないのだ。考えろコードジット。その名が出たとき、テイクの表情は一気に苦虫を噛み潰したようになった。一年前まで彼の直属の上官で理解者だっ

た男だ。もつとも、”あの事件”の折に重傷をおい、今は退官している。後任でやってきたショナーという男は己の保身と周囲の蹴落としに躍起になっているような男で、若い芽を摘もうとしてか確かにここ最近の境遇には恵まれていない。

「……申し出は嬉しいですが、お断りさせていただきます」

『……理由を聞こうか』

しばしの沈黙の後にテイクが出した結論は、否定だった。父であるオルティッドも、咎めるでもなく静やかな口調でその理由を問う。

「私には、やらなければならないことがあるからです」

『……それは、あなたの専用機になるはずだった機体に関係するのでしょうか？』

と、そこで今まで沈黙を保っていた人物、金髪のストレートを流した見目麗しい女性、テイクの実姉に当たるレティ・バーン国連軍少佐が口を開いた。テイクは無言だ。

『話は聞いてるわ。登録を抹消された機体の奪還許可を執拗なまでに要請しているとか……いまそこにいるのも、そうなんでしょう？』

「……ッ！」

ショナーの狸野郎が、と内心小さく毒づく。おおかた、あの上官殿が陰口をたたいているのだろう。

『……軍が賊にくれてやるといった機体だ。そんなものはさっさと忘れろ。専用機ならば私のところでも用意できる。お前がこだわる必要はない』

オルティッドはテイクの考えを唾棄するように言う。

「そんなものに、何の価値があるものか……！」

テイクは顔を伏せ、先ほどの冷静さはどこへ行ったのか、危うさを持つ表情で強弁する。一年前の事件が、彼にどれだけの影響を与えたというのだろうか。が、数秒の後に我を取り戻したように口を開いた。

「俺は……いや、私は、国連軍入隊に際して今後はバーン家には頼らずやっていくと決めました」

『そんなことは百も承知だ。だがいまはそんな小さなプライドにしがみつくと必要はないといっているのだ』

オルティッドの言葉は厳しくもあり、正論でもあった。レティは、何かを考えるように難しい顔をして二人の会話を聞くにとどめている。

「私は、コードジツト中佐を助けることができませんでした。それどころか、中佐が決死の思いで私に託したあの機体さえ、目の前で奪われていったんです……私は、この屈辱を忘れることなどできないし、このままの自分自身を許すこともできない……！」

テイクは口を動かしながらも思う。これは単なるわがままだ。軍人としてとるべき行動ではないことも、テイクにはわかっていた。だが、頭で理解したところでどうにかなる問題ではないことも、理解していた。

自分は今、個人の意思で、わがままを通そうとしているのだ。

「俺は、この件に決着がつかない限り、先へは進めないんだ……！」
これが、テイクの本心であった。これ以上の言葉は、逆さに振っても出てはこないだろう。画面の向こうを沈黙が支配していることをひしひしと感じながら、テイクは彼らの言葉を待った。

『テイク』

口を開いたのは、レティだった。テイクは無言で、姉の次の句を待つ。

『オルティッド准将……お父さんは生真面目だから、絶対にこんなことはしないでしょうけど、私の上司と母さんの権限をつかえば、あなたを強制的に転属させることだってできるわ。それは、わかっているのよね？』

「……ええ」

『その手段が執られた場合、あなたは……どうする？』

いつもは温和な姉の、その厳しい表情を見ることができず、テイクは顔を伏せる。

「……わからない」

具体的な答えひとつも捻り出せず、まるで子供じみた己の発言に、
テイクは齒噛みする。

『考え方もそうだけれど、感情が高ぶると敬語が崩れてくるって言うのは、あなたのダメなところね、テイク。もう23なんだから、
しっかりしなさい』

「すみません……」

姉らしく、諭すような口調で言うレティに、何一つ返す言葉もない。そんなテイクを見やりながら、レティはふっと表情を緩める。

『いいわ、謝らなくても。さっきの質問の答え、行動で見させてもらいます。……レイカさん』

傍らに控えていたのであろうオルティッドの秘書を呼ぶ。画面に映った黒髪の女性がそうなのだろうが、彼女はレティに一枚の紙を渡し、また画面の外に消えていった。

『……レティ、まだ話は』

『フフ……あら、最初からこうするおつもりだったんでしょう？ 准将は、テイクには昔から甘いんですもの』

不服げに言うオルティッドをさえぎって、笑みを浮かべながらレティ。

「一体、何の話……」

自分の理解のおよばない範囲でのやり取りに困惑するテイクに、
レティは画面の一部を切り取って、一枚の紙を映し出した。

「……！」

『コードジツ中佐がね……いえ、退役されているからコードジツ
トさんでいいのかしら。ともかく、あの方が退役後も調べてくださ
っていたものを、私たちに送っていただいたの』

その紙は、なにやら報告書の表紙のようだった。そして、それに
添付された写真には

「ブロックス……レフ……！？」

まぎれもなく、一年前に強奪された機動兵装「ブロックス・レフ」
が、いまでは「ストレート・ティー」と名を改めて写りこんでいた。

報告書の表紙に目を走らせれば『ブロックス・レフ調査報告書』の文字が目飛び込む。

「どうやって……これを」

『コードジットはS L－Cの司令官を長年にわたって勤め上げてきた男だ。コネの類ならば、私に勝るとも劣らないだろうな』

オルティッドが言う。政治的手腕に長けた父が言うのだから、相当なのだろう。

『テイク、その機体はすでに国連軍のデータベースからも抹消され、開発計画自体がなかったことにされているいわばゴーストのような機体だ。もしお前が強奪犯を見つけたところで、逮捕もできなければ法にかけて裁くこともできん』

オルティッドが、先ほどよりも真剣みを増した表情で念を押す。

『それは、わかつているな？』

「……はい」

テイクはその言葉の意味を理解し、しっかりとうなずいた。先ほどの子供じみた感情はなりを潜め、その表情はいつもの冷静なそれに戻っている。

『それなら一度だけ、私たちからのバックアップを受けてもらうわ』
父と姉は顔を見合わせ頷くと、レティがそう切り出す。

『オルティッド・バーン国連軍准将、レティ・バーン国連軍少佐、コードジット・ディーン元国連軍中佐の連名を持って、テイク・バーン国連軍中尉……貴官を”独自行動の段階的な許可を持つ”特務部隊員に任命します。以後、貴官はレティ・バーン国連軍少佐、つまり私の指揮下に組み込まれることになるわ』

『正式な辞令は、S L－C帰投後になるがな』

そうオルティッドが付け加えたところで、ようやくテイクが口を開くも、出てくるのは疑問ばかりである。

「転属……独自行動の許可って……しかし姉さ、バーン少佐はまだ昇進されたばかりだったはず。直下の特務部隊なんて」

『気にしないでいいわ。それにいったでしょう？これは上記三名の

連名により陳情され、国連からすでに認可を受けた辞令よ。それに、部隊員はあなた一人だけ。いつでも切り捨てられるようにしてあるから』

『それに見合うキャリアを積ませる為の仕事はやらせていたはずだ……不本意ではあるがな。心の整理をつける気があるのなら受け取れ、テイク。そして早く、こちらに戻って来い』

姉と父の慈愛に満ちた表情を受ける。

「キャリア……？も、もしかして、ここ半年世界中を駆けずり回させられていたのは……！」

『御明察。ショーン少佐にたきつけてみたら、二つ返事で乗ってきてくれたわ。なにやらとはさみは使いようってやつね』

「……母さんも、一枚噛んでいるんですね？」

オルティッドも苦笑している。テイクがそう聞くと、返ってきたのはイエスの返事だった。

テイクは、バーン家の庇護によらず功績を挙げることを良しとしていた。だがこの半年、母と姉の手のひらで踊らされていたという事実には呆れと驚愕を抑えられない。

（だが、これで……）

個人としても、軍人としても、これで整理がつけられるかもしれない。

『命令外の単独行動について、起こりうる一切にこちらは責任をもてないわ。軍装でないほうがいいかもしれないわね』

「了解」

姉の言葉に、テイクは答える。その様子を見て、オルティッドはやれやれといった顔でいった。

『まったく、私も最近、母さんからこのことを聞いたときはあきれたものが言えなかったぞ』

微笑みながらごめんなさい、とレティ。その様子に、オルティッドも呆れ顔だ。

『だって、父さんもテイクもこういう裏から手をまわすやり方は絶

対許せない性分でしょう？』

『まあ、そうだな。準備段階で持ちかけられていれば、断っていただろう』

でしよう？レティはそう一息おいて、真剣みを増した顔でテイクを見た。オルティッドも、そうだった。

『しばらくはこれで何とかなるでしょうけど、あまり長くは言い訳できないから、そのつもりでいなさい』

『さっきもいったが、バーン家が力を貸すのは今回だけだ。とはいえ、もとより頼るつもりもなかったのだろうがな。後はテイク、お前の好きにするといい。お前の席は、いつでも空けておく』

「父さん……姉さん……」

『テイク、これは私の、姉としての忠告だけど、正攻法だけが全てじゃないわ。せっかくいいい頭を持っているのだから、もっと回り込んだやり方だってあなたにはできるはずよ』

「了解しました。肝に銘じておきます」

『うむ。では私からも……っと、そろそろスケジュールが押してきたようだ。テイク、人には必ず限界がある。頼れるものを持つことは、けして弱さではないことを覚えておきなさい』

レティとオルティッドが暖かい表情でテイクを諭す。対するテイクも、決意を新たにした表情で二人を見た。

『うむ、ではテイク・バーン中尉。国連軍人として、その肩書きに恥じない働きを見せよ。健闘を祈る』

オルティッドがそう締めくくり、テイクは敬礼で返す。画面の向こうで二人も返礼し、そこで通信は切られた。

「……バーン准将」

電源の落とされたモニタを見たまま、レティが口を開く。親娘としてのものではなく、軍人然とした口調で。

「なんだね、少佐」

それに対するオルティッドも、軍人のそれだ。

「テイクのこだわるあの機体ですが……」

「ああ。何もかもあっさりしすぎている感が否なめんな。ああもあっさり奪取されたのもそうなら、こうもあっさり所在がつかめたことにしても。そして何より、軍の最新鋭機であったはずの、機密の塊であるはずのボックス・レフを、こうもあっさりと手放すなどとはな」

「国連軍上層部にしても、賊を逮捕しようという動きすら見せなかったようですし……」

レティは、コードジットがまとめさせたという報告書を流し読みしながら、言う。対するオルティッドも、やはり渋い顔だ。

「アイテア・タトゥーリ……」

オルティッドは、その資料に添付された強奪犯の少女の写真を見て、その名を呟く。長い銀髪を、いわゆるツインテールにまとめた青い目の少女にオルティッドは何か引かかるものを感じる。何処かで、この名を聞いたことがあるような……

「このただの一機の機動兵装に、国連上層部や軍、加えて何か、第三者が介入しているだろうことは、想像に難くないがな。なんにしても、キナ臭いにもほどがある」

難しい顔でオルティッドは、「いまのままではな」と、ある種の懸念を感じる。

「ええ。そうでなければ、テイクやコードジット中佐から……いえ、この『SL-C』から新鋭機の奪取などは望むべくも在りませんからね」

同調するレティ。ここSL-Cは、国連軍の中でももっとも警備の厳重な施設のひとつだ。そもそも、民間には公表すらされていない。

「テイクが、こちらの思惑以上に深く踏み込まなければいいのですけど。真面目ほど暴走しやすいと、昔から言いますし」

レティは再び姉としての表情を浮かべた。なんだかんだ言っても、

この家族はテイクに甘いのだ。

「全てを知ったとしても、テイクは関係なく動くだろう。今のあいつを突き動かすのは、目の前で自身の専用機が奪われたことへの悔しさだ。そうだな……俗っぽい言い方をすれば、恋人が奪われたようなものだからな」

「恋人？ テイクがですか？」

クスツと、レティが微笑する。

「例えだよ。少佐とて、ホワイトクロスが敵の手に渡ったとしたら、まるで恋人を取られたような気分になるんじゃないのか？」

「フフ、そうですね。ですが、私はあの子を誰の手に渡す気もありませんよ」

「あの子、か。少佐にとっては、恋人というよりも自分の子のような存在というわけかな？」

クツクツと、オルティッドが笑いをかみ殺す。

「そろでやめてください、准将。セクハラですよ」

「おっと、こわいこわい。ウチの長女様を怒らせるのは得策じゃないな」

おどけたように、オルティッドは言う。レティはくすりと笑う。

「だが、少佐。君には感謝しているよ。あのままだとテイクは軍を辞めかねない状態だった。ショナーのような軍の毒の下にテイクをおいておくのも一種の経験ではあると思ってそうさせていたが、そう長いことやつの部下に甘んじさせているつもりはなかった。いいタイミングだったよ」

「半年前、ブロックス・レフの登録が抹消されたり、テイクが激しく激昂しているのを見てね。最善の処理を行ったつもりなんですけど」

ふつと微笑してオルティッドは雰囲気のを和らげる。

「まったく、普通の軍人ならこんなことは許されないんだがな。私も、お前も、母さんも。ことごとくテイクに甘いようだ」

「テイクは、そんな私たちが嫌でバーン家の援助無しに軍でがんば

ると言い出したんでしよう？」

「おそらくな。まあ、私たちもテイクにばかりかまっていられるわけではないのが事実だ」

「……例の情報が本当ならば、地球圏はこれ以上ない混乱に包まれるでしょうね」

「ああ。まったく、妖怪だの怪獣などは、物語の中の存在だとかかり思っていたのだから。おかげでE G Fは国連内での地位を確固たる物にしつつある。新参者に実権を掠め取られるのがいい気分でないことはわかるが、最近リフィネスの機嫌がすこぶる悪いのは、どうにかしてほしいものだ」

オルティッドは、苦い顔だ。リフィネスというのは、彼の妻でレティとテイクの母親に当たる人物で、彼女も国連軍上級将校で階級は大将である。どうやら、急速に勢力を伸ばしつつあるE G Fとはそりが合わないらしい。

「眉唾物の話だが、なにやら黒魔術や錬金術などを研究している機関が台頭し始めているという話だ。よくはわからんが、今まで非現実と思っていた存在がこの世界に広がっているようだな。馬鹿げた話だ」

唾棄するように言う。

「父さん……」

「判らん……今は、何も判らん。お前も母さんも気をつけろ。近々、戦いが起こるかもしれないという心構えは持っておけ」

父の言葉は、重い。バーン家は、戦いに在ってこそ一族であるというのを、暗に示した言葉だった。

「わかってるわ。私もテイクばかりかまってられないものね。願わくば……」

「ああ、テイクが無事に事を成し遂げることを願おう」

二人の会話が切れたのを見て、レイカが歩み寄ってきた。

「准将、少佐。3時間後に東京にて対策委員会です。そろそろ……」
簡潔に今後のスケジュールを述べる。それだけでオルティッドは

うなずくと、誰とはなしに、むしろ自分に向かって呟いた。

「まずは、S T M……だな」

「S T M……ですか？」

揺れる軍用車の中、勇作は隣に座す戟の言葉を反芻していた。

「ああ。国連では『Space Titanic Monster』、略してS T Mと呼んでいる。意識すれば『脅威の宇宙怪獣』と言ったところか」

「宇宙怪獣、ですか」

現在勇作は、E G Fについての軽い説明を受けていた。軽い説明だけで、勇作の持っていた常識が全て持っていかれたような気になる。それだけ、驚愕の連続だった。

窓の外は、ビル街を抜け、荒涼とした荒地といった体を示していた。第4演習場と書かれた看板がさっきあったが、これがそうなのだろう。遠目に国連仕様の青い機兵、U N - S P R C - 116 M スプリガンが飛行しているのが目に入った。

「さっきも言ったが、E G Fの目的はそのS T Mの侵略から地球圏を死守することだ。なにぶん未知の相手なのでな、E G F内での業務は多岐にわたるが、俺たちはその中でもいちばん矢面に立つ機会の多い役職……つまり、侵攻して来たS T Mを力づくで排斥するために存在する戦闘部隊だ」

当然、死ぬ機会も今までに較べてどっと多いと、あっけらかんと言いつつ。

「なかなか大変そうな職場だ」

「ほう、疑わないんだな」

勇作が、ため息混じりに呟くと、戟が少し驚いたように問う。

「にわかには信じがたい話ですが、自分ごときをだます意味もありませんか」

「それも、そうだな」

苦笑して、戟。そろそろ長かった演習場のエリアを過ぎ去る頃だった。二機同士で編隊を組んだスプリガンが、勇作らの頭上をフライパスしていく。偶然にしろ歓迎の挨拶にしては上々だ。

「詳しくは本部についてから説明するが、お前の任務は概念実証機のテストパイロットだ。もちろんSTMとの戦闘が発生すれば、それが優先されるがな。」

「まだ、戦闘にはいたっていないと？」

概念実証機のテストパイロット。この言葉に勇作の心は躍る。テストパイロットといえば、相応の技量が必要とされる役職だ。ロボットを動かしたい一身体で入隊した勇作にとって、これほど嬉しいものはないが、なるべくそれを顔に出さないように、もうひとつ気がかりになっていたところを質問してみる。

「ああ。初めてその存在が確認されてから一年間、やつらの侵攻は確認されていない」

「EGFという名前を聞いたことがないと思っていたら、そんな最近できた機関だったんですか」

それにしても規模がでかいな、などと考えるも、戟はそれをやりわりと否定した。

「いんや、EGF自体が設立されたのは一年前だが、その母体となった組織は16年前から存在している」

なるほど、そこそこに歴史のある組織ではあるようだ。と、そうこういつているうちに、車は司令部のそれよりもやや小さめのビルの前にとまっていた。どうやら、着いたらしい。なんだかんだで車で20分近くは走ったのだろうか、正面ゲートから考えるとさらに奥だ。それだけ機密の高い組織なのだろうな、と勇作は思う。

「さて、佐藤勇作中尉。あらためて、われわれEGFは貴官を歓迎する」

——エッジワース・カイパーベルト宙域

暗闇が支配する真空の海を、8隻の宇宙船が静かに進んでいた。

『外宇宙調査船団プローヴス』。地球の科学者たちが有人での太陽系外探査を夢見て作り上げたその船団は、ようやく太陽系の最外縁部たるエッジワースカイパーベルトと呼ばれる微惑星帯を突破しようとしていた。出発から足掛け2年、構想の段階からでは20年近い時間を費やして、ようやく人類は太陽系の外へ足を踏み出そうとしているのだ。

『聞こえるか、こちらプローヴァー・ワン。右奥10,000kmにセレスを確認した。ベルトを抜けたらしい。繰り返す、ベルトを抜けたらしい』

その音声が数十分の遅れをもってとどいたとき、種子島国連宇宙開発機構本部の管制室は大歓声に包まれた。人類が初めて太陽系外に足を踏み出した記念すべき一瞬として、それは世界中にライブで流された。

「こちら管制、こちら管制。太陽系の外の様子はどうか」

管制官が、さりとて意味のない質問を投げかける。プローヴァー6に取り付けられたカメラからは、特に変わりなく宇宙の映像が映し出されていた。

『な、なんだ、あれは……う、うわああ！こっちにくる！』

『か、かわせえええ！』

『駄目です！よけきれま……！？』

だがしかし、プローヴァーから返ってきたのは、「美しい」だの、「感慨深い」だのといった言葉ではなく、驚愕と怒号のそれであった。そしてそれが途中で切れたかと思うと、後はノイズしか届かなくなった。

歓喜でいっぱいだった管制室は、一瞬で恐慌状態となった。即座にライブ中継は打ち切られ、その後プローヴァー船団は4がエンジントラブルを起こし、1に衝突。その後玉突き的要領で連鎖的にぶつかり、船団は全滅したとの発表が、国連宇宙開発機構からなされ

ることとなる。ちょうど、1年前の話だ。当時相当の物議をかもし、一日に何度も特番が編成されたほどの大事件であったが、遠い宇宙の彼方での話では確認のすべもなく、一年という月日はそれを過去のものとするのに長い時間ではなかった。

だが今、勇作のしている映像は、そんな彼の認識を根底から覆すものであった。

「こ、こんなことが……」

思わず勇作の口から言葉が漏れる。スクリーンに映し出される映像でいま、プローヴァー4から火柱が上がるのが確認できた。

エンジントラブルによる爆発ではないことは、宇宙船の航行機関に詳しいわけでもない勇作の目から見ても明らかだった。爆発が起きたのは宇宙船の艦橋部、エンジンがあるのは中立軸を挟んでその反対側だ。ではなぜ、いきなり艦橋が爆発したのか？

「これが……STM！」

目を凝らしてみれば、爆発した艦橋外壁に点のようなものがこびりついているのがわかる。プローヴァー型宇宙船の全長が200m程度であるから、そこから考えて全長15m、全高3mほどの何かが、外壁に貼りついているのだ。

と、その何かの先端がチカと光り、その次の瞬間には艦橋部を含めた船の前半分が吹き飛ぶほどの爆発になった。

画面で確認できるだけで、それが4つ。その四つの何かに、今人類の英知の結晶が破壊されようとしているのだ。

コントロールを失った4は旗艦である1に衝突、直後今度こそエンジンが暴走したのだろう、宇宙に大きな火球を作る。

と、そこで画面は急旋回した。船外カメラを取り付けてある6が、地球に向けて転進したのだろう。だが、それで逃がしてくれるほど甘くなかった。カメラが大きく揺れる。攻撃を受けているのだ、と勇作が思った刹那に接続部が壊れたのだろう、すごい勢いで遠ざかっていく6と、それに群がる何か、そして最後に画面いっぱいに能面のような白い”顔”が映し出されて、映像は終わった。

「と、こういった感じだ。で、どうだ？今まで知りえなかった情報を知った感想は」

部屋の電気をつけて、戟は半ば放心しているような勇作に問うた。
「……コンピュータ・グラフィックスじゃ、ないんですよ」

「ああ、事実だ」

今のCG技術は本物よりもすごいからなあ、などとよく判らないことを考えながらいってみるも、やはり冗談の類ではないようで、素直に「正直、困惑してます」とだけ言った。

「まあ、それが普通の反応だな」

そういいながらも戟は端末を操作して、違う画像をスクリーンに表示させていた。

「これが、さっきの映像から再現されたSTMの三面図だ」

映し出されたそれは、精巧な3Dモデルと、その三面図だった。

特徴を述べるならば

「まるでトカゲですね」

「ただのトカゲならばよかったんだがな」

その暗緑色の体に、えらのような器官がみえた。体は縦に細長く、尻尾の先や手足には鋭利な刃物を髭髯とさせる爪が見られた。しかしなんと言っても異質なのは、その頭部だろう。真横から見ると、トカゲの頭だけをすっぱり切り落としたように見えるほどのっぺりとしたもので、体色とは異なり白い。その中央には横に黒いスリットのようなものが入っており、そこから赤く輝く単眼が顔をのぞかせている。まるで仮面だと勇作は思った。

「こいつらがプローヴァー船団に接触してからそれを全滅させるまで、10分にも満たなかったと推定される。いかに非武装の宇宙船とはいえ、自身の10倍以上もあるものをその獲物の数の半分である4匹で壊滅させたんだ。どれだけ非常識な相手かは、言わずともがなつてところだな」

確かに、すさまじい戦闘能力を持っているのはわかる。それに加え、真空であるはずの宇宙でさえ意に介さず縦横無尽に暴れられる

というのは、その生命力だけでも恐るべきものだ。

「そして、こいつらが地球にやってきた場合、それを撃退するのが俺たちの仕事だ」

次に戟が表示させたのは、見慣れぬ機動兵装の図だった。

「これは……」

それはスプリガンに比べて、骨太な印象を受ける姿だった。全体的にゴツゴツとした姿で、特に肩部装甲のポリウムはスプリガンのそれに比べて2倍近くはありそうだ。背部にはコンテナに見えるほどの大型のバックパックをしょっている。頭部には耳のようなプレート状のセンサーマストが一对装備され、額にあたる部分はセンサーカバーだろうか、大きく前面に張り出すようなデザインで、帽子をかぶっているようにも見える。視線を下に移せば、腰のサイドアーマーがホルスターのような意匠を持っており、そこから左右一本づつ、ナイフの柄のようなものが飛び出していた。脚部はそれに比べてスマートな印象を受けるが、スプリガンのものと比べれば2割から3割ほど太くなっているのだろう。脹脛にはスラスターの類が見え、腰のホルスターに差す獲物から見て、この機体は近距離戦闘に重きを置いたものなのだろうかと考えが及んだ。

「UN—AL—001アルデバンサー。EGFの開発した、時期国連軍主力量産機のプロトタイプになる。お前にテストしてもらおう機体だ」

「自分にですか!？」

では、これがさっき言っていた概念実証機なのだろうか。そう考えると、スクリーンに写る機動兵装を見る目も変わってくる。

「早速今日から訓練に入ってほしいところではあるが、他の部隊員への紹介もあるしマニュアルを読む時間もほしいだろう。本格的な訓練は明日からとする」

「り、了解!」

「うむ、というわけで……」

そこで戟は入り口のほうを見やる。何事かと思って勇作もそちら

を見るが、ドアがあるだけだ……いや、少し隙間があいていた。

「お前たち、いつまでそんなところで聞き耳を立てているつもりだ。さっさと入って来い」

戟の言葉を待っていたかのように扉が開かれ、そこから二人の男女が入ってきた。女のほうは赤みの少々強い茶髪をストレートに伸ばており、顔立ちは日本人のそれだった。パツチリした目と健康的な色をした唇は快活そうな印象を受ける。引き締まったスタイルのいいその身を国連軍の制服に包み、階級章は中尉を示している。男のほうも日本人だった。短く切った黒髪に面長の顔で、しかしその瞳はどことなく鋭い。無駄のない筋肉質な体をしているのが制服の上からでも見て取れ、何か武道でもたしなんでいるのだろうかと思作は考える。階級は少尉だ。

「燐はともかくとして、夕介までのぞき趣味に走るとはな」

「い、いえ……これは燐中尉が新入りの顔を早く見たいといって聞かなくて無理やりですね……」

「ちよっと兄さん、私はともかくってのはどういうわけ？」

戟のそれに対し、夕介と呼ばれた少尉は精一杯否定し、燐と呼ばれた中尉はぶーたれた。そんな様子を見て、勇作は一人ぽかんとしている。

「まったく……まあ、呼ぶ手間が省けただけよしとするか。すまんな、勇作。まあ、ここはこんな感じでな、早く慣れてしまってくれ」苦笑しながら戟が言うが、勇作は気の抜けた返事しかできない。

軍とは関係ない組織らしいが、ここまでフランキーでいいものなんだろうか。

「あゝ！あなたが新入りさん？ふうん、資料で見るよりはいい男じゃない」

「ち、中尉！初対面の人に向かって何をいきなり言ってるんですか！ちよっとは自重してください！」

「二人とも、転校生が来たときの小学生か？少し落ち着け」

戟が穏やかに一喝する。するとまあ何とか興奮していた二人、と

「うか女性のほうは落ち着いてくれたようだ。さすがに上官命令には従うらしい。」

「まったく、はしゃぐのはいいが、まずは自己紹介くらいしろ。あ、俺は車の中でしたからパスね」

「そういう問題なんだろうか。」

「ま、それもそうね。私は榊原燐、長ったらしいから省略すると、E G F第一戦闘試験小隊所属で階級は中尉、よろしくね。ちなみに趣味は運動、空手の段とかも持ってまーす」

「燐中尉、もうちょっとまじめにしてくださいよ。あ、自分は同小隊所属、真道夕介であります。よろしく願います」

「二人が自己紹介を終える。どうやら真道は突っ込み役らしい。いや、そんな役があるのかは別としても、この隊でいちばん真面目そうだし、苦勞していそうだ。」

「佐藤勇作、階級は中尉だ。今日からよろしくな」

「先ほどもさっさと慣れろといわれたところだ。そうおもってなるべく碎けた風に、勇作も自己紹介する。」

「よろしくね。階級も同じだし、私のことは燐でいいわよ。榊原だと兄さんと混同するし、あんまり固いのもあれだしね」

「俺のことは隊長とでも呼んでくれ。あ、お義兄さんとかはだめね。まだまだ妹はやれん」

「ちょ、兄さん、いきなり何を……!」

「口を挟んできた戟と燐がぎゃあぎゃあ言っているのを傍目に、夕介のほうを見る。目が合うと、彼もやれやれといった感じで苦笑していた。」

「し、しかし、兄弟で同じ隊ってのは、なかなか珍しいですね」

「何とか話を切り出す勇作。こんなご時勢だし、女性が軍に入隊しているのだって不思議ではないが、兄妹そろってと同じ部隊というのは稀有であろう。まあ、ここがE G Fという組織であるからなのかもしれないが。」

「ま、いろいろあってな」

劇は、それだけ言った。それ以上は聞くなということなのだろう。「ねえ、勇作もE G Fにスカウトされたってことは、相当腕が立つのよね？」

「あ、それは自分も気になります」

みれば、戦との口論を終えた燐が、今度はこっちにまた興味を向けてきたようだ。夕介も、そこは興味があるらしい。

（確かに、部隊員の能力は気になるよな）

足手まといだったら、勘弁願いたいというのが彼女らの本音なのだろう。しかし、どういったものか。

「こいつは優秀だって話だぞ。なにしろ、機兵適正は歴代トップ5、オーストラリア戦線に駆りだされて生きて戻ったそうだしな」

オーストラリア戦線というのは、現在の政治機構に反抗するテロリストたちの最後の居城となってしまったオーストラリア大陸を開放するために起きた戦争であり、敵味方とも機動兵装のあふれる戦場は地獄絵図だったと参戦者は語るほどだ。それを、生きて帰ってきたのだという。

「ほ、本当ですか!？」

「ひゅー」

流石に二人とも感心しているようだ。だが、勇作らの隊が戦場に着いたのは終戦間近で、彼も銃火を交えたのは味方の撤退支援一回だけであったのだが。

「いや、大げさですよ」

「だが、事実さ。E G Fがお前の機体制御技術に期待してるのな。ま、しっかり働いてくれや」

戦はそうまとめて、ブリーフィングルームを後にした。その後まあ勇作は二人にいろいろ質問攻めにされたのだが、それは特に語ることもないだろう。

日が沈み、夜の帳が落ちると、それまで演習などでにぎやかだった

た基地もどんどん静かになっていく。かわってどんどん賑やかになっていくのが、基地の中に数箇所設けられた歓楽街だ。

「えー、では。佐藤勇作中尉の着任と、これからの隊の安全を祈って、乾杯！」

その一角、戦たちがひいきにしているという居酒屋でいま、ささやかではあるが勇作の歓迎会が執り行われていた。戦の音頭に合わせて、琥珀色の液体がなみなみと注がれたジョッキがかち合い、ついでそれを溜飲するぐびりぐびりという音がテーブルを支配する。

「っはあー！うまい」

真っ先にそういったのは、燐だった。すでに半分ほどになってしまったジョッキをテーブルにたたきつけるようにおき、袖で口をぬぐう。

「ジョッキ半分で顔真っ赤じゃないか。大丈夫なのか？」

ついで勇作が燐の顔色を見ていう。いい飲みっぷりではあるが、もうすでに耳まで真っ赤になっている。

「へ？だいじょぶだいじょぶ！それより勇作くあなた、そんなちびちび飲んでないでもっと豪快にいきなさいよ」

真っ赤なだけでなく、もうすでに出来上がっている。まだ乾杯の音頭から一分も経っていないというのに。

「さあ、夕介君！バックアップ！」

「り、了解！」

「う、うわ！ちよ、ま……」

酔っ払いというのはすべからくとつぴな行動に出るものだ。何で夕介まで乗ってきているのかはわからないが。

「ゆ、夕介！何でお前まで！」

「ここのしきたりみたいなのですのぞ！」

そういつて夕介は、背中側から脇に手を回してがっちり勇作をホールドする。唯一の常識人だと思っていたのだが……お前もか！「ま、そういうことだ。あきらめろ」

救いを求めるように戦を見るが、戦はその状況を肴にとでも言う

ように、ニヤニヤとちびちびやっている。援護は望むべくもない。

「さあさあ勇作、飲め！ 呑め！ のめえ〜！」

いつの間にやら瓶ビールを手にした燐が、にじりにじりと勇作に近づく。もがくにも、流石に剣道で鍛えたというだけある。夕介にすっかりホールドされてしまつて、逃れることはできない。

クイ、と顔を上げられたかと思うと、鼻をつままれ、直接口にビール瓶が突っ込まれる。いわゆるラッパ飲みというやつで、瓶の中の液体がどんどんと勇作の胃袋の中に納まつていく。

「あつはつはつは！ いい！ いい呑みっぷりよ勇作！」

そんなことをたまう燐は、はたから見たら危ない人だ。酒一杯でこうも酔っ払えるというのは、なかなかいい性格なのかも知れんな、などと勇作は考える。その間にもビールはどんどん注がれている。

「り、燐中尉！ そろそろまずいですよモガフ!?」

「ほらほらあ！ 夕介君も飲め呑めえ！」

瓶の3分の2ほどが勇作の胃袋に消えたところで、流石に青い顔になって夕介。勇作は何も言わないし、もしかして急性アル中でやばいんじゃない、などと考えていると、今度は矛先が夕介に向いた。いきなりのことに対処しきれず、そのまま口にビール瓶を突っ込まれる。

拘束が解けたのを今が好機と脱出する。燐は完全に次のターゲットを夕介に定めたようで、あふれんばかりのビールを夕介に注いでいた。自分は自分で、残っていたジョッキをどんどん片していっている。

「隊長は、参加しないんですか？」

ほうほうのていで逃げ出してきた勇作は、いまだ続くその光景を見ながら聞いてみるが、戟は出されたチョリソーをつまみながら、

「いやだね。俺はあまり酒が好きじゃないんだ」

とこともなげに言う。確かに、乾杯の時点からそこまで彼のジョッキは減っていなかった。

「それに……そうだな、後1分で終わるだろ」

そんな勇作らを尻目に、ちょうど同じ居酒屋でちびちびやっている男がいた。

「金堂中尉でしたか？自分に用とは一体……」

横に座るテイクは男に問う。

「まあ、そんなにあせる必要はありませんよ。あなたの探し物について、ちよつと忠告があるだけです」

金堂と名乗った男は、見た目からするとまだローティーンの少年のように見える。実際中学校の制服のほうが、国連の制服よりも似合っているのではないかと思うほどだ。だが、その制服には中尉の階級章が縫い付けてあったし、彼の発する気配はどうも堅気のそれではなかった。22だと彼は言ったが、それにしても場違いなほどに気配が鋭く感じる。

「探し物……なぜ、中尉はそれを？」

金堂の言葉に、テイクは警戒心をあらわにする。彼の探すものといえば、ブロックス・レフに他ならないからだ。

「いろいろとありましてね。あれには、僕の知り合いも関わってましたから。だからこそその忠告です」

「……」

テイクは、無言で構える。何か、途方もないものをこの男から感じたから。

「ははは、そんなに身構えないでくださいよ。別に僕はあなたの邪魔をするつもりはありませんし、あなたにとっても悪い話ではないはずだ」

金堂は、まるで少年のような笑みでテイクを見る。

「今日あったばかりの人間を、すぐに信用しろというほうが無理があるでしょう」

テイクはいまだ身構えたままで、探るように言葉をつむぐ。だが、

金堂は「そうですね」とあっけらかんと言ってから、続けた。

「まあ、聞いていただけないのならそれでもいいです。でも、独り言くらいは言わせてください」

そういつて彼はグラスを置く。中の水割りは空になっていて、氷がカロン、と鳴った。

「あれを狙っているのは、あなただけじゃない。そして、ブロックス・レフというのはあの機体をさしているわけでは無い。この世には科学では説明がつかないような事柄が、一步裏に入り込むだけであふれています。……ゆめゆめ、油断されないことです」

金堂はそう言い残すと、カウンターに代金を置いて席を立った。

「それは、どういう……!」

その言葉の真意がつかめずテイクも後を追おうとするが、居酒屋の玄関を抜けたところで、金堂の姿はもう無かった。

「どこへ……」

居酒屋の前は、歓楽街のメイン・ストリートだ。広い道は、遮蔽物がそう多くなく、見通しが利く。それなのに、金堂の姿はどこにも無い。まるで風に掻き消えたようで、金堂が最後に言った言葉が頭をよぎる。

”この世には科学では説明がつかないような事柄が、一步裏に入り込むだけであふれています”

科学では説明がつかない、それはなんだ？魔法や、妖術といったものは古くから唱えられているが、この科学文明の下に数百年前から否定されている考え方だ。そして、それとボックス・レフに何のかかわりがあるというのか？

(……馬鹿らしい)

自分の途方も無い考えを唾棄する。金堂は背が小さかった、だからすぐに通行人の影にでもまぎれてしまったただけだ。そうに、ちがない……

そういえば、まだ代金を払っていなかった。そこに思い至ったテイクが暖簾をくぐるのと同様だった。奥のほうから何かが割れる音

と、悲鳴のようなものが聞こえてきたのは。

「お帰り、シヨタ君」

「……千春、シヨタはやめてくださいと何度も」

金堂は、目の前で桃色の髪をもてあそぶ少女に辟易としたふうに懇願した。まあ、聞き入れてはもらえないだろうが。

「もう、まずはしっかり転送してあげたことのお礼を言ってくれてもいいと思うんだけどな？」

千春と呼ばれた少女は、多少むっとしたように言う。

「あ、ええ。完璧なタイミングでした。ありがとう」

「へへへ」

改まって金堂が謝辞を述べると、千春はてれたように笑いながら彼の腕を組む。普通こんな美少女にくつつかれて悪い気もしないものだが、金堂の表情はさえない。

「……あまり引っ付かないでください。男同士ですよ？」

「固いこといわないの、シヨタ君……それで、ブロックス・レフだけど、『探求』ではこれ以上の追跡はしないことにしたそうよ。ヘルモントの爺さんから直々にお達しがあったわ」

「そうですか。まあシオ君のこともありますし、われわれもあれもこれもといかないのはわかりますが、ブロックス・レフは”純正”ではなかったと？」

男、の部分は言及しないでおう。それ以上に、真剣みを帯びた二人の会話はきな臭いものだった。

「さあ、それはわからないわ。けど、伝承の存在が現れたんですもの。『探求』がそっちに重きを置くのは仕方ないことじゃなくて？」

「人類に英知を授けた存在……本当にそんなものが存在していたとは、今でも驚きですよ」

「あら、もうこっちに來て長いのに、シヨタ君たらまだそんなこといってるのね」

「スケールが大きすぎると、やはりまだ抵抗があります」

くすりと千春が笑う。金堂はいたってまじめに応えた。

ウイドレス

（英知を授けるモノ、か……シオ君、がんばれよ）

金堂は、遠くでせっせとやっているだろう同僚に、人知れずエールを送るのだった。

何事かとテイクが声のしたほうへ駆け寄れば、そこには床に頬をこすりつけて突っ伏す男と、それに折り重なるように仰向けで目を回している女が目に入った。言わずもがな、燐と下敷きになっているのは夕介だった。

「1分46秒か……まあまあもったほうだな」

「れ、冷静すぎやしませんか。隊長」

そんな声がして目をやると、そこにはストップウォッチ片手にちびちびやっている戦と、慌てているというよりは戸惑っているといった感じの勇作が、こちらもジョッキをちびちびやっていた。

「しかし、なかなかザルだな、お前も。燐の熱烈歓迎で倒れなかったのははじめてかも知れん」

「昔からよく言われます。俺に酒を出すのはもったいないとか何とか」

「フ……肝に銘じておこう」

「いや、早く衛生兵を呼びましょうよ」

「誰かと思えば……何をやっているんです？ 榊原大尉」

しまいには夕介が泡を吹いているが、戦も勇作も悠長なものだ。見かねたテイクが半ばあきれたように割ってはいる。

「おやおやこれはバーン中尉。奇遇だな」

「あ、あなたは今朝の……」

やっとテイクに気付いたのか、戦が片手を挙げる。勇作は会釈するにとどまって、とりあえず店の電話を借りることにした。

「まったくですよ。今朝方はお世話になりました」

少しの皮肉を含んだ口調で、テイク。戟はそれをあっさり聞き流すと、「探し物が見つかったようだな」とだけ言った。

「どうしてわかるんです？」

とりあえず泡を吹いている夕介を楽な姿勢に寝かせて燐を持ち上げながら、テイク。

「お前さんの顔を見ればわかる……と言ってみたい所だが、まあ耳が早いんでな。俺は店長に話しつけとくから、ちよつとそいつら宿舍までもっていくの頼まれてくれないか、中尉」

戟はそういつてテイクの返答も聞かずに立ち上がると、つかつかと居酒屋の親父のところへいつてしまった。

結局医務局に連絡したら、あからさまに「またか」という顔をされた。受付の医務官には診察の必要は無いだろうと言つて電話をすぐに切られてしまい、なんと言うか、あんまりといえばあんまりだ。仕方が無いので車をまわしてもらい、素面だったテイクに運転を任せ宿舎に向かつて夜道を走っている次第である。

「いやあ、すいませんバーン中尉。ウチの隊員が迷惑かけてしまつて」

「たった一日で、ずいぶん溶け込むものだな」

心底申し訳なさそうな勇作の態度に、あきれたような、はたまた感心するようなふうに、運転席に座るテイクは返す。

「そうですね。まあ、この部隊が気安い感じがあるっていうのはあるんでしょけど」

勇作は、多少遠い目になって言う。

「……E G F、だったか」

「御存知なんですか？」

ぼそりとテイクが呟く。見たところE G Fの人間ではなさそうだし、機密度の高い組織のはずだが、この中尉はその存在を知っているらしい。少々いぶかしげな表情で、勇作は聞く。

「詳しいことは知らないが、教導隊にいたとき、名前ぐらいなら聞

いたことがある」

「教導隊……てことは、中尉ってかなりのエースパイロットってことですかね？」

新装備の試験をおこない、他の部隊にその教導を行うのが教導隊の主な任務だ。他の部隊の古参をねじ伏せれるだけの実力が無ければ、務まらない仕事である。この歳若き中尉は、どれほどの実力者なのだろうか。

「いや、エースってワケでは無いだろうな……私の実力なんて、まだまだだ」

謙遜というふうでもなく、テイクは言う。

「いつか、お手合わせ願いたいものです」

勇作は、冗談交じりに提案してみる。口ではああいつているが、相当の実力者であろうと踏んでの発言だ。ロボット乗りの本能とも言うべきか。

「機会があればな」

微笑してテイクは応えた。

「……佐藤中尉は、軍は長いのか？」

世間話でもしようといったふうに、テイクがたずねてきた。

「そう、ですね……18の時に志願して、訓練校時代を入れるなら、もう7年になります」

「！し、失礼。先達に向かって不遜な口を」

7年と聞いて、テイクは今までの言葉遣いを謝罪した。いささか不遜にすぎると感じたからだ。テイクは、まだ入隊してから3年と経っていない。

「いや、かまいませんよ。今でこそ中尉ですが、おとついまでは少尉でしたし。バーン中尉のほうが先任ですから」

苦笑して、やんわりと勇作。テイクもそういわれて納得する。勤務年数や年齢ではなく、結局階級が物を言うのが軍隊というところだ。もっとも、勇作は厳密には軍隊ではないのだが、特に言及すべきところでもないだろう。

「佐藤中尉は、何で軍に？」

次いで、テイクが聞いてきた。当たり前障りの無い質問だが、勇作は少し考えてしまう。

「うーん、そうですね……たいした理由じゃ、無いですね。俺は、ロボットが好きなんですよ」

「ふむ……それで？」

「あ、いや、それだけです。俺は、ロボットが好きだから軍に入っ
たんですよ」

勇作はそういつて照れくさそうに頭を掻いた。やはり、単純すぎる理由だと自覚はしているのだろう。

「それはいいな、シンプルで」

対してテイクは、笑いを噛み締めながらどことなくうらやましそうな口調で言った。「バーン家の嫡男だから」という理由が全てのテイクにとって、勇作の答えは魅力的だった。

「こんな俺みたいな考えのやつが生き残って、地球を平和にしたい
とか思ってたやつがすぐに逝っちまうんだから、ままならないもの
です」

遠い目で、苦笑するように言う勇作。かつてのオーストラリア戦
線で、彼は幾人もの戦友を亡くしていた。その言葉の重さに、テイ
クも押し黙る。そして、自分はどうなのだろうと考える。

「つと、すいません。辛気臭くなってしまいましたね」

と、勇作。「いや、いい」とテイクは短く答える。話題と雰囲気
を変えようと勇作がしりとりを持ちかけ、テイクもそれに応戦し、
くだらないことをやっているうちに宿舎の前についていた。

「バーン中尉、今日はどうもお騒がせしてしまって」

まだ酩酊状態の燐と夕介に肩を貸して立たせながら、勇作はテイ
クに謝辞を述べた。

「気にしないでくれ。それに、今日はいろいろ面白い話も聞けた」
テイクは勇作に頭をあげるように言うと、また車に乗り込んでい
った。

「また、機会があればな」

去り際にテイクはそういつて、勇作らの乗ってきた軍用車はすぐに見えなくなった。

「さて……と」

それを見届け、勇作は人二人分の重さをほとんど担いで宿舎に足を向ける。戟から部屋の位置のメモとマスターキーはもらっているが、自力で歩くこともままならない酔っ払い二人を担いでそこまで歩くというのは相当に骨だな、勇作は一人小さくため息をついたのだった。

（あ、俺の部屋の荷物もまだ片付けてなかったっけ）

ラジオ体操という体操がある。

これは二十世紀に日本で発祥したという体操で、二十世紀現在もほとんど変わらずに残っている体操だ。

国連軍九州基地第12演習場の一角に、その軽快なピアノ伴奏が流れていた。

が、体操をしているモノは、人にしてはあまりにも大きかった。爪先から頭の先まで、20mはあろうかという鋼鉄の巨人が、ピアノ伴奏に合わせて飛んだり跳ねたり捻ったりしている姿は、間近で見れば迫力満点ではあるが、遠巻きに見れば非常にシユールな映像だった。

そしてそれは、昨日戟が勇作に見せた機体である。名を、アルデバンサー。

「AL01002、間接部負荷正常値。BWSフィールドバック率60%」

「フレーム耐久率0.23%低下、許容値以内です。脚部アクチュエータ磨耗率も問題なし」

「主腕間接部対モーメントアブソーバー、正常起動中。スウェイキ

ヤンセラー稼働率良好」

体操を続ける機動兵装、アルデバンサーの後方200mに待機した情報収集用のトラックの中では、アルデバンサーの一挙一投足が逐一モニタリングされていた。

現在、勇作のアルデバンサーに対する適正と激しい機動を行った場合のテストを兼ねてラジオ体操を行っているのだが、モニタされる数値のどれもが上出来な結果を示していた。

「上々だな」

その様子を見て、戟は御満悦のようだ。さすが、EGFの人事部は間違いが無い。その間にも、勇作は体操のメニューをそつなくこなしている。

「大尉。AL01002、機動応用課程Aを消化しました。Bへ移行させますか？」

「いや、休憩を取らせよう。慣れない機体だ。精神的な負荷も高いはずだからな」

そうこうしているうちに勇作は機動応用課程A、つまりラジオ体操第一を三セット終わらせたらしく、オペレータが次の段階への移行を提言するが、戟はバイタルモニタを見つつ待ったをかける。

「了解」

戟の命令を素直に受け取ったオペレータは、すぐさま勇作に10分間の休憩に入るように指示を送っていた。

「よう勇作、調子はどうだ」

コクピット内で一息ついている勇作に、戟は通信を送った。モニタに映る顔は、汗こそかいているものの軽くスポーツで汗を流した程度のもののように、特に表立った問題はなさそうだ。

『スプリガンに比べてかなり即応性があがっているのです、最初は制御に苦労しましたが、今では何とかやれます』

「まあ、今のうちに癖をつかんでおいてくれ。午後からはシミュレーターで模擬戦だからな」

勇作としては、手ごたえは上々といったところだ。午後のシミュ

レータでは対STM戦闘の基礎課程と戟を相手にした対人戦闘訓練がある。癖をつかむのなら、今のうちだ。その点ラジオ体操はさまざまな動きを取り入れているため、それを知るのに役立った。

『了解』

勇作はそういって、戟との通信をきった。

午前の訓練が終わり食堂で昼飯をかつ込んでいると、ものすごく疲れた顔をした燐がやってきた。事前に半休を取っていたそうだが、これならいっそ全休にしたほうがよかったのではないだろうか。

「そんな悠長な真似はできないわ」

そういつてみると、燐は心底疲れたといった口調ではあったが、そう返してきた。そういいながらも頭を抑えているところを見ると、まだ二日酔いが抜けていないらしい。

「そんなになるのがわかってるんなら、飲まなきゃいいんじゃないか？」

勇作は彼女の体たらくを見てあきれたようにいう。燐は口を尖らせてぼそぼそと反論しているが、聞こえない。たぶん大声は頭に響くのだろう。

「そんなんで、午後からの訓練大丈夫なのか？」

「……アルコール分解する注射打ってきたから、後30分ぐらいで回復すると思うわー」

心配する勇作に、燐は手をひらひら振って力なく言うのであった。本当に大丈夫なのかと勇作が思ったとき、突如基地内に大音響のサイレンが鳴り響いた。とっさに燐が頭を抱える。相当きいていそうだ。お構い無しに、これまた大音響でアナウンスが流れる。

『非常事態発生、非常事態発生！基地職員ならびに戦闘員は速やかに持ち場に着け。繰り返し、非常事態発生……！』

「状況は？」

『現在、敵落着ユニットは第26演習場に落下。訓練中だった第16守備部隊が迎撃に当たっていますが、不意打ちに近い襲撃で損耗が激しく、撤退を要請しています』

「ちようどいい。撤退をE G F指揮官権限で許可する。で……敵の規模は」

『プローヴァーを襲撃したものと同一と見られる個体が5、落着ユニットより発生しました。増援の可能性は低いかと』

自らの乗機であるアルデバンサー1号機の中で、戟は状況を吟味していた。国連軍部隊の撤退に関しては渡りに船とも言うもので、まだ衆目にさらす段階ではないアルデバンサーの”実働試験”にはもってこいな状況だ。

（しかし……こうもたやすく感付かれるとはな）

冷静を保とうとはするものの、心の底からわきあがってくる焦燥感とイラつきをとめることはできない。まさか、こんなに早い段階で敵に悟られるとは、流石の戟でも予想外であった。

「こちらの準備ができ次第、16守備部隊の援護に向かう。偽装外骨格の装備状況は」

『一号機は完了、2号機も後200秒で完了します！それより……』

戟の問いに答えたのは、現在急ピッチでアルデバンサーに偽装外骨格を装着する作業の指揮を執る新庄整備班長だ。作業自体は滞りなく進んでいるようだが、彼はちらりと二号機を見やり、言いよどむ。

「勇作なら、問題ないだろう。アルデバンサーを使いこなせるだけの技量はある」

新庄の懸念を察し、戟はそういきった。午前の試験の結果を見てもそうだし、長年ロボットを操ってきた彼には何か直感じみたものがあつたからだ。

『初出撃で壊されちゃ、こっちもたまりませんからね。まあ、大尉

がそう仰るほどなら、こっちも大船に乗った気持ちで任せられるっ
てもんです』

新庄はそういつて一礼すると、通信をきった。アルデバンサーの
コクピットにいても、整備班の喧騒が聞こえてくるようだ。戟は自
分も一息ついてから、今度は勇作に通信ウインドウを開いた。

「メーター類異常なし、セレクター正常、スウェイキャンセラー正
常……各部問題なし」

アルデバンサー二号機のコクピットで、勇作は何度目になるかわ
からないチェックを行っていた。実戦は初めてではないが、未知の
生命体などという得体の知れないものと戦うのは当然今日が初めて
だ。緊張しないほうがおかしい。

（そもそも、戦いに慣れるってのもいやだけどな……）

その緊張をどこか肯定しつつ、彼は出撃のときを待つ。カメラか
ら入る映像では、大勢の整備員がアルデバンサーにスプリガンの装
甲板をかぶせているのが見て取れた。機密維持の意味合いが強いが、
追加装甲を取り付けることでわずかばかりとはいえ生存率も上がる
のだからあながち無駄ではないだろう。

『勇作、どうだ、今の気分は』

と、そこへ戟からの通信が入った。部下を心配しているというよ
りは、何かを探っているような口調に感じられる。

「流石に緊張してはいますけど、問題は無いです」

『そうか、何ならその機体、降りてもらってもかまわんぞ？』

正直に今の心境を伝えると、戟から返ってきたのはそんな意地の
悪いものだった。もしくは、冗談めかしているだけでそれが本心な
のかもしれない。

「まさか、せっかくもらったチャンスを、みすみす逃す手はありま
せんよ」

ははは、と軽く笑って勇作。これも本心だ。戟はそうか、とだけ
言っただけでやりと笑った。

『敵の数は5、迎撃に当たっていた16守備部隊は撤退の最中だ。俺たちはそれと入れ替わる形で迎撃・掃討任務を引き継ぐ。こちらの戦力は俺とお前のアルデバンサー2体のみ、航空支援も支援砲撃も望めない。やれるか?』

いささか絶望的とも取れるようなその状況、腰がすくまないといえど嘘になるが、なぜか勇作はやれると確信していた。根拠は無い。「はいっ!」

だから勇作は、不敵な笑みを浮かべる戦をまっすぐに見据えて返事を返す。

『ようし。なら行くぞ、勇作。……EGF第一戦闘小隊、発進する!』

『01、02発進準備完了。ハンガードアオープン。射出経路2番に固定。発進、どうぞ』

戦の号令とアナウンスが聞こえた次の瞬間、グンツとシートに押し付けられるような感覚が勇作を襲う。整備用ハンガーがそのまま射出台として、アルデバンサーの巨躯を地上へと押し出していることを感じられた。

ものの数秒で地上に出ると、拘束から逃れた二期の青い機体は勢いを殺さずに大空に飛び上がる。

『MOF起動、Eドライブ巡航から戦闘へ!30秒で到着だ。続け!』

「了解!」

戦と勇作のアルデバンサーは一糸乱れぬ動きで慣性を見捨てるかのように急速に方向を変えると、音速に近いスピードまで加速する。慣性制御飛行装置(MOF…マスオフセットフライトシステム)のなせる業だ。

『接敵!』

三十秒とかからずに、勇作の目に、耳に戦場が飛び込んできた。戦はそうクールしながら、リアアーマーのラッチにマウントしてあった90mmマシンガンはアルデバンサーに持たせ、ためらい無く

敵に向かって引き金を引いていた。

勇作が敵の姿を確認すると、銃口から放たれた大口径の弾丸がそれに吸い込まれるのは同時だった。その弾丸は敵の鱗に覆われた皮を破り、肉を穿ち、骨を砕く。そのはずだった。

「やったか！」

砕けたコンクリートが煙のように舞い散り、その姿を隠す。勇作は淡い願いをこめてそういうが、塵の靄から覗く赤い光に、その甘い考えを払拭せざるを得なかった。

『散開！』

戟に促されるよりも早く、機体を即座に横にスライドさせる。ちょうど彼らがいたところを赤白い光線が貫いた。間一髪である。

滑空するように宙を舞う戟のアルデバンサーから火器使用のコール。それと同時に背部ウエポンラッチからマイクロミサイルが放出される。ばら撒かれたミサイルはSTMめがけて牙をむくが、STMは二次元的な機動のみでそれを避けてみせた。

「まじかよ……！？」

勇作はそれを見て愕然としながらも、自分のミサイルを放出させた。まとまって行動していたSTMは合図もなしに散開し、それも難なく回避される。敵の機動力は、圧倒的だった。

『これほどとはな……近接戦に切り替える！つづけ！』

その有様を見た戟は即座にそう判断を下すと、両腰のホルダーから実体短剣Eダガーを引き抜かせ、STMの一匹めがけて急降下した。

勇作もそれに続くように両の手に剣を握り、別の一匹に向けて襲い掛かる。急激な高度の変化によって生じたGが、勇作をシートに押し付ける。位置エネルギーをそのまま運動エネルギーに。勢いの乗った刃はSTMの胴を、今度こそ深々と刺し貫いた。しとめたど、勇作は確信する。

が、甘かった。ぞわりと悪寒が走り、勇作はダガーを引き抜くとバックステップで距離をとる。するとSTMの強靱な尾が胴体すれ

すれを通り過ぎ、もう一息遅ければこの機体は真つ二つになっていただろうその攻撃に肝を冷やす。胸をなでおろす前に、まだ目の前の脅威が過ぎ去っていないことを再認識した。

「国連軍部隊は、撤退したのか」

レーダーに映るマーカーで、味方をさす青い光点は2つのみだった。ここまでは事前の打ち合わせどおり。後は目の前の敵と戦って、この機の実証データを採集する。それが主目的だ。

背中にぐっさりと裂傷を負ったSTMは、多少動きが鈍ったように見えた。それでも十分な機動性を持ちえるそれは、どう考えても地球の生物でないことを勇作に確信させた。

一機と一匹が対峙する。ジリジリとあせる気持ちを押さえつけ、勇作は一瞬の動きも逃すまいと意識を研ぎ澄ませる。対するSTMも動かない。こちらの様子を伺っているのか、はたまた傷のせいで動けないのか……おそらくは前者だ。

バンツとSTMの後ろ足が大地を蹴った。足をばねに使い、一気に加速する。勇作もその動きは見逃さない。アルデバンサーはEダガーを手のひらでくると回転させ、逆手に持ち替えると同時に呷いだ。すれ違う二つの影。ざっと、音を立ててSTMがアスファルトに着地する。

【右腕部追加装甲版損傷。耐久限界、パージ】

アラートがなり、勇作は機体ステータスをチェックする。どうやら右前腕部の追加装甲が持っていけたらしい。赤く染まるステータスウィンドを伏せ、判断をAIに任せると、しかし勇作は不敵な笑みを浮かべた。

「手ごたえは……あつたはずだ！」

着地直後、思うように身動きが取れないSTMにふりむきざま、パージした装甲を投げつける。指向性火薬のおかげで袖がすっぽ抜けるように飛んだ追加装甲は、見事にSTMの顔面に直撃した。その白い能面にひびが入り、ぐちゃり、と肉が押しつぶされる音が響く。そして、それはにさんど痙攣した後、すぐに動かなくなった。

「まずは一匹……!?!」

撃墜の余韻に浸るまもなく、勇作は驚愕する。撃墜したSTMの死骸が、末端部から灰のように粉々に崩れだしたのだ。10秒も経たないうちに、それは空気に溶けて消えてしまった。

「隊長! 弱点は頭のようにです!」

『頭か、順当だが、やってみる価値はあるな』

戦のアルデバンサーは約200mはなれたところで敵の一匹を相手取っていた。対峙するSTMは全身が傷だらけだったが、まだ動いて戦の機に追いつがる。よく見れば、先ほど受けた傷がもうすでに回復してきているのが確認できた。すさまじい生命力。それに驚嘆する間もなく戦はその懐に一気に踏み込むと、アルデバンサーの主脚でSTMのアゴと思われる部分を蹴り上げた。中に浮いたSTMに、次の攻撃をかわす余裕は無かった。戦のアルデバンサーは赤い目の覗くSTM顔面のスリットにEダガーをねじ込む。断末魔を上げる間もなくSTMは力尽きたのだらう。力の張っていた四肢はだらりと下がり、そしてまた灰のように消えて行った。

「すごい……!」

『感心するなら後にしろ。そっちに2匹行った、一度合流して形勢を立て直すぞ』

「了解!」

勇作の機に飛び掛ってきたのは二匹。勇作は巧みな操縦桿捌きを披露する。アルデバンサーは両手に保持したEダガーで向かい来るSTMをいなしながら、誘導するように戦との合流を図った。

繰り出された鋭い爪をダガーの背で受け流し、返す刀で逆袈裟に切り飛ばす。鋭い突起のようなものついた尻尾で繰り出される尻尾攻撃を低空ジャンプでよけ、そのまま回し蹴りを食らわせた。無駄に蓄積されたモーションデータと新設計のフレームは、スプリガンではとうていできない動きで敵を翻弄する。

『勇作、そっちへもう一匹も行ったぞ! 距離100、6時の方角!』
「真後ろ!?!」

もう一匹のSTMが来る。そう頭によぎった瞬間、一瞬の隙ができた。勇作を、アルデバンサーを強い衝撃が襲う。意識が一瞬外に向いた瞬間に、敵の渾身の体当たりを食らったのだ。質量の塊が打ち付けられ、アルデバンサーはふわりと浮くと、後方へぶっ飛ばされた。胸部の追加装甲がひしゃげ、AIの自立操作でパージされる。リ・アクティヴアーマーの如く破砕した追加装甲の破片が敵にいくつも突き刺さり、一匹が地面に激突して動かなくなった。そしてまたしても掻き消える。おかげで致命傷にはなりえなかったが、胴体部ががら空きになってしまった。かろうじて気を失わなかった勇作はひっそり体勢を立て直そうとしたが、ときすでに遅し。後ろから迫っていたSTMが飛び掛り、その爪を突き立てんとする。鈍く光を照り返すそれは、見るものを恐怖のどん底に陥れるには十分なほどだ。戟がそれに気付くが、ここからでは間に合わない。

「何か手は……」

だが勇作は、あきらめようとはしていなかった。ロボットが好きで入ったこの世界、せっかくの新型をもらって初出撃で死ぬわけに行くかよと、勇作は走馬灯を意識の隅に追いやって考える。そして、ひらめいた。

勇作は手元のコンソールをすばやくたたき、最後にエンターキーを押し込む。モニタの一部の表示が切り替わり、タイムリミットを示すかのようなカウントと、機体を包む膜のような表示が出現する。コクピットハッチにその切っ先が触れるか触れないか、本当の意味で間一髪だった。つきたてようとした刃は装甲を貫くことはなく、逆にSTMは凄まじい勢いで跳ね飛ばされていた。

Eフィールド。とある非常にエネルギーを保持しやすい性質を持った波長の電磁波に主機から発生した余剰エネルギーを帯電させて外界との間に電磁的な壁を作り、斥力を発生させる防御用装備だ。ただし連続使用には莫大な電力が必要になるため、艦艇など一部の大型大出力の主機を持つものにしか取り付けられていないのが現状である。しかし、次世代量産機のテストヘッドであるアルデバンサ

ーには、起動兵装でも連続使用が可能となるように改良が加えられた最新式のフィールドジェネレータが搭載されているのだ。

発動したEフィールドは接触面から先への他者の侵入を許さず、瞬間的に効果範囲まで斥力場が移動したことによってSTMは弾き飛ばされ、勇作は命拾いをしたというわけだ。

『002、無事か?』

「多少のダメージはありましたが、問題ありません!」

二匹目のSTMを片付けて、戟。勇作は大勢に影響がない旨を伝え、再び臨戦態勢に入った。

残る敵は2。体勢を立て直した2機のアルデバンサーがそれぞれに対峙する。戟と勇作は二言三言言葉を交わすと、タイミングを合わせて大地をけた。

勝負は、まさに一瞬で付いた。

もともとSTMと戦うために設計された機体だからというのもあるのだろうが、何より操縦者の技量が高かったことが大きいだろう。二つの青い疾風とすれ違った跡に残されたのは、その白い面に深々と刃をつきたてられたSTMだったもの。それはやはり風に溶けるように掻き消えて、後には何も残らない。望まぬ異邦よりの訪問者が去った後、そこには五月晴れの太陽を照り返す青い機動兵装が二機、雄雄しく立っているのみであった。

T o b e | c o n t i n u e d |

第2話

少女は、泣いていた。

清々しい五月晴れの陽光が降り注ぐ路地で一人、ただ泣きじゃくる少女。いくらのどかで暖かな日差しも、その少女、エルディオルの心に深く差し込んだ闇を照らすことはできない。

心細い、さびしいといった感情が渦を巻いて、彼女の心を支配する。ガラス細工のような透明な雫がいくつも流れては落ち、あまりの心細さは恐怖を連想させて、エルディオルをその場に縛り付ける。そして少女は泣き続ける。まるで五月雨のように、涙は止むことなく頬を伝う。

ただ泣いているだけの自分が不甲斐なくて、だがしかし泣く以外に今の彼女に選択肢はなく、延々とループする感情の螺旋に飲み込まれそうになる。

「だいじょうぶ？もしかして、迷子かな？」

だがしかし、この世に止まない雨はない。りいん、と鈴のなるような声が、彼女の雲を払う風になる。そう、風だ。まるでやさしい春の夜風を連想するように涼やかな、ちょうどいい温度を持った声色だと、エルディオルは思った。すでに、涙は止んでいた。

エルディオルはうつむいていた顔を上げる。涙で霞んだ古びたアスファルトの舗装から視線を移すと、ちょうど自分の目線と同じくらいにまで下げられた顔と目が合った。心配そうに自分の顔を覗き込んでいる少女、その深い群青の髪を後ろで一纏めになっている様はどこか馬の尻尾のようにみえて、エルディオルは知らずにクスリと噴出していた。その様子に、目の前の少女も笑顔になる。

「あ、笑ったね」

どこかおどけたように朗らかに。少女はポケットからハンケチを取り出すと、エルディオルの頬をぬぐう。それはどこか手馴れていなくてくすぐったいものだったが、エルディオルは確かに安らぎを

感じた。

心細かったんだよね。自分もそうだから解るよと、少女は優しい笑みでエルディオルに話しかける。

「お姉ちゃんが一緒に探してあげよっか。私の名前は風靡 流凜。フウって呼んでくれるとうれしいかな？」

「ふえ、ふう……？」

「うん」

エルディオルはフウの瞳を覗き込んだ。それはどこまでも透明で純粹な空のような輝きを持っていた。そのまなざしに吸い込まれるように、エルディオルの内奥に差し込んでいた暗いものが解けて消えていくような感情を覚えた。あなたのお名前は？と差し出される手を、促されるまま握る。

「える……でいおる……」

「エルちゃんか、よろしくね」

まぶしいくらいの笑顔が、そこにあった。繋いだ手を通して暖かな感情が押し寄せる。それは懐かしさを感じる暖かさだった。それは自分が長い間捜し求めていたぬくもりだった。それは遠い昔になくしてしまったもので――

エルディオルの口元がほころぶ。暗い、暗い世界にさした光明だった。初対面の少女に、なぜここまで心を開けるのかはエルディオル自身解らなかったが、しかし彼女は久しくぶりに、心の底からの笑顔を見せた。それはとても無邪気な、子供らしい笑顔だった。

「じゃあ、いこっか」

風がいう。フウがいう。エルディオルの笑顔に負けなくらいの笑顔で。

エルディオルはうなずく。頷いて、繋いだ手を離さない。歩き出したフウについていくことに、もう戸惑うことはなかった。

四月も終わりとはいえ、やはり欧州の夜風はいまだ冷たい。

（絶好の泥棒日和……だな）

月のない月夜を眺めながら、黒のボディースーツに身を包んだ男が内心つぶやく。

「金堂さん、そろそろ始めよう」

男、金堂翔太が一人感慨にふけているうちに、本日の相棒はすでに準備を終わらせたようだ。

「ン、了解。じゃあシオ君、君ならこのあと、どう侵入する？」

金堂は意識を空から目の前の男、諫 鷲鷹に視線を移す。自分が組織に入ってからこつち頻繁にタッグを組んでいるこの青年は、確かに実力がある。あるがどうにも、ユーモアが欠如しているように感じられてならなかった。かといって自分にそれがあるかと問われれば、閉口するしかないのも事実であるが。

「そう、だな……」

シオは真面目な顔で数秒の思案の後、獲物から最も近い窓から侵入するのはどうか、と提案した。至極シンプルな答えだ。

「ま、それが一番順当な答えだね。でも、監視カメラの処理について考えていないのはいけないな。ギリギリ及第点」

「む……」

金堂の評価はそこそのものだったが、シオは思うところがあったようだ。

「さて、方針も決まったし、後は魔道書を摩り替えるだけだ。頼んだよ、シオ君」

「任せてくれ」

二人でうなずきあうと、即座に行動を開始する。二人は夜闇に溶けるようにきえた。月のない月夜の、暗い大邸宅の屋根でのやり取

りを聞く者はいなかった。

「ばいばい」

そういつて帰り道を思い出したエルディオルは小さな手を振った。

「ばいばい」

フウも手をふり返して、小さな少女がかけていくのを見送る。四つ辻の角に彼女が消えるまでフウは手を振っていたし、エルディオルも名残惜しそうに手を振っていた。フウはまたね、といった。エルディオルはパアッと明るい表情をしていた。

やがて彼女を見送った後、フウはひとつ長い息を吐く。そして、茜がかりつつある羊雲を見上げて、呟いた。

「ここ、どこだろう……」

エルディオルの帰り道を探して右往左往しているうちに、いつの間にか自分の知らない路地へ入り込んでしまっていたらしい。覚えている限りで来た道を引き返そうとするが、数分歩いてやめた。あからさまに周囲の風景が、記憶にあるものと違っていたのだ。実を言えば、来た道と常に反対へ反対へと行っていたのだから仕方ない。風靡流凜と言う少女は致命的な方向音痴なのである。

次第に日はかげり、茜色が空を支配する。フウは一人、小道の隅で黄昏ていた。肩を落とし、とぼとぼと歩く。

「エルちゃん戻ってきてくれないかな……」

自分で言って、なにを馬鹿なことを、と思う。しかし、どんどん沈む太陽と見知らぬ土地は、彼女に言い知れぬ不安を抱かせるに十分だった。

「よびましたか？」

「ふえ？」

それは、小鳥の囁きにも似た声だった。ふとした独り言に、まさか返事が返ってくると思わなかったフウは、驚いて反射的に声のしたほうを振り返る。すぐに声の主が目に入った。透き通るような緑

の長髪の、すらりとしたスタイルのいい女性だった。声も、容姿も、表情からも、どこかのほんとした空気が見て取れるような女性だが、その女性を囲む人影もあった。不良、といえぱいいのだろうか、あからさまにガラの悪い男が数人、女性の周りを取り囲んでいる。

「……」

「……」

フウと女性は互いに目を見合わせた。それに気付いたように、不良の一人がこちらに中途半端に睨みを利かせる。いわゆるガンとばしというやつだ。

「あ、えっと、その……」

フウは、しどろもどろになりながら考えた。あの女性はなにやら困ったような視線をこちらに向けているし、周りの不良たちは怖い。一体どうすればいいのか……

フウは前置きもなしに女性の手をとると、半ば引きずるように一目散にこの場を後にした。それは一通り混乱した頭でフウが導き出した答えだった。

もしかしたら不良が追ってくるかもしれない。日ごろ味わうことのない緊張感と疲労が、さらにフウの頭をこんがらがらせていた。そんな状態のフウは気付くはずもない。彼女らが去った後、まるで風にかき消されるように不良たちの姿が消えていたことに。

けたたましく鳴り響くサイレンの音に、二人は頭が痛くなる思いだった。

「……ぬかりましたね」

「うん、あんな初歩的な震圧センサーに気付けなかったとはね。始末書ものだ」

ははは、と金堂は苦笑する。シオはさっきからひどく神妙な顔だ。今、彼の手には奪取した魔道書がある。幾千の魔力が文字として収

められたその本の、なめされた皮のヌルヌルした質感は、ヒトの肌を連想させた。好きになれそうにはない触感だった。

音もなく侵入し、件の魔道書を見つけるまではよかったのだが、獲物をすりかえようとした瞬間、感づかれた。さっき金堂は震圧センサーといったが、それはどんなにプロの工作人員でも気付かない魔術的な隠蔽がなされていたのだ。二人が気付かないのも、無理はない。

「とりあえず、脱出しようか」

「了解」

二人はそういつて、一気に廊下へ躍り出た。もう見つかってしまっている以上、コソコソやるのもあまり意味がない。

「いたぞ！」

早々に警備に見つかってしまった。「つかまえろ！」とか「まて！」だのと口々に叫んでいるが、こっちとしては待ってやる義理も捕まってやる義理もない。

「転送依頼。單車二台」

『了解。転送完了、3 m』

金堂がインカムに短く吹き込むと、即座に返事が返ってきた。まさに阿吽の呼吸とでもよぶべき迅速な対応に、金堂は苦笑する。視線をあげれば、先ほどまではそこになかった單車が二台、アイドリング状態で停車していた。

飛び乗るようにしてまたがると、即座にクラッチをつないでアクセルを捻る。スタンドを蹴飛ばすのが早いのか、ギアを一気にトップに叩き込む。今では珍しくなったガソリン駆動のエンジンが鉄馬の嘶きのごとく唸りを上げ、その車体を一気に加速させた。

歩くには十分すぎるほどの幅を持った廊下も、バイクにしてみれば狭い。まさか單車を転がすとは思ってもみなかつただろうな、と金堂は巧みなハンドル捌きを披露しつつ考える。

「跳ね飛ばされたくなければ、そこをどけ！」

後ろで、シオの怒声。前方に迫っていた警備員たちは、我先に来

た道を引き返す。何人かはその場にとどまって発砲してきたが、生憎拳銃の弾くらいでは二人に傷を負わせることなど不可能だ。單車から発せられる魔術的な障壁が、接触した鉛弾を即座に分解してしまうのだ。やがて銃も効かないことが分かると、とどまった警備員たちも顔を青くして逃げ出す。

長い廊下を爆音を上げて疾走する二人は、突き当りの大窓をぶち破って外に出た。煌びやかなステンドグラスの破片が舞い飛び、己の最期を色とりどりに飾る。しかし、そこは地上4階建ての最上階。地表まで18mはあるだろう。今日びスタントマンでもやらないような大ジャンプだが、二人は難なくそれをこなした。着地の衝撃でサスが軋みをあげる。お構いなしに二人は疾走する。原子単位から最適な形状に構成された單車だ、この程度で壊れることはない。二台の單車は芝生をえぐり、深々と轍を刻みつけた。

「金堂さん、敵だ」

と、シオ。なるほど確かに、先ほどよりも大勢の警備員が二人の後を追っていた。拳銃が効かないと分かってか、バズーカを持っているやつまでいる。流石にあれば防ぎようがない。

二人は顔を見合わせると、どうやら同じ考えにいたったようだ。うなずきあって、グンツと体を倒す。不規則な蛇行運転で、相手の狙いはずすのが目的だ。もちろん速度メーターは振り切ったままです。

背後でドカンという爆音がした。本当に撃ってきたようだ。とっさの判断で車体を右に傾ける。爆風程度ならば障壁で防げる。ようは直撃さえしなければいいのだ。

二台の單車の両脇に、ドカン、ドカンと盛大な火柱が上がる。二人はそれを体全体を使ってかわしきり、走る。

「まるで歌舞伎の花道だ」

シオがいう。彼にしてはなかなか巧いジョークだが、時と場合くらは選んで欲しいものだ。

「舞台演出に、文句を言わなくちゃな」

迫る砲弾をかわしながら、金堂。敷地の外へ出てしまえば、こちらの勝ちだ。この無駄に広大な敷地が恨めしい。

やがて門が見えた。距離にして100mもない。一気にスパートを掛ける。

「バカめ！そっちは行き止まりだ！！」

後ろから、わざわざ拡声器で追っ手が叫ぶ。だが二人はそんな叫びなど意にも介さないといった体で、ただただバイクのスロットルを開放する。追っ手の言うとおり、門は固く閉ざされていた。このまま行けば、激突は必至だ。思わず追っ手が目をつぶる。あの速度でぶち当たれば、ただでは済むまい。あの距離からでは旋回すらも出来ないはずだ。数瞬後に起こるであろう惨劇を予見して、十字まできつてみせる。

しかし、彼が目を開いた先にあったのは、門のほんの数センチ前で止まっている轍のあとだけ。そのほかには何もない。大穴の開いた前庭に力なくへたりこんだ追っ手たちは、一様に信じられないといった様子で門を凝視する。

二人は、忽然とその姿を消したのだった……。

「実は、道を尋ねていたんです」

「なあんだあ、絡まれてたんじゃ、なかったんですね。よかったあー」

「ええ。なかったんですよ」

ウィエル・スプリットと名乗った女性は、そう言って微笑みながらカップに口をつけた。落ち着いた雰囲気、欧風純喫茶『ぼらじゅうじ』。調度品から茶器にいたるまでがセンスよく統一された店内で、フウとエルは談笑していた。ベルガモットやダージリンの芳香が鼻をくすぐる。先ほどの騒動が嘘のように静かな店内で、二人はガールズトークに花を咲かせる。基本的に馬が合ったというか、波長がぴったりだったのだろう。一時間もたたず、二人は名前で呼び

合えるほどに打ち解けていた。

ふと、店の外がにわかに騒がしくなった。窓から外を窺うと、黒い単車が二台店に横付けにされていた。

「煩いですね」

エルが、そのおっとりとした顔に多少の不快感をにじませて、言う。

「本当だよ。でも、いまどきガソリン車なんて珍しいなあ」

フウも多少のイラつきを感じながら、しかし意外そうに呟く。

「そうなのですか？」

カップを口に運び、喉を潤しながらも、どこかキョトンとした様子でエルはたずねる。

「うん、社会科の時間に習ったんだけど、100年前の”ラストオイルショック”で原油がなくなっちゃって、いまはほとんど燃料電池で動いているんだって。エルさんは習わなかった？」

「んー、どうだったかしら。でも、フウちゃんは博識ですねえ」

「えへへ、ありがと。でも、先生の受け売りだけだね」

立てた人差し指を口元へやって考えるそぶりを見せるエルに、フウは照れたような笑いで返し、照れ隠しのように紅茶を口に含んだ。

――カロン、コラン

入り口に取り付けられた真鍮製の鐘が、新たな客の来店を告げる。入ってきたのは黒いライダースーツに身を包んだ二人の青年だった。いや、一人は少年といったほうがしっくりくるかもしれない。服の上からでも引き締まった体軀を見て取れる長身の、無表情な青年と、ともすれば小学校中学年程度に見えてしまいかねないほど幼く見える少年というのは、なかなかおかしな組み合わせだ。

「マスター」

「ああ、どうぞ。いつものですね」

「頼むよ」

少年は店主と短く言葉を交わすと、二人で店の奥の階段を上っていった。何でも、二階席は一見さんお断りらしい。

「可愛い子だな」

フウが少年を見ていう。

「ほんとう。女の子みたいです」

エルは多少含みを持たせつつも肯定をした。

「フウちゃんは、どっちが好みですか？」

「ん、わたしはカッコいいほうかなあ。可愛いのはいいけど、あんまり年下は」

思いついたようにエルが聞いてきた。あまり恋愛ごとに縁のないフウは多少照れながらも答える。エルはふふっと笑った。

「うふふ。年下も、なかなかいいですよ？」

「大人の女なんです、エルさんは」

どこか余裕を漂わせるエルに、フウが感心したふうになると、やんわりとエルは否定して、二人で笑った。夜の帳は、ゆるやかに降りていった。

丸い満月が夜道を照らす。

とつぷりと日が暮れるまで話し込んでいた二人は、七時を回るか回らないかで店を出て、閑静な住宅街を歩いていた。

（なんだろう……こわい）

エルと談笑しながら歩いていても、なにやら言い知れない不安感がフウの中で鎌首をもたげる。繁華街ほどではないが街灯もあるし、何より月明かりが明るい今夜、さほど暗さは気にならない。人は暗闇に本能的に恐怖を抱くというが、今回それは該当しないだろう。

では、この澱のようにたまっていく恐怖心はなんなのだろうか。暴漢に襲われるのではないかという恐怖？それもあるだろう。だが、違う。隣の女性、エルに対する不安感？まさか、それはありえないでは、なにが……

——タァン

ちやうど住宅街を抜け、開けた場所に出たときだった。背後で乾

いた破裂音が響く。驚いたフウが振り返った先には、先ほどの少年が、にこやかな笑みを浮かべて立っていた。その愛くるしい笑みにあまりにも不釣り合いな、月明かりを受け黒光りする拳銃を向けて。

「動かないでね？」

そういつて少年、金堂は銃を構えなおす。銃口はしっかりとフウに固定され、鼻真目に見ても味方には見えない。無邪気な笑みと無機質な凶器のアンバランスは、フウにさらなる恐怖となつてのしかかった。

「え、う……ア」

言葉をつむぐことも出来ず、後ずさろうとした足元に火花が散る。硝煙の匂いが鼻についた。それは花火に似ていたが、フウの心中を満たすのは恐怖だけだ。

「僕は銃器の扱いは得意だけど、ねらつてはずすのは難しいんだ。動かないでくれるかな？」

にこやかな笑みで、こちらに歩み寄る金堂。フウはがたがたと震えて、腰を抜かさなかったのが奇跡といったほどだ。

「さあ、僕と一緒に来て……」

――カアン

三度の砲声は、金堂の持つ拳銃を射抜いた。弾き飛ばされた拳銃は地面に転がり、金堂がそれを興味を失ったかのように一瞥した段階で緑色の光の粒子となって消えた。

「……彼女から離れてもらおうか」

威嚇の意をあらわに、怒気をはらんだ声が金堂に向けられる。まるで闇の中から生まれでたように、先ほどの長身の青年、シオがしかめ面を作つて現れた。手には、金堂の持っていたのと同じと思しき拳銃が、その銃口をしっかりと金堂に向けたまま構えられている。

一步、また一步。にじり寄るように金堂との距離をつめるシオ。

対する金堂はどこか余裕すら感じさせる表情で、その場を動かない。

「大丈夫だ。君は、俺が守る」

がたがたと震えるフウに、あくまで金堂に注意を向けたままいう。

「へ、あ、ああ、うん。その……ありがとう」

いきなりすぎる事態に動揺しながらも、かばうように前に出たシオにフウは謝辞を述べる。「味方がいた」という事実は、フウの恐怖感、不安感をわずかばかりか払拭した。もう、フウは震えていない。シオはそれに首肯で返した。

「はははっ、ずいぶん頼りにされているね」

金堂はおどけたようにそういった。その口調とは裏腹に、その手にはいつの間にか再び拳銃が握られている。

「でも、これは任務だ。邪魔をするならば、いくら相手が君だろうと容赦はしない」

そういつて撃鉄を起こす。シオもそれにあわせるかのように狙いをつけた。すでに両者間で、話し合いでの解決は望めない。唯一の解決法は、片方が片方を先頭不能にすることだけだ。張り詰めていた空気がさらに張り詰める。互いに指先に力がこめられ、あとは引き金を引くだけだ。

「えい♪」

そんな張り詰めたような空気をぶち壊しにする、どこか間の抜けた能天気な声が”響いた”。

閃く雷光、迸る紫電。紺色の夜空を裂いて生じた二つの稲妻が、一直線にシオと金堂に向けて放たれた。

「――！？」

「詠唱無しの魔術攻撃……やるね、”お姉さん”？」

背後からの雷撃に回避できなかったシオとは裏腹に、金堂は間一髪で直撃を免れた。軽く一息ついて、雷撃の主を見据えて金堂が言う。おどけた風を装っているが、先ほどまでの余裕は感じられなかった。

「ふふふ、しびれますわよ？」

対するエルは笑みを崩さないまま、やはりおっとりとした口調で返した。先ほどからまったくいいほど動揺のなかったエルに多少の警戒を抱いておいて正解だったと金堂は痛感する。

（しかし、これは分が悪いかな……）

平静を装いながらも、金堂の頭は最高速で回転していた。魔術や魔術師などは彼にとって珍しい存在ではない。しかし、彼女はそれとも違う。あれほどの威力の雷撃魔法ならば、相応の詠唱時間が必要はずなのだ。しかし、彼女にはそれがなかった。それだけ異質なのだ。詠唱をすっ飛ばしてあれだけ高位の魔術を使役できるなど、彼の知り合いの中でも2，3人いるかいなかといったところである。

では、どうする？ 詠唱が必要な魔術師が相手なら、そのラグを利用してしとめることはできる。しかし、相手が詠唱を必要としない場合、どんな早撃ちの名手でもかなうことはあるまい。では、どうする……

「……ふう、この方法だけは使いたくなかったんだけどなあ」

金堂は諦めたかのようにかぶりを振ってそういうと、スッと左手を上げて、刃のごとく振り下ろした。それを合図にしたかのようにフウらの周りにエメラルド色の光の粒子が迸る。それはまるで蛍火の乱舞にも見え、とある一面から見れば確かに幻想的であった。

「きれい……」

「……本当ですね」

突如巻き起こったその光景に目を奪われるフウと、細い目をさらに細め、微小な苦々しさを含んでエル。

「チッ！ 使われるとここまで厄介とはな……逃げるぞ！」

「え……あ！？」

「あらあら」

雷撃のダメージからやっこの思いで立ち直ったシオは、フウとエルの手を一も二もなく有無を言わせず引っつかみ、一目散に駆け出した。

「甘い」

背後で金堂の声。気をとられたときには、もう遅かった。蛍火の燐光は瞬く間に凝結し、巨大な人の容を形作った。それは土くれの

ような肌から見る見るうちに白と薄青の鋼の装甲板へと変じ、3秒とたたずにその姿を巨大な機械へと、スプリガンへと変化させていた。それは魔術と科学の融合。科学の祖なる錬金の術から生まれた高性能多目的人型魔術集合体、俗に言うゴーレムである。携行している武器で足りないのならば、それを上回るものを用いればいい。実に簡単な答えだ。

「くそっ！間に合わなかったか……！」

その巨大な足に阻まれるように、立ち止まらざるを得なくなったシオが吐き捨てる。

「シオ君、君はいつも読みが甘い。目に見える欠点だ。――さて、この状況、君ならどう打破する？」

シオを試すように、まるで教師のごとく語りかける金堂。しかし、その目に情けなどは微塵も感じられない。

「決まっている。こちらも転送を――」

そういつてシオは携帯電話を取り出す。地球上のありとあらゆる場所では通話ができるように魔術的な細工が施された一品だ。たとえばベレストの頂上だろうが、マリアナ海溝の最深部だろうが、決まってアンテナを3本立てるその携帯が、今は圏外を示していた。

「だから甘い。やすやすと本部と連絡を取らせると思っかい？」

金堂は嘲るように言う。シオは歯噛みしたが、それでも事態を打開せんと、再び駆け出そうとした、そのときである。涼やかな風を思わせる音色が、あたり一帯に響き渡った。

「~~~~♪ おいで、”フェンヴィー”」

エルは、そうつぶやくように唱えた。

響き渡る指笛の音は、まるで宇宙にまで届こうかという透明さと力強さを持っていた。短いなながらも鮮烈に刻まれるその音色は雲を呼び、それを媒介に見たこともないような巨大な魔法陣が描かれる。青い燐光を放つ魔法陣がいつそう輝いたのと同時にザァッと雲が割れ、満月を背景に、白銀の翼を持つ巨大な、そして流麗な鳥のシルエットが浮かび上がった。それは一声啼くと、超音速の風を伴って

滑空する。

急降下。磨き、鍛え上げられた刃にも似た銀翼が月明かりに煌き、閃く。それは一瞬の交差でゴーレムを17つの細かな破片へと解体した。吹き付ける風にエルのエメラルドの長髪が揺れる。フウの夜空のような紺のポニーテールがゆれる。

ゴーレムのかけらは鋼から土くれに、土くれからまた緑の粒子へと還元し、夜空に溶けて消えた。

白銀の麗鳥は再び高らかに声を上げると、ふわりと羽をたたんで金堂とエルらの間に音も立てず降り立った。まるで主人を敵から守るように。

「シオ君、フウちゃんを任せるわ。今のうちに逃げなさい」

エルは先ほどまでと同様おっとりとした口調で、しかし有無を言わせない力強さをもってそう言った。シオにしても渡りに船だ。コクリとひとつうなずいて、いまだ茫然自失のフウの腕を引く。

エルは二人が走り出すのと同時に魔方阵を展開。自らを光の粒子に変えると、フェンヴィーと意識を統合させた。格段に広くなった感覚で二人を補足し、空間に穴を穿って彼らを誘導する。上等な魔術を用いた精巧なつなぎ目に、二人はためらいもなく飛び込んだ。エルはほくそ笑んで空間の入り口をとじる。後は、彼らがうまくやることを祈るまで。

視線を下に移す。金堂はそこにいた。出来ればこのまま引き下がつてもらいたいとエルは思うが、彼の相貌からはまだあきらめの色を窺えない。いつの間にか、余裕を取り戻しているふうにさえ見えた。

——僕の灯幻からは、逃げられないよ

金堂の唇が動いた。灯幻が何を指すのかはわからないが、最後に不適に笑って見せた金堂に何かしら背中を走るものを感じたエルは、急速にフェンヴィーを大空へ浮き上がらせた。

眼下を見る。にわかに金堂の背後が歪んだかと思うと、風景を齧り取るように全長10mばかりの機動兵装が姿を現した。エルが魔

力の流れを感じられなかったこともあり、転移ではなく高度な光学迷彩か何かだろう。

金堂は跪いた形で現れたものの、腹部に設えられたハッチに飛び乗る。各システムを隠遁から戦闘へと切り替えると、その機動兵装、灯幻の瞳に淡いオレンジの光がともった。

「さ、ダンスパーティーの始まりだ」

金堂が、その幼い容貌に不釣り合いなほど凶暴な笑みを浮かべる。昆虫類にも似た背部の翅を細かく振動させ、瞬間的に高度を上げる。見ようによつては妖精のように見えるその機体、灯幻とフェンヴィーは一瞬上空で対峙し、それを確かめるまもなく両者攻撃を開始した。

「ハッ、ハッ……」

閑静な住宅街に、少女の吐息がこだまする。手を引かれるがままに走り続けて、5分ばかり。先ほどの騒動が嘘であったかのように、あたりは静まりかえっていた。

肺が酸素を求め、喘ぐ息も荒い。極度の混乱が彼女から思考能力の一切をそぎ取り、フウはただただシオに手を引かれるがまま、走る。

「きゃっ……!？」

不意に、シオが立ち止まった。フウはあまりに唐突過ぎる制動に対処しきれず、シオの背中にぶつかってしまう。ごつごつとした筋肉質の背中に鼻っ柱をうちつけ、フウは涙目だ。

「ここは……どこだ？」

そして、驚くべき言葉を言い放った。見渡せば町の明かりもすでになく、青々とした木々が乱立する雑木林のような場所だった。木立から差し込む細切れにされた月光は神秘的なものだったが、言い知れない恐怖と、そしてなぜかこの場所を古くから知っているような不思議な懐かしさがフウの胸にわいてきた。

心に余裕ができたからだろうか、フウはあらためてシオを見た。鋭い警戒心を放つまなざしに、わずかばかりの困惑を含んだ表情で、彼は辺りを見回している。すらっとした長身で、鋭すぎる視線を除けばルックスも良好。年も二つと違わないだろう青年は、しかし同年代の男の子とは到底違う気配を発している。彼の顔を見ていると、唐突に頭の奥がちくりと痛んだ。そんなにひどい頭痛ではなかったが、思わず声が漏れてしまう。

「だ、大丈夫か？」

シオが話しかけてきた。どうやら急に頭を抑えたフウのことを案じているようだ。

「う、うん。大丈夫」

痛みは一瞬だったし、今のところ特にほかの症状が出ている気配もない。フウはこの初対面の神経質そうな青年を心配させまいと、笑顔を作った。

「そうか。ならばいいんだが……」

シオは神妙な顔を崩さずにそう言う、またフウから視線をそらしてあたりの警戒を強めた。

「ね、ねえ……シオ、君？でよかったかな。とりあえず落ち着こうよ。ね？」

フウは、努めて明るくそう言った。

「あ、ああ。少し取り乱していたようだ。すまない」

そういつてシオは今まで握りっぱなしだったフウの手を離す。少しバツの悪そうな顔で、もう一度謝った。

「すまない。だが、必ず君の安全は保障する。信じてくれ」

あまりに真剣な顔でシオがいうものだから、フウは多少照れながら頬をかいた。そのときだ。

——ヒトの子よ

「——ッ!？」

——”我等”と起源を同じくするものよ
「だ、誰？」

きいん、と耳鳴りがして、声が聞こえた。シオも同様なようで、またさらに鋭さを増したまなざしで周囲を警戒する。

それは声といったが、しかし聴力によって察知する類のものではなかった。まるで聴覚を掌る神経に直接働きかけるような、頭の中に直接言語が叩き込まれるような、そんな声だ。

「……ッ！」

シオは、無言でフウを背中にかばう。すると、ぼうつと木立の間に明緑色をした二つの光の玉が現れ、ふわりふわりと漂うように二人に近づく。

——我が名はレイピル

そういつて光は瞬時に姿を銀雪色の毛並みが美しい一頭の狼に変えた。

——我が名はキラル・ラグーン

もう一方も名乗ると、こちらは深い空のような青色の竜に姿を変えた。あまりの急な出来事に二人が何も言えず固まっていると、またキラル・ラグーンが語りかけてきた。

——救ってほしい。われらと、われらと起源を同じくするものを

「救……う？」

フウが首をかしげた。目の前の青年はいざ知らず、自分はどこにでもあるような凡庸な女子高校生でしかないと思っているから。自分の身一つ守れないような自分に、他者を救うことなどできるはずもない。そう考えていたから。

「……」

シオは黙って考えた。自分は組織の一員であって、個ではない。己の一存のみで果たして決められるものでもない。たとえ今は便宜上追われる立場であったとしても、彼の所有者は彼ではなく、組織なのだ。

「……漠然としすぎている。一体何から救えばいいんだ？これから何が起これと言うんだ」

と、シオ。フウもうなずく。主語が抜けた会話ほど、誤解を生む

のだ。人類を救うにしろ、救わないにしろ、何からなにをどうやってどうすればいいのかという説明もなされないまま、ハイ解りましたと首を縦にはふれない。

——”それ”は数多の世界を渡り歩く”放浪者”でありながら、”破壊者”

「破壊者……」

——”それ”は数。”それ”は力。許容しうる”世界の限界”を超えたもの

「それだのあれだのと……はつきりしろっ！」

——その名は”エヴィロンス”。星の神が生み出したる忌子。それは星の神の忠実な僕でありながら、絶対の背信者

「エヴィ……ロンス？」

「……」

言葉を反芻するも、事の重大さを理解しきれていなさそうなフウ。シオは思い至るところがあるのか、黙って継の句を待つ。

——すぐにというのは無理かもしれない。急で、勝手な願いだというのは重々承知している

すると、帰ってきたのは第三者の声。落ち着いた壮年然とした声色は、二人に父のイメージを抱かせた。

「あなたは……？」

姿のない声に、フウが問う。するとキラル・ラグーンの胸に光がともり、透き通るようなエメラルドの髪をした壮年の男が現れた。

——私は私であって私ではない。名乗る名前はどうに消えた。今は、幻想機の魂に残留する思念のひとつでしか、ない……

おおよそ、現代でいう空中戦の範疇から外れた空中戦が、上空500mを舞台に繰り広げられていた。慣性制御による飛行が一部で一般化しつつある今に流体力学を問うのはいささか間違いなものかもしれないが、しかしその二つの機影は常軌を逸した軌道を描き、交

差し、火花を散らす。

フェンヴィーが巧みに翼を使って急制動をかけ、灯幻のバックを取ろうとする。しかし灯幻は軌道を直線から8の字ダンスに切り替えて、また背後に回りこむ。一連の動作に予備動作などひとつもなく、急制動急加速が断続的に、連続的に繰り返される。時速0 kmか、音速超かの二択の戦場は、他の介在を許さない。

バックを取った灯幻が、特殊貫通弾のこめられた機関砲を放つ。銃火は先を行くフェンヴィーに噛み付かんとばかりに猛然と追いつてるが、フェンヴィーはそれを何の苦もなく回避し、また灯幻の後ろを取る。撃ってはよけ、よけては回り込み、回り込んだら回り込まれて。

先ほどから続く超音速の応酬は、ここへ来てようやく転機が訪れた。高層ビル群である。高さ50 mを越す鉄とコンクリートの乱立する本立は不規則極まりない突風を生み、直線的な機動を主とするフェンヴィーにとって非常にやり辛い地形である。バランスがとりづらいのだ。対する灯幻はもともと市街戦用に開発された機体、曲芸飛行などお手の物である。エルはまんまと金堂の策略に乗せられた形となってしまうた。

灯幻の機関砲が火を噴く。放たれた弾丸は直撃こそしないものの着実にフェンヴィーの装甲を抉り取っていく。はじけとんだ破片は無数の銀の羽根となって舞い散った。エルはコクピットでその端正な顔立ちをわずかに歪めて歯噛みする。先ほどから断続的に続く衝撃は、エルに焦燥を抱かせた。

大きく減速したフェンヴィーの後ろを取りつつ、金堂は獐猛な笑みを浮かべて勝利を確信した。このままじわじわと追い込めば、いずれ失速した獲物は地に落ちる。そうなれば伝承の存在とはいえ手に入れるのは容易だろう。伝承の存在といっても、金堂は半信半疑とあったところではあるのだが。しかし、この灯幻とやりあえるだけの力を持った存在というのは、純粋に興味がわいた。

しかし、その一瞬にも満たない思考時間、すなわち油断は、彼の甘

い考えを払拭した。

刹那である。

はるか遠方でチカリと何かが瞬いたと感じた瞬間に、灯幻の左腕は胴体から永遠にサヨナラしていた。コクピットにレッドアラートが響く。左腕は完全に脱落しており、背部の飛行ユニットの一部が動作不良を起こしている。そこに来て、金堂は初めて左肩を一撃で吹き飛ばされたことを理解する。落下した左腕は眼下の高架橋を叩き折って横たわっているのが見えた。これで民間人が巻き込まれていようものなら、始末書ものである。

金堂は即座に砲撃の方向を特定すると、フェンヴィーへの牽制を怠らないままそちらへも意識を向ける。

そこには月。十五夜もかくやといわんばかりの満月に、星の軌跡のごとき幾何学模様の魔法陣が現れた。それは更なる輝きを見せ、次の瞬間現れたのは夜空のような深い紺色の双頭竜、キラル・ラグーンであった。

「千年かけても見つからなかった幻想機が2機、か……さすが、満月の夜は不思議なことが起こる」

金堂は皮肉げにそれを見据える。双頭竜は産声を上げるがごとく高らかに、雄雄しく咆哮をあげると、それぞれの首で灯幻とフェンヴィーを見た。口腔に眩い光が蓄えられる。それが先ほどの攻撃であると瞬時に理解した金堂だったが、機体が思うように動かない。灯幻の飛行ユニットは4枚でひとつ。他に並び立つものがないほど高性能な推進機関も、ひとつが壊れば並以下の機動性しか出せない弱点も持ち合わせていた。攻撃に当たらないこと眩い閃光に目を瞬かせる。短い人生だったな、などと、金堂は半ば諦めの境地に達していた。

『シヨタを……いじめるなアアッ!!』

その攻撃が灯幻に届くことはなかった。突如灯幻の通信にそんな声が飛び込んできたかと思うと、キラル・ラグーンとの間に黒い大きな影が割り込み、障壁を瞬間形成してその砲撃のエネルギーを総

て虚空へとそらしたのだ。

「——っ！……助かりました。千春さん」

あまりの音量に耳がキンキンするのを抑えつつ、金堂はその黒い影——アクエリアスの術者に通信を繋いだ。画面に映るのは、無骨なアクエリアスの風貌とは似ても似つかないような、薄桃色の髪をした少女だった。

『……むうっ、私にはタメ口でいいって言っているでしょ？』

どこか他人行儀な金堂に、少しむっとしたように天使千春は言う。幼そうな外見をしているが、それでも高位の錬金術師なのだ。

「それなら僕も、シヨタはやめてほしいって言っているんですが……」

『それじゃあ戦えないね。うん、撤退しよっか』

総スルーである。どうやら呼び名を訂正する気は毛頭ないらしく、金堂は軽くうなだれる。

「任務は、どうするんです？」

『そんな成りじゃもう何にもできないだろうし、今日は切り上げるわ。……灯幻の使用権は確かにシヨタにあるけど、所有者兼上司はあたしだから、命令には従ってもらいます』

いささかまじめな顔で、千春。外から見ると、よほどすごいことになっているのだろうか和金堂は少し不安になった。

『それに、目的の一端は達せられたわ。探求は、幻想機のひとつを掌中に収めたのだし』

「では、やはり？」

金堂は驚いたような様子を見せず、眼前の竜を見た。千春もうなずく。

『ええ。あれの装者は諫鷺鷥で間違いないわ』

ヒュウと口笛でも吹きたい気分だった。あの相棒は、なかなかうまくやったらしいと金堂の頬も緩む。なれば、このままここにとどまることもないだろう。

金堂と千春は互いに頷くと、金堂は灯幻をアクエリアスの影に入

れ、千春はアクエリアスに右肩にマウントされた大剣、英雄王の劔をひき抜かせた。それに気づいたキラル・ラグーンは身構えるが、アクエリアスはその劔を眼前の敵には向けずに虚空に突き刺した。すると切っ先から千春の髪にも似た桃色の燐光があふれ、円を基調とした魔方阵を作り出す。二体のロボットを遥か彼方にすっ飛ばせるほどの、特大の転移呪文だ。

魔方阵に二体が沈み込むようにして消え、とりあえずの挨拶代わりな戦闘は幕を閉じることとなった。

「行ったか……」

キラル・ラグーンの操縦席で、シオは一息をつく。心中は複雑だった。

あの後、なんやかんやでキラルに乗ることになってしまい、フウをあの空間においてきてしまったことへの懸念もあったが、何より己に課せられた不可解な任務について、疑問を抱いてしまった。

課せられた任務は、流凜風靡の護衛。武装携帯の許可まで与えられ、なにがあってもその少女を護るようにと厳命された。

それだけでは、いたって普通の任務だ。しかし、すぐ隣にいた金堂に課せられた任務は、流凜風靡の拉致である。同じ時刻、同じ場所、同じ人物からまったく正反対の命令を受けたのだ。今までシオは組織の方針に何の疑問も持たず、すべてに忠実に従い、そして確実にそれをこなしていた。要人の警護だってやった。逆に人を手にかけたことだってある。

すべては自分の唯一の居場所、”黒の探求”のため。そう思って彼はいままで生きてきたのだ。そんな彼でさえ、今回の任務は異質に感じられた。

「金堂さん……戦うしかないのか」

金堂の力量は、タッグを組んでいた自分にはよく分かる。彼は強大だ。自分の全力をもってしても、渡り合えるかどうかは分からない

い。そんな淀んだ気持ちをかかえたまま、彼の眩きは夜の空に消えた。

「……と、言うわけで、御助力お願いできないでしょうか？」

とある大手ラーメンチェーンの座敷席で向かい合いながら、エルは言った。

先ほどの騒動が嘘だったかのように街は活気にあふれており、夜9時を回ろうかというこの時間帯はこの店にもぎわっていた。騒がしいおかげで、こちらの話もあり耳には入らないだろう。万が入ったとしても、誰が聞いても与太話でしかないような内容だ。特に問題はない。

「ミルナーヴァにエヴィロンス……にわかには信じがたいが……」

「実際にこの目で見ちゃったら、信用しないわけにはいかないよね……」

シオとフウは、先ほどまでわが身に降りかかっていた天変地異とも言える事柄を思い返していた。シオはまだ魔法やらの耐性があつたからそこまでではないが、フウなんかはあまりに超常的な出来事に目を回さないのが不思議なほどである。まあ、だいぶ落ち着いてはきたようだが。

「私たちの故郷、ミルナーヴァのようなことは、もう起こしたくはないのです。世界の崩壊は、悲しみしか生み出しませんから……」

陽気風に見えたエルの沈痛な面持ち。フウは拳をぎゅっと握ると、「わたし、やるよ」と決意を顕にした。乗りかかった船というのも大きい、世界中の人を悲しませたくはないとフウは思ったのだ。フウは優しい少女である。優しすぎる少女であった。

「俺の任務は継続中だ。独断で決めるわけにはいかない」

シオは、渋い顔である。成り行きで金堂達を撃退したが、あれはまずかったかもしれない。これ以上の独断専行は避けるべきだと判

断したのだ。だが……

「あらあら、困りましたねえ。シオさんが手伝って下さらないと、フウさんだけをお願いすることになってしまうのですが……」

「……むう」

てめえがやらないんだったら、フウにどんな危険が及ぶかわからねえぞ？と、言外にばっちり脅しを聞かせてくるエルに、シオはうなる。おっとりした顔だが、内面は相当食えない女なんじゃないかと、シオは今後警戒を怠らないようにするよう努めることとした。

「……分かった、協力しよう。ただし」

「任務が最優先、でしょう？」

「……ああ」

そこのないしてやられた感じながらも、シオは了承する。エルはニコニコしていたし、フウはなぜかほっとしたような顔をしていた。

「はい、塩野菜チャーシュー麺三つに餃子ダブルお待ちっ。ごゆっくりどうぞー」

バイト風の若い店員が頼んでいた料理を運んできた。スープの芳醇な香りが鼻腔をつく。たまらずよだれが出そうになるのを、三人が三人ぐつと堪えた。

「じゃあ、話もまとまったことだし、食べよう！」

フウが本来の明るさでいった。すでに割り箸は綺麗に割られており、準備万端といった感じだ。

「ええ。ウイドラスチームの発足を記念して」

エルがいった。シオがなんだそりやという顔をしたが、特に何も言わず、3人での夕食を楽しんだのだった。

T o b e | c o n t i n u e d |

第3話

木目の美しいマボガニーのデスクに優雅に構え、芳醇なダージリンの香りが心地よいティーカップを手にとった銀髪の女性、アイテア・タトゥーリは、清潔で静かなオフィスを見回した。若くして社長を務める彼女は書類に判子を押すだけの簡単な仕事をするのみで、後は総て社員がうまくやってくれる。まったく、優秀な社員に恵まれたものだ、と、フツと口元を綻ばせた。

「社長」

「あら、どうしたの、クシェット」

彼女の最も信頼を置く社員の一人、クシェット・ハーリアが、少し眉根にしわを寄せて一人ティータイムを楽しむアイテアを見下ろしていた。

「起きてください」

「へ？」

次に彼女の口からつむがれたのは、いまひとつ意味を理解できないものだった。アイテアは思わず首をかしげる。

「そんなところで寝てないで、さっさと起きてくださいっ！」

UNITY FORCE—HEXA（リヴェラルクラフト）

—— Stage003 「真面目」と「不真面目」の境界線上にて——

「わっひゃあ！」

耳元でがなりたてられて、アイテアはようやく飛び起きた。状況を理解しきれず、滑稽とも取れる動作で辺りを見回す。自分が今ま

で突っ伏していた机は高級品でもなんでもない。年季の入った安っぽいながらもしっかりとしたつくりのスチールデスクには、書類が山と積まれていた。

さらにあたりを見回す。清潔は心掛けているもののやはりところどころが傷んできている築30年を数える鉄骨造の社屋は、どう鼻屑目に見ても静かとはいいがたい。ひっきりなしに鳴り続ける電話のベルに、それに応える社員たちによって、それはそれは喧騒に包まれていた。

「……人の夢って、本当に儚いわよね」

やれやれと、アイテアはそう呟いて手元のマグを煽る。芳醇なダージリンなどそこには無く、冷めきった安物のインスタントコーヒーがさらにやるせなさを倍増させた気がした。

夢と現の両方にあって、同じものがひとつだけあった。アイテアのデスクをはさんで反対側に立つ、クシエットだ。

「あなたもそうおもわない？」

怒りと呆れがない交ぜになったような視線をくれている彼女に、アイテアは冗談めかして言ってみた。

「……ハア、確かにここ最近ねずっぽいのは知っていますが、せめて就業時間中ぐらいしゃきつとしていてくださいよ、社長」

半ばあきらめたのか、そういつてクシエット。最近は確定申告やらなにやらで、アイテアも三日ほど寝ていないのだ。

「分かった、気をつけるわ。それに、今が稼ぎ時だもの、へばっても居られないわね」

そういつてアイテアは自分の頬を軽くはたいて気合を入れなおす。

ヨーロッパの片田舎でひっそり営まれているジャンク屋「ティー・ポット」。それが、アイテアが敬愛する祖父から譲り受けた、現在の彼女の城である。

「国連軍からの廃棄機兵の受領は期日どおりに終わりそう？」

「ええ。書類での取引はすでに終わっていますから、あとは搬入されるのを待つだけです。7から12番ハンガーは今あけています」とこ

ろですし」

「結構結構。搬入されて着たらすぐにチーフとニューイ博士に作業にかからせて頂戴」

アイテアはそう満面の笑みで応え、指示を出す。零細企業なティールポットではあるが、人材の有能さは折り紙つきだ。

「博士も、ですか？ いまはSTにかかりっきりのようですけど」
クシエットの表情が多少曇る。ニューイ博士ことニューイ・ニューイ・ファンシェ企画・開発室長は、自他共に認める天才工学者だが、いかんせん常識が欠如しているふしが見られるため、クシエットはあまり好感を持っていなかった。もともとニューイ博士が企画・開発した製品は今も昔もティールポットの目玉商品を張っているのだから、やはり只者ではないのは確かだ。現在博士は第2工房を丸々占拠している新型機動兵装「ストレート・ティー」の解析に躍起になっており、ここ一ヶ月ほどは職務のほうがおろそかになっている状態でもあった。

「流石にずっと遊ばせとくってワケにもいかないしね。そろそろ息抜きにでも何か新商品を考えてもらわないと」

アイテアの言葉に、クシエットは苦笑した。まるつきり息抜きと本職が逆だが、博士はそういう人物なのだ。

「で、今日は何か予定あったかしら」

「今日は来期の採用試験と”お得意様回り”くらいです」

アイテアがそういつて卓上カレンダーを摘み上げるよりも早く、クシエットが日程を教えてくれた。本当に出来る部下である。まあ部下とはいえ、21のアイテアよりも2つばかり年上ではあるが。

「そ……じゃあ採用試験のほうはクシエット、あなたに任せるわ。私は営業に出てくるから」

アイテアはそういつて立ち上がると、座りっぱなしで固くなっていた背骨をパキパキと鳴らした。

「ええ、かしこまりました。お氣をつけて、社長」

「ん。じゃあ、いつてくるわね」

そうしてアイテアが事務所を出るのを見送ってから、クシエットは小さくため息をついた。

「面接試験なんだけど、社長が居なくてもいいのかしら……」

「裏競売……か」

「ええ、確かな情報ですぜ」

欧州のとある喫茶の個室で、中年風の男とテイクが対面に座って密談中であつた。テイクはコーヒーを口に含んで、中年の男が持ってきた情報を吟味する。

男の話によれば、町のはずれにある酒場で定期的に機動兵装のパーツを主にした競売が開かれるという。合法的な正規品から、非合法すれすれの盗品まがいな品までが出揃うとかで、この辺のジャンク屋の間ではそこそこの有名な話らしかった。最も競売主が認めた輩しか参加できないということで、実際参加している人数は少ない。そして、

「銀の髪に青い瞳の女か……」

「ええ。あつしも実際見たことはありやせんが、よっぽどの上玉だそうですぜ」

「フム……」

その特徴は、テイクの探している人物とぴたり一致していた。間違いないだろうと踏んだテイクは懷から封筒を取り出し、男に手渡す。

「また何かあつたら頼む。それから、くれぐれもこのことは……」

「わかってやすよ。あつしも、こんな払いのいい客を逃しは出来ませんよ」

そこそこの金額が納められた封筒を懷に隠しながら、男はへへへと笑った。テイクはコーヒーを飲み終え、席を立つと、個室を後にした。

「マスター、領収書切ってもらえるかな」

こんなことだから親兄弟に真面目すぎると揶揄されるのだが、し

かししつかり経費で落とすために領収書を切らせていると、ちょうど玄関の木製戸が開き、変わった風体の大柄な男が入ってきた。男は迷いなく先ほどもまでテイクがいたあの個室に入っていくと、ガチャリと錠前を閉める音が聞こえた。

（なかなか手広くやっている……こうもひっきり無しとはな）

おそらくあの男も先ほどもまで自身が接触していた情報屋の”顧客”なのだろう。テイクは深く考えはせず、領収書を受け取ってそそくさと店を出たのだった。

「なあ、アイテアちゃんよう。こっちの懐具合を鑑みてよ、もうちょつとまけちゃくれねえか？」

「だーめ。中古って言ってもまだまだ最新型のジェネレータよ？これがこっちの精一杯なんだから」

夕暮れも差し迫った頃、とある郊外の酒場にて、アイテアを中心に数人の男が卓を囲んでやいのやいのと話し合っていた。老いたとはいえ筋肉質で屈強なこわもての男どもに囲まれてなお、アイテアは物怖じも値引き交渉もしない。

テイクのつかんだ情報にあった、裏競売の真っ最中である。もつとも、アイテアはこれを営業と呼んでいたが。

ジャンク屋としての正規の仕事、つまり軍や民間から卸される機兵や装備を修理したり、分解したり、時には一からくみ上げたりするのとは別に、アイテアらティー・ポットは資材を同業者に卸す中継ぎのようなこともやっていた。もつともこれは合法的な商売であり、裏競売などではない。では今やっているものかというと、とどのつまり非合法スレスレの物品をやり取りしているわけだ。

現在ヨーロッパ地区では、依然として反国連派の武装組織と現地国連軍の衝突が頻発している。敵も味方も機兵を用いる戦場はまさに地獄の様相を呈すが、アイテアにとっては宝の山だった。行動不能になりその場に投棄された機動兵装をこっそりと分解して持ち出

し、今のような場所で売りさばくのである。いわゆる火事場泥棒だ。しかし国連としても大破した機兵を廃棄したり修理したりするのに相応のカネがかかることから、ジャンク屋たちの行為を黙認しているというのが現状だ。かといってれっきとした違法行為なのでそのまま売るわけにもいかず、こうして足の付かないようパーツ単位に分解して売りさばいているのが現状である。

アイテアにしてもこんなところでお上に目をつけられるわけにも行かないので、この競売の参加者はアイテアの信用の置ける者たちのみで構成されているのだ。

「それよりもアイテアちゃん、聞いたぜえ？」

そんなオトクイサマの一人、赤ら顔のティルが切り出した。

「なんでも、赤い機兵で戦場のお宝をがっばがっば集めてるそうじやあねえか。どんな凄腕を雇ったんだい？ 今度俺にも紹介してくれよ」

「ティルおじさん、それ禁句。企業秘密なの……それ以上聞くようなら、ティルおじさんへのサービスも考えちゃうな」

「おーいおい、勘弁勘弁。じいさまの頃からの付き合いじゃねえか、これからよろしく頼むよおアイテアちゃんっ！」

このとおり、と手を合わせてくるティルに、アイテアは「どうしようかしら」などと嘯いて見せた。もっとも、アイテアはティルの待遇をどうしようなどとは考えていないし、ティルも同様だった。

「はっはは、アイテアちゃんにはかなわねえなあ」

「まったくだ！ がっはっは」

ティルを茶化すように、ウォルグとシヅが笑う。二人ともティルと同じく、アイテアと深い面識のあるジャンク屋だ。信頼関係が成り立ったこの空間では、ただの笑い話のひとつである。

――ガラン、ゴロン

ふと、錆付いた鐘の音がこの場に新たな人物の到来を告げた。一様に、その場全員の視線が玄関に注がれる。店の前には【CLOS

ED】の張り紙がしてある。ならばこの競売の参加者か、と聞かれればその男はこの場の誰とも面識が無かった。

男は筋肉の塊のような上半身に袖口の異様に大きなコートをじかに羽織り、ぼさぼさの髪を後頭部で気持ちまとめただけといった異様ないでたちだった。顔にはにやけたような笑いを浮かべていたが、雰囲気は堅気のそれではなかった。

酒場の人間がいつせいに身構えるも、その男はまるで気にしないようにアイテアの前までやってきて、言った。

「ヨオねえちゃん、Jーbas社の超伝導モーターの新型と、102型スプリガンの衝撃吸収用ダンパーはあるかい？」

ずい、と身を乗り出してくる男に言い知れない不快感を感じつつも、営業用のスマイルを浮かべる。

「ごめんなさい、今はお得意様専用に分いている時間なので……また日を改めていただくか、本社のほうに連絡を取っていただければ、一両日中にご用意させて頂きますわ」

初めての客である。多少危険な雰囲気をもとわけているとはいえず、うまくいけば新規の顧客を開拓するチャンスだ。アイテアはなるべく丁寧に、目の前の男に断りを入れる。もちろん、ティーポットの売り込みも忘れずにだ。

「オイオイ、そりゃねえよ。俺様はここでこらで一番揃いのいいジャンク屋が商売してるって聞いて飛んできたんだぜ？なあ、都合してくれよ」

男は引かない。むしろつかみかかるように身を乗り出してきた。アイテアは厄介な客の到来に辟易としつつも、「ですから本社に問い合わせただければ」と何とか男を諦めさせようと必死だ。

しかし男はなおもアイテアににじり寄る。すでに吐息がかかるまでに顔が近い。

「……なら、しかたねえな。パーツの代わりに、あんたをお買い上げしてやるよ」

「なっ!？」

とんでもないことを口走る男に、アイテアも笑顔を驚愕のそれに染めた。依然にやけた表情を浮かべる男だったが、冗談で言っているわけではないことが肌で感じられた。この男、マジだ。

「噂どおりの上玉だ、これで当分退屈しないで……ん？」

次の瞬間、男は派手に殴り飛ばされていた。男を殴った主、ウォルグが腕まくりするようにアイテアと男の間に割ってはいいる。

「さっきから黙ってりゃ、クソくだらねえ話をべらべらとのたまいやがって。今度アイテアちゃんによってみる？こんなもんじゃすまさねえぞ、クソヤロウ」

「ウォルグおじさん！」

競売に参加していた屈強な男共が、アイテアをかばうように前に出る。

「アイテアちゃんは、俺らの娘みたいなもんだ。気安く近づくんじやねえよ」

初老とはいえまだまだ精神的にも肉体的にも現役を貫く男たちから一様に怒りの目を向けられてしかし、吹っ飛ばされた男は全く堪えていないように緩慢な動作で起き上がると、いやらしいにやけ面を崩さないままアイテアを見た。まるで獲物を狩る肉食獣がごとき視線に、背筋が粟立つのを感じたアイテアが、わずかに体を震えさせる。

「へえ、ジジイの癖に、そこそこなパンチもってんじゃねえか。いきなりだから、ちょっとびっくりしたぜえ？」

ゆらりと男が動いた。そして次の瞬間に、アイテアの顔の一寸先に男の顔。そして遅れて、テイルとウォルグのくぐもった声と、吹っ飛ばされた彼らがテーブルに衝突する音が来た。

その巨軀からは想像できないほどの瞬発力と、その体軀に見合ったパワーが、彼女の前に展開されていたバリケードをいともたやすく突破したのだ。

「だが、俺様としてもこんな上玉をみすみす逃すようなマネはできねえんでなあ」

「ツノヤロウ！」

アイテアから男を引き剥がすようにまた一人のジャンク屋がつかみかかる。が、かなわない。

こういう悪質な、具体的に言えばアイテアの身体を狙ってくるような下衆が訪れることはままあった。お世辞抜きで、アイテアは美少女の分類に入る。そんな彼女がこれもお世辞抜きでお天道様のもとで行われているとはいいいがたいアングラな商売に身を染めているのだ。やはりそういう輩も少なくはない。

しかし、いつもならば。そう、いつもならばこの屈強な男共が、そんな不屈な輩など完全にのしてしまうものなのだ。だが……

「ッハア！年寄りの冷や水って言葉、知ってるかぁ？ジジイ共オ！」
まったくかなわない。息すら上がっていない男は、赤子の手をひねるような気軽さで向かってくる老人たちをいなしていた。

テイクは車を飛ばしていた。

一分でも、一秒でも早く。欲を言えばあの男よりも先に……と、あせる気持ちを抑えながら、ハイウェイさながらのべた踏みと巧みなハンドリングで公道をかつ飛ばしていた。

なぜこうも急いでいるかと聞かれれば、時を少しさかのぼることになる。

喫茶店を出たテイクは、手持ち無沙汰に車の中で暇をもてあましていた。

情報屋の話であれば、取引があるのは夕刻。事を荒立てないためにも、彼女を確保するのはその終了を待ったほうがいい。

現在午後の3時を回るかどうかといった具合。取引の場所までは多く見積もって1時間もかからない。あまりに早くついてしまうのは、怪しまれるだろうと思ったからだ。

ふと、あの喫茶ですれ違った男が気にかかる。職場の情報部に照合させると、一時間と待たずに条件に当てはまる数人の情報が送ら

れてきた。

資料を流し読みしていくと、ドンぴしゃり。先ほどの男がリストアップされていた。

なるほど、軍の危険人物リストに登録されているだけはあるそう。そうたる経歴が記されている。

「街中での暴動、強姦……疑惑、火付け、殺人未遂……それでいて今まで服役の経験はなし、か」

テイクは一通りその書類を読み終え、フンと鼻を鳴らした。これだけやらかしてはまだ大きな罪に問われていないというのは、そっち方面に大きなコネがあるという背景が垣間見える。おそらく、これより大きな罪はもみ消され、小さな悪事は山とあるのだろう。顔写真も同梱されていたが、いけ好かないにやけ顔を浮かべたこの男をテイクは好きになれそうにもなかった。

と、そこではたと思い至る。この資料には大変な好色家だと書かれているが、それと先ほどテイクが得た情報を組み合わせたらどうか。情報屋には釘を刺したが、果たして約束が護られるとは言いがたい。先ほどの男が情報屋からアイテアの情報を得たとすれば、テイク手持ちの資料どおりの男ならばまずそこへ向かうだろう。

（それは……まずいな）

テイクとしては、ブロックス・レフにつながる有力な手がかりたる彼女が壊されてしまうのは非常に困る。もちろん彼女の周辺を軍の情報部に調べ上げさせることだって出来るが、それは最後の手段だ。なにせ、軍が抹消した事件の当事者である。大々的に情報部を動かすことは出来ないだろう。己の立場だけならともかく、下手を打てば姉の立場までを脅かしかねないからだ。

それに、いかに彼女が強奪犯だとしても、若い女性が襲われるのを黙ってみているなんていうのが、彼にはできなかった。

彼は、基本的に真面目で、優しいのだ。

死屍累々である。

別に死んでいるわけではないが、ウォルグをはじめとした男たちは一様に床に臥しており、もはや体力も僅かだ。

対する男は、びんびんしている。汗すらかいていない。依然いやらしいにやけ面をしたままだ。

銃火器の類を携行していないことをアイテアは後悔する。武器を携行しないのは信頼の証でもあったし、そもそも今まで武器などを使うまでもなかったから。

（油断……していたわね）

アイテアは内心歯噛みする。このような事態に陥るだろうことは、予想できたはずだ。それなのに周囲の信頼に過信し、準備を怠った。確実に、それは落ち度である。

「て、めえ……！」

赤ら顔のテイルが立ち上がって、アイテアの前に立ちはだかる。酔いはすっかり抜けているらしく、顔には幾つもの青痣を作っていた。

「へえ、まだ立つかあ。ホント、タフなジジイ共だなあ？」

なりふり構わず後ろからつかみかかってきたウォルグの顔面に裏拳を叩き込み、沈める。

鼻血を噴出して倒れこむウォルグだったが、何とかひざを着くだけにとどめる。自慢の口ひげが血に染まるのもかまわず、ウォルグは再び立ち上がりうとして足に力をこめる。

男は少しばかり意外だったというような表情を浮かべたが、すぐに元のやけ面に戻ると、腕を振り上げる。

「……待ちなさい！」

叫んだのは、アイテアだった。男は振り上げていた腕をびたりと止めると、アイテアを見る。

「あなた、名前は？」

アイテアの問いに、男は振り上げていた腕を下ろし、あごの下にあてがう。考えているというよりは、かっこつけているといったふ

うに。

「俺様はディレイド。ディレイド・ヴォーンだ。金次第でなんだってやる、傭兵ってやつさ」

「へえ、組合のブラックリストにそんな名前があったと思うけど、あなた？」

「さあ、な。あんたのコミュニティのことなんて、わかるわけねえだろ？」

ディレイド・ヴォーンはそう言って、にやりと笑った。

「Jーbas社の超伝導モーターの新型と、102型スプリガンの衝撃吸収用ダンパーね。わかったわ、すぐに用意させます」

「は？ おいおい」

アイテアはディレイドがこの程度で納得することはないだろうことはわかっていた。ここまで来ればすぐに感づく。ディレイドの目的は、最初からアイテアの体だ。

「なんなら、お望みのパーツを1つつけるわ。もちろん御代は結構」
手切れ金代わりよ、と言外ににじませ、アイテアは条件を提示する。相手に話の主導権を握らせるのは危険だ。身体的に渡り合えないのならば、交渉で渡り合えばいい。最も、ディレイドが交渉に應じることが前提ではある。このまま力任せにこられれば、ますます進退が窮まる。

「へえ、悪かねえ話だ。だがな」

ディレイドはそういつて、立ちはだかるテイルをハエでも払うかのように押しのけると、アイテアの眼前まで歩み出た。

「俺ア、あんたのほうに興味があつてな」

ずい、と顔を近づける。ディレイドに、しかしアイテアは動じず。

「そう、じゃあもうひとつパーツをつけましょう？ それでも……」

「あんたをいただいてから、ゆっくり商談に応じさせて……つと」

ディレイドのせりふが途中でさえぎられる。アイテアがすばやく取り出したマイナスドライバーが、首筋に突き立てられていたからだ。

「悪いけど、私は売り物じゃないの。そんなに女がほしいなら、花街にでもいってらっしゃい？」

精一杯の凄みを利かせ、アイテアが言う。これで引き下がってくれるとは思えないが、もはやこれ以外に道はない。

「ッは……乳のでさえだけの女かと思ってるや、なかなかどうして癖が強い。……だがな」

ディレイドは言い終わるか終わらないかのタイミングですばやく腕を動かし、アイテアの手首を軽くひねる。アイテアの短い悲鳴についで、ドライバーが床に落ちる音が響いた。

「ハハハッ！ そんな女も、悪くねえ！」

ディレイドはそのままひよいとアイテアを持ち上げる。老ジャンク屋たちは蓄積したダメージで動けず、ただその光景を見ることしかできない。

「つざけんじゃ、ないわよ！」

足が床から離れる。アイテアはその状態から渾身の膝蹴りを放つも、対するディレイドはそれを受け止めようともしない。

「ははっ！ そんな蹴りじゃ、きかねえなあ。それにしても……」

ディレイドはまったく堪えた様子も無く、膝蹴りを放った状態のアイテアのスカートを空いた手でめくると、ほお、とさも意外そうな声を上げた。

「下着は青のレースつき、か。服同様、黒を予想したんだがなあ？」

ディレイドはそのまま手を這わせると、思いつきりアイテアの臀部を揉みしだいた。

「ふーむ、乳だけじゃなく、こっちなかなか」

「！！？ このっ、変態ッ！」

違和感、嫌悪感、その他もろもろの気持ちの悪い感触がいつぱんに、ゾワリと背筋を駆け抜ける。それは一瞬で怒りに変わると、アイテアは空いた手で腰の工具袋から小型の玄翁を抜き出していた。

「はははははっ！ 無駄だなあっ！」

ディレイドは側頭部めがけて振り下ろされていた鎚だったが、先

ほどまで尻をまさぐっていた手をすばやく動かしてそれをつかむと、勢いをつけてその状態からアイテアを床に押し倒した。

「ッ……かつ、はっ……!!？」

背中をしたたかに石床に叩きつけられ、激痛に一瞬意識を手放しかける。しかしここで意識を手放せば、ディレイドの思う壺だ。アイテアは歯を食いしばり意識を保つと、敵意の散々こもった目でディレイドを睨み付けた。

「はあっ！もって帰ってからやってやろうと思ってたが、この聴衆ン中つてのも悪くねえな。なあ？」

「ンなわけ、ないでしょう……!!」

息を荒くし、盛った獣そのもので言うディレイド。すでに彼の一部が服の上からでもはつきり分かるほど隆起していた。アイテアは返答代わりとまでに精一杯ディレイドのソレを蹴り上げる。確かな手ごたえがあったが、しかしディレイドは毛ほども動じていないように見えた。

「はっは、まだ、コイツを好きにさせてやるわけにはいかねえなあ」

「な、なんで!？」

アイテア自身は女だから知りようも無いが、伝聞によれば軽い衝撃を与えられただけで悶絶するほどの痛みを生じさせる部位のはずだ。なのになぜ、目の前の男はこうもケロリとしているのか。

「俺様の股間プロテクタは特注品でなあ、伸縮自在！硬度抜群！耐衝撃性能は折り紙つき！俺様のコイツをソフトにガードオ！」

「あ、あんた、馬鹿じゃないの!？」

その姿に狂気じみたものを感じたアイテアは何とかして逃れようとするも、無駄だった。手足をばたつかせようにも、がっちりと手首をホールドされたこの状態では出来ることなど少ない。

「馬鹿？おいおい、天才だぜ？俺様は」

パシンツと軽く頬を張られる。「おとなしくしやがれ」と、ディレイドの吐息が耳にかかった。

ディレイドはすでに目的を達したかのような満足面で、そのにや

けきった顔はアイテアに嫌悪感しか抱かせない。ディレイドの腕がアイテアの胸元に迫る。脱がせるのも億劫だというのだろうか、アイテアの黒い服に手をかけ、一気に破こうとして

「ぐおっ!？」

吹っ飛ばされた。

「余裕ぶっこいてんじゃねえよ、クソガキが……!」

「アイテアちゃん、今のうちだ! さっさと逃げろォ!」

みれば、根元から折れた椅子の足を持ったテイルとウォルグ。周囲に散乱する木片からかんがみるに、ディレイドの油断を突いて椅子で殴り飛ばしたのだろう。口ではまだ威勢のいいことは言えているが足取りはおぼつかない。立っているのがやつとな有様だ。

最後のチャンスだと、アイテアは思った。老人たちの体力はもうわずかで、虚をつかれたとはいえディレイドはすでに起き上がりかけている。

アイテアはすばやく立ち上がると、一気に戸口へと走った。しかし

「フン、老いばれどもが、うざってえなあ」

ドサリと何かがくずおれる音と、そんな呟きが聞こえ、アイテアは振り返ってしまう。致命的だった。

「さあ、とんだ邪魔が入ったが、続きとしゃれ込もうぜえ? そんな震えた足じゃ、俺様からはにげられねえよ」

「ふる、え……!？」

そのとき初めて、アイテアは己の動悸を確認した。

がたがたと震える足は、アイテアに逃げ出すだけの力を与えてくれるとは思えない。頭の中には恐怖と怒りといった負の感情が渦を巻き、思考は空白化する。見えているのに見ていない、聞こえているのに聞こえていない。考えているのに考えられていない。

ディレイドがゆっくりと迫る。すでに邪魔者は誰もいない。獲物は逃げる足を失った。急ぐ必要は無い。

一步、また一步ディレイドが迫るたびにアイテアの思考は怒りで画一化されていった。体格差は大いにある。戦力差は絶望的だ。し

かし、怒りで我を忘れた彼女にそんなことは関係ない。ディレイドが間合いに入ったと同時に、彼女はありとあらゆる手を使ってでも目の前の男の息の根を止めるつもりであった。ソレが到底かなわないだろうことは、明らかであるのに。

後三步、二歩、一歩……今。

「酒場に喧嘩は付き物かもしれんが、流石にやりすぎだな。ディレイド・ヴォーン」

今まさに飛びかかろうとした瞬間、飛び込んできたのは第三者の声。銀髪をお下げに垂らし、深緑のコートを羽織った眼鏡の男、テイクは言い終わるが早いかのタイミングで手にしていた拳銃のトリガーを絞った。

パンツ、と、乾いた音がしたのよりも早く、ディレイドがバックステップで距離を取った。銃弾はアイテアの肩越しに酒場の石床で火花を散らす。

銃を構えたまま、テイクはアイテアの肩をつかんで自分の後ろに下がらせる。アイテアは助っ人が現れたことから来る安心感のせい、スツット足から力が抜け、ペタンと床に座り込んだ。

「座るな。たつて、距離をとれ」

テイクはそんなアイテアに厳しく言う。銃口と視線はディレイドに向けたままである。

「え、あ、うん」

アイテアは素直にうなずくと、必至に立ち上がって数歩下がった。テイクはそれを気配で感じると、口を開く。

「予想は当たった。的中だ。ディレイド・ヴォーン、悪いが、俺もこの女にちよつとした用がある。残念ながら、今日のところはお引取り願おう」

テイクの口調は固い。これは命令であり、警告だ。テイクは狙いをディレイドの眉間に定めると、「返答は？」と、短く問いかけた。「なんだあ？ テメエもこのねえちゃんの客かよ。わりいが、俺様が先約だ。とつとと帰るんならパンチ一発で許してやるぜ？ 銀髪のに

「ちゃんよお」

「フン、資料のとりの男のようだな、ディレイド・ヴォーン。貴様に先を越されると、俺の用が果たせなくなる可能性が高いのでな。それに、お前はここで逮捕しておいたほうがよさそうだ」

そういつて手錠をちらつかせるテイク。ディレイドは苦虫を噛み潰したような表情となる。

「テメエ、サツか」

「いいや、俺は軍人だ」

テイクはそういつて拳銃を突きつける。ディレイドはにやけ面を捨て、大きく舌打ちした。

「うせえ、うせえなあ。テメエも、ジジイ共もよお！」

ディレイドが足にぐつと力をこめたのが解った。テイクは引き鉄にかけて人差し指に力をこめる。

と、そのとき。

「!?!」

「煙幕、だとお？」

戸口から、黒い金属製の球体が二つ、投げ込まれた。ディレイドはバックステップで距離をとり、テイクはとっさに構えを解いてアイテアの場所まで跳んだ。ディレイドの企みではないようだが、用心するに越したことはない。

「何だ……?」

ディレイドがひどくいらだった声色でつぶやいた。と同時に、ズンッと地面が揺さぶられる。

『アニキ、逃げますよ! アニキの機体も持ってきましたから!』

スピーカーを通したような馬鹿でかい声が、酒場の外から呼びかけてきた。アニキ、とはおそらくディレイドのことだろう。おそらく先ほどのゆれは機動兵装が着地したときの衝撃だ。

『警察が1km手前まで来てます! また姐さんにしばかれないんですか!?!』

立て続けに呼びかけられる声に、ディレイドはしぶしぶといった

ふうに大きく舌打ちをすると、戸口に向かって駆け出した。やはり、速い。

「ちッ！逃がすか……」

テイクはほぼ真っ白な視界の中で気配だけを頼りに照準をつける、牽制のために一発撃った。手ごたえはない。後悔は後にしても一度デイレイドを探すが、煙の中から不意に現れた細身の……デイレイドではない男の重いハンマーのような一撃がテイクの鳩尾を襲う。

「っ、ぐあ……！？」

覚えずひざを着く。テイクを襲撃した男はうずくまるテイクを無言でしばし見下ろした後、きびすを返した。

「ツラは覚えたぜえ？銀髪のニーチャンよお！」

デイレイドの声が戸外から聞こえた。直後にジェットエンジンをふかしたような轟音と、風が酒場に流れ込んでくる。

「つく……！」

何とか立ち上がったテイクだったが、風によって煙幕が吹き飛ばされた酒場の中にも外にも、すでにデイレイドの姿はなかった。

「ちょっと、あなた大丈夫!？」

デイレイドが去り、煙幕も晴れて、店の中はまるで嵐が居座ったかのような有様だった。アイテアは傍らで肩で息をしているテイクを心配そうに見やるが、

「心配ない。それよりも、そこに倒れている老人たちを介抱してやったらどうだ」

と、テイクは仏頂面を作って言う。

「へっ、散々やられちゃったが、わしらはまだまだ大丈夫だ。アイテアちゃんこそ、怪我はなかったか？」

「おじさんたちこそ、無事でよかった……」

よろけながらも笑って見せるウォルグに、アイテアはひどく安心

したように息をつく。

「まあ、あんまり無事とは言えねえがな……イチチ、やっぱりもう若くないと痛感させられるなあ」

「まったくだ」

顔中に青あざを作ったテイルとシヅが豪快に笑って見せた。こちらは立つのもままならないのか、壁に寄りかかってではあったが。とにかく、命に別状はなさそうである。

「でも、ごめんなさい。私のせいでおじさんたち……」

アイテアがすまなさそうに肩をすくめる。自分を護ろうとしてこうも傷だらけになってしまった男たちに、罪悪感を抱いているようだった。

「いいんだよ。皆、アイテアちゃんが好きでやったことだ。それよりも競売、やめないでくれよ。アイテアちゃんの卸す商品は一級品が多いからなあ」

「ああ、さっきも言ったろ？アイテアちゃんは、わしらの娘みたいなもんだからな」

ウォルグとテイルがそういつて笑った。アイテアが次の競売の開催とサービスを確約すると、周りの空気がどっと和やかになったようだった。

「あなたも、誰だかわからないけど、ありがとう軍人さん」

アイテアがテイクに向かって礼を言うが、テイクは難しい顔だ。

「……本当に、俺に見覚えがないか？」

テイクは、鋭い目つきでアイテアを見た。

「へ？……あ、あああー！」

感謝の言葉へのおんまりな返答に、アイテアは怪訝な顔をしてまじまじとテイクの顔を見る。たっぷり数分間テイクの仏頂面を眺めて、ようやく何かに気づいたのかテイクを指差して大声を上げた。

「あ、あなた、あのときの！？」

「……ようやく気づいたようだな。なら、俺がここにいる理由も察しがつくだろう？アイテア・タトゥーリ」

「……さあ、なんのことかしら？それに、私の名前を知ってるってことは、あらかた調べたんじゃなくて？」

あくまでシラをきるアイテア。テイクはさらに表情を険しくした。
「お前が一年前に強奪したブロックス・レフ……返してもらうぞ」
「強奪？私は正規の依頼があつて拝領したのよ。人聞きの悪いことを言わないで。それに、あのコはストレイト・ティーよ。ブロックスレフなんて名前じゃないわ」

「拝領？なにを言つて……」

アイテアの一言は、テイクにとって信じられないものだった。もちろん嘘の可能性が高いが、可能性としてはある。それに、もしアイテアの話が本当ならば、ブロックス・レフの登録が軍から抹消されたのだって辻褄が合う。そう、最初から仕組まれていたのだとすれば。

「話は終わり？それじゃ、失礼っ！」

「!？」

一瞬、思考に氣をとられていた。好機を見たアイテアが、テイクの脇をすり抜けて戸口へと走る。

「まてっ！」

「お話ならいつかゆっくりとね！私はディレイドを追うわ。この借りは、今返してやるんだから！」

テイクの静止も空しく、アイテアはとんでもないことを言い放つて店を飛び出した。テイクは小さく舌打ちすると、駆け出す。テイクの足ならば、アイテアになどすぐに追いつく。だが、店を出たテイクを待っていたのは、赤い巨大ロボットだった。

「……！？ブロックス・レフ！」

『ストレイト・ティーよ！』

それは彼が今まで捜し求めていた、彼のものとなるはずだった国連軍の最新鋭実験機動兵装。ソレが今まさに、彼の目前にそびえていた。

「持ってきておいてよかったわ……」

アイテアは赤い機動兵装ストレイト・ティーのコクピットで機体を立ち上がらせながらつぶやく。ジャンクパーツの輸送用に引っ張ってきたのが幸いした。虎の子であるST以外に動かせる機兵がなかったというのが正直なところだったが、まあそれは零細企業ゆえ仕方がないということにしよう。

「電磁迷彩、偽装外装解除……っ」と

アイテアがそういつてコンソールをはじくと、今までスプリガンにしか見えなかった機体が瞬時にSTの姿となる。光の屈折や映像投影を利用した最新の隠遁装備だ。

STには、このような軍でもいまだ普及していないような高度な技術が数え切れないほどに詰め込まれていた。中には、用途がまったくわからない機能もいくつかある。ニューイ博士の言うところでは、「こんなに高価で無駄な機能を詰め込んだ機体を試験機とはいえ軍が作るなんて驚き」だそうだ。

アイテアは、レーダーを中範囲から広範囲へ切り替える。精度は若干落ちるが、自機を中心として100kmの範囲を索敵できる。

「……おそらく、これね。こっちを背に西へ西へと向かってる。……待ってなさいよ、さっきの借り、百倍にして返してあげるから！」

アイテアは機体を西に向けると、グンツとフットペダルを踏み込んだ。MOFが作動し、STの巨軀を一気に上空へと放り投げる。Gキヤンセラが働いてなお激しい加速度の中、アイテアは細かく操縦桿を制御して一定の高度を保つと、そのまま矢のように、レーダーに映る一点、デイレイド・ヴォーンを追った。

先ほどの酒場のあった町から西に進むと、そこは荒野になっていた。100年前までは住宅街だったそうだが、今はもうその面影もなく、崩れ落ちた廃墟やほとんどが砂と化したアスファルトのみが

当時の名残である。

そこを、一体の大型ロボットが走っていた。少し遅れて、二体の整備用ロボットが追従している。

「ツチ！獲物を逃した時の苛立ちは、なかなかおさまらねえから厄介だぜ」

その右腕に巨大な鋏を装備した大型ロボット、イレイズシザーのコクピットで、ディレイドは苛立ちを隠そうともせずつぶやいた。

「落ち着いてくださいよ、アニキ」

「……」

そういつてディレイドをなだめるのは、先ほど外部スピーカーを使って呼びかけていた青年だ。ディレイド謹製ロボットである「俺様シリーズ」の整備搬送用にこれまたディレイドが製作した小型ロボットに乗っている。

その何度目とも知れないやり取りを無言で聞いているのは、スキンヘッドでいかにもな雰囲気をかもしている青年である。彼もまた、小型ロボットでディレイドに追従していた。

「……セノー、カジロ。お前ら、何で俺の居場所がわかった？」

ディレイドはそういえばとも言うように、二人の青年に問う。「姐さんにあのポイントを指示されました。整備用アームで襟首つかんでも引っ張って来いってね」

さもあきれたように、ディレイドの一番弟子である章輔・セノーが応える。

「……発信機かなにかつけられてるんじゃないか、ボス？」

言葉少ななスキンヘッド、ゴーゲン・神代は訝しげな表情で言う。

「なにい、あいつめ、いつの間にそんな……！」

ディレイドは先ほどから会話に出ている『姉さん』を頭の中に思い描いた。胸糞悪いことに、高笑いしている姿しか想像できなかったが。

「ちっ、帰ったら、とことんかわいがってやらねえとなあ……！」

唯我独尊を地で行くディレイドが唯一頭の上がない人物である

が、ベッドの上では別である。今日の鬱憤まとめて晴らしてやる舌なめずりをしたところで、耳障りなアラートがイレイズシザーの操縦席に響いた。やっと平静を取り戻しつつあったディレイドの精神を、ソレはいやおう無く逆なでする。

「なんだあ！」

「……敵だな」

「ナニか分かりませんが、おそらくロボット、機動兵装の類じゃねえかと！ まっすぐこっちに突っ込んでますぜ！」

あくまで淡々としたゴーゲンに対し、章輔は状況を出来うる限りオペレートした。

「へえ、なかなかの速度だ。スプリガンじゃネエな……」

ディレイドはそういうやいなや、イレイズシザーを転進させる。章輔とゴーゲンも、あわてて機体を急停止させた。

「アニキィ！ なにするつもりです！？」

「知れたこと、鬱憤晴らしよォ！ こんな速度を出せる機体だ、手土産代わりに持って帰るぞ！ お前らはそこで待機してろや！」

言うが早いか、ディレイドは来た道を引き返すようにイレイズシザーを加速させた。その様子に章輔が何か言おうとしたが、ゴーゲンが無言で首を振るのをみて、章輔もひとつため息をついた。

「今のアニキじゃ、止めてもきかねえや」

「見えた……！」

高速飛行するSTのコクピットでアイテアは、UNKNOWNを示すフリップが射程内に納まると同時に、ビームカノンのトリガーを引き絞った。この荒野は国連軍の訓練場でも定期巡回コースにも含まれてもいないことから、遭遇したスプリガン以外の機はディレイドのものであると決め付けての行動である。背部に納められていた砲身が肩の前に展開され、同時に極太の粒子ビームを放った。通常のビーム銃であれば届かない、届いたとしても効果を期待できない

距離ではあるが、STのビームカノンは十分効果範囲内である。それにもとより当てるつもりなど毛頭無く、足を止めさせるための牽制打だ。狙いは的中し、デイレイド機（と思しき光点）は動きを止める。これを好機と、アイテアはSTをいっそう加速させた。

「……アレね！」

敵機が肉眼で確認できた。ビームカノンから放たれた閃光は機体表面を少し焼く程度にとどまったらしい。アイテアは一定距離をとって機体をホバリングさせると、外部スピーカーを入れた。

「私の商売を邪魔するばかりか、大事なお客にまで手を出したこと、後悔させてあげるわ、デイレイド・ヴォーン！」

荒野に、アイテアの声がこだました。たっぷり数秒間を置いて、やがて相手から聞こえたのは、笑い声だった。

『はは、ははは……ハハハ！誰かと思えば、さっきのネエちゃんか！どうした！？手土産まで持って、俺にやられにきたってかア？』
「つなわないでしょ！覚悟なさい、さっきのかりを、百倍にして返してあげるから！」

『ハッハア！無駄だぜ！』

間違いない、デイレイドだ。アイテアは怒りをあらわにすると、バックステップで半歩距離をとった。デイレイドはさも愉快といった口ぶりで、イレイズシザーをSTに向け一気に加速させる。

『殺すのは勿体ねえ！動かなくさせてもらうぜ……なに！？』

一瞬でSTの懷に飛び込んだイレイズシザーは右手のシザーソードを逆袈裟に切り上げる。狙いは腕の付け根の間接部。達磨にして持って帰ろうという魂胆だ。

通常の機動兵装よりふたまわりほど大柄なイレイズシザーはその巨体に似合わぬスピードと、その巨軀に見合ったパワーを持ってシザーソードをふりあげる。次の瞬間には、STの手足は永遠に本体とさよならをしている、はずだった。

「STを、タダの機兵と思わないことね！」

どうだろう、STは展開式の戦斧ハルバートでもってして、完全

にイレイズシザーの攻撃を受け止めているではないか。通常の機動兵装に比べても小柄な部類に入るSTの臂力は、まさに規格外だった。

STは鏢迫り合いの状態からジリジリとイレイズシザーを押し下げる。イレイズシザーが力をこめたが、STはそれにも動じず逆に斧をはらってイレイズシザーを吹っ飛ばした。

『っ……！？なんてえパワーだ！ますます気にいった！』

押し飛ばされてなお、デイレイドは余裕を見せていた。即座に態勢を立て直すと、二度三度とシザーソードをSTに打ち付ける。対するアイテアはSTの左手に持ったハルバートでその斬撃を明後日のほうにいなしながら、攻勢に出るチャンスを探っていた。

「さすがに、隙がない！」

『へえ！やるじゃねえか、ここまで手練とはよお！』

互いに致命傷を与えられないまま、一進一退を繰り返す。体格差がある分、いくらSTにパワーがあってもイレイズシザーが有利だ。突然だが、アイテアは多少特殊な能力を持っている。”空間の構成”を把握できるというその能力は、目に見える空間の中にある物体の最善の配置を予測できるというものだ。ある意味小規模での未来予測である。具体的に身近なたとえば用意するなら、プラモデルを説明書読まずに迷い無くくみ上げられたり、機械のウィークポイントがぱっと見ただけで大体分かったりするもので、本業であるジヤンク屋家業の中で自然と身についたものなのだが、それが戦闘でも功をなしていた。

『びっくりするなあ！ただの気のつええネエちゃんかと思ったりや、この俺様と互角かよ！オンナ、名前を聞いてやるぜ！』

一瞬先を先読みして、その場所にハルバートを繰り出す。この能力とSTのスペックを持って、ようやくアイテアはデイレイドに互角で渡り合えていた。

「名前も知らずに襲い掛かってきたわけ？盛った猫かって話よ！」
常々イライラとはしていたが、その言葉についてイラッとして、

勢いに任せて大振りの攻撃を繰り出す。繰り出してしまった。

『こいつが鉢だってこと、忘れたかぁ！？』

「しまっ！？」

態勢を立て直そうとしたが、遅い。遠心力がついたハルバートを引き戻すのに、一瞬の隙ができる。その隙を突かれ、ハルバートをシザーソードで挟み込まれてしまう。

あまりにがちり挟み込まれている自らの得物を即座にあきらめ投棄しようとするが、その隙にイレイズシザーの左腕ががっしりとSTの頭部を鷲掴みにした。

『この俺様に名前を聞かれてるんだ、光栄に思いな！』

そういつて、STの頭をつかんだ左腕に力をこめていくイレイズシザー。ミシミシといういやな音が、STのコクピットにいるアイテアの耳に響く。

「思うわけ無いでしょ、馬鹿じゃないの！」

『本当に気の強いやつだ！だが、どうする？このまま捻りつぶされてえのかぁ？自慢のビームもこの距離じゃア撃てねえよなあ』

さもさも愉快そうに、サディストの表情を浮かべてデイレイド。

「そうね、ビームは撃てないから……こうさせてもらうわ！」

アイテアは言うが早いかビームカノンとは別のトリガーをひきしぼった。間髪いれず肩の装甲の一部が展開、内部機関を覗かせると、せり出してきた90mmモーターカノンが火を噴いた。スプリガンの手持ち武器であるマシンガンと同等の破壊力を持ったソレはイレイズシザーに致命傷を与えることすら出来なかったものの、一瞬ひるませることは出来た。

頭部の拘束が若干緩む。アイテアは大きくSTをしならせて掌の内から頭部をはずす。そのままイレイズシザーのどてっばらにキックを食らわせてやると、おそらくさっきの銃弾を関節にもらっていたのだろう、自慢の大鉢が腕の付け根ごと引きちぎられた。

『くっ、うう！？この、巨乳女がぁ！』

景気よく吹っ飛ばされたイレイズシザーの中でデイレイドが悪態

をついている中、アイテアは器用にハルバートからシザーソードをはずして、コクピットの中で御満悦だ。

「ん、なかなかの収穫ね。ディレイド、これは慰謝料代わりにもらっていくわ。あなたの機体、もう戦闘は無理だろうから、今日はこれで見逃してあげる。今後二度と、私の前に姿を見せないで」

『ぐ、調子に……!』

ディレイドがイレイズシザーを立ち上がらせようとするが、先ほどの衝撃でいくつかのシステムがダウンしたらしい。負けることなど一切考えない、一から十まで完全手製の設計があだとなった。

アイテアは動かないイレイズシザーを一瞥し、踵を返す。借りは返した。もうこの場にとどまる理由も無い。というか、結構暴れたわけで、軍の保安部隊が来るまでにはなんとしても撤収したいというのが本音であった。

が、そうは問屋がよろしてくれない。突如コクピットにロックオンアラートが鳴り響き、アイテアは考えるより早くSTに回避行動を取らせる。

「なに!？」

自機を掠めていく閃光にひやりとしながらも、アイテアは攻撃者の索敵を開始する。すぐに見つかった。スプリガンである。

「げ、もう見つかった!？」

あわててアイテアはSTを加速させるが、追っ手のスプリガンはそれを見越していたかのようにすでに肉薄していた。繰り出される剣戟を、左腕にイレイズシザーの腕をかかえたSTは、何とか右手一本でハルバートを操り、スプリガンに対峙する。

『待てといった! アイテア・タトゥーリ!』

接触回線が開かれる。音声のみの通信だが、それがあの軍人、テイクだと分かったら、アイテアは露骨にげんなりとした。

「またあなた!？ しつこいわよ!」

『付きまとわれたくなければ、ブロックス・レフを返すことだ!』
「返せ返せって!」

肩のモーターカノンで牽制し、何とかテイクのスプリガンと距離をとる。そのまま逃げられるような間合いではないが。

「それに言ってるでしょ、ストレイト・ティーよ！」

『戯言を！ソレの同系機は一機だけだ。俺の機体に、変な名前をつけないでもらおうか！』

「だれがあなたの！」

言い争いをしながらも、アイテアはテイクのスプリガンから逃れようとする。だが、テイクはぴったりと距離を詰めて離れない。デイレイドのイレイズシザーに数段劣るはずの機体で、それを圧倒したアイテアのSTに互角に渡り合うその腕前は、アイテアに軽い戦慄を抱かせた。

（なんて動き……！この軍人、強い！）

アイテアの予測ですら、あてにならない。トリツキーかつ堅実な動きで、どんどん追い詰められていく。

「と、ともかく！これは私のものなんだから！」

あたるわけも無いがビームカノンを放つ。目くらまし位にはなるかもしれないと思つての行動だったが、ソレすら意味を成さない。

『強情だな！』

「そういう性格なの！」

幸いテイクはこの機体と搭乗者であるアイテアに危害を加えるつもりは無いようだ。あからさまに手加減をしているのが分かる。手加減していて、この強さなのだ。

『仕方が無いな、多少手荒なマネに出させてもらうぞ！』

「今もジューブン手荒でしょ！」

展開しっぱなしのモーターカノンは、残弾が残り少ない。もともと戦闘を想定していなかったため、弾薬はそんなに積んできていない。想定外がすぎたのだ。アイテアはモーターカノンを収納する。残りはハルバード一振りだけだ。

対するテイクのスプリガンは今まで使っていたエネルギーソードをすばやく収納すると、空中を蹴ってハルバードの間合いに飛び込ん

だ。いきなりの行動にアイテアが驚く間もなくスプリガンがSTの袖口、もとい手首をつかむと、そのまま空中で背負い投げをかました。

衝撃が来る。予感したアイテアはSTのM O F Sを最大にして落下の衝撃緩和措置をとると、歯を食いしばる。直後、背面から地面に叩きつけられた。風化したアスファルト片がもうもうと立ち込め、後生大事に持っていたイレイズシザーの右腕もほおり出された。アイテアは気を失いこそしなかったものの、落下の衝撃で軽い脳震盪を起こしたのか、焦点が定まらない。

そこへテイクのスプリガンが着地し、プラズマライフルの銃口をぴたりとSTのコクピットに合わせていた。

『ここまでだ。おとなしく投稿しろ』

テイクは努めて冷酷に、事務的な口調で言った。あまりにも一方的なやられ方にアイテアは歯噛みしつつも、どうにかこの状況を打開する策を模索して……

『コンの、クソオンナがあアア！』

ピンチとチャンスが同時に現れた。

テイクは仰向けに倒れるSTに向け、冷たく光る銃口を向けていた。もちろん本気で撃つことはしないつもりだが、どうしても言うことを聞かない場合は仕方ない、ライフルのエネルギーを最弱にしてしばらく気絶してもらうくらいのことならばするつもりだ。

なんにせよ、このまま逃がすつもりは毛頭ない。一年追い続け、ようやくめぐり合ったチャンスなのだから。

そういったある種の達成感と横たわるSTの姿に、わずかばかりの油断が生まれたことは、否定できない。

『コンの、クソオンナがあアア！』

通信ではない。外部音声が荒野に響き渡ったのとほぼ同時に、テイクのスプリガンは横合いから突っ込んできた物体、ディレイドの

イレイズシザーに思いっきり突き飛ばされていた。もんどりうって倒れるテイクのスプリガン。

『ディレイド！？あんた、まだっ』

通信機からは、繋ぎっぱなしになっているアイテアの狼狽した声が飛び込んでくる。

「無力化したんじゃないのか！？」

一瞬朦朧とする意識の中、たまらずテイクはアイテアに怒鳴る。STに気をとられてイレイズシザーの確認をしなかった自分にも、非があるにはあるが。

『そのつもりだったんだけどね……！』

片腕だけになりながらも襲い掛かってくるディレイドに辟易としながら、緊張した声でアイテア。

『やってくれたなあああ、この巨乳女あああ！』

どうやら、ディレイドは怒り心頭。ここまでコテンパンにやられたことがなかったのか、小さくはないプライドを傷つけられ、もはやアイテアしか見えていない。

『しねやああああ！』

ディレイドは叫ぶと、残った左腕から高枝切バサミのような武器を伸ばし、STに向けて振りかぶる。狙いは、コクピット。

『つく！？』

対して先ほどのダメージからいまだ立ち直りきれていないアイテアは、STに満足な防御行動をとらせることができなかった。死が、明確なイメージとなって彼女に襲い掛かる。

テイクがすばやく体勢を立て直し、プラズマライフルを構えるが、間に合わない。

『い、いやあああああ！？』

「アイテア・タトゥーリっ！」

間に合わない。何もかも。アイテアの悲痛な叫びが、スプリガンのコクピットに反響する。

高枝切バサミが、STのコクピットに今まさに突き刺さらんとし

たとき、彼女の叫びに応えるかのようにSTのツインアイに赤い光がともると、淡い山吹色をしたエネルギーの奔流がSTから放出された。

「Eフィールド……いや、違う!？」

山吹色のエネルギーにイレイズザーの高枝切バサミが触れた瞬間、それは本来の構成を忘れたかのように細かな粒子に分解されていくではないか。

『ンな、なにいい!？』

ディレイドの驚愕の声が荒野に響く。

「いったい……なにが」

テイクは、信じられないものを見るような目で、ただそれを眺めることしかできなかった。

彼女は、確かに死を覚悟した。しかし、いつまで経ってもその瞬間を感じることはなかった。

「う……?」

反射的に頭を覆っていた手をどかし、ぎゅっと瞑った目を開くと、そこには光の世界があった。

一瞬、痛みを感じることもなく天国にでも召されたのかと思ったが、どうやらそれは違うようだ。自分が、いまだSTのシートに身を預けていることがわかったからだ。

「この……光は?」

モニタを通してコクピット内にもあふれるこの光は、いったいなんだろうか。どこか温かみと懐かしさを感じる、この光は……

「ツつ!？」

そのとき、短く鋭く頭に痛みが走る。同時に、今見ている光によく似た色の平原と、そこに佇む大きな一頭の白い犬のヴィジョンが脳裏に閃く。それは一瞬のことだったが、言いようのないデジャビュを感じたあの光景は……

アイテアがゆっくりと機体を立ち上がらせる。それを待っていたかのように、光はスウっときえた。

「そうだ……ディレイドは!？」

アイテアがあわてて周囲を確認すると、そこには左腕を失って、再び倒れたイレイズシザーがあった。

『クソッ、クソオッ!』

スピーカーから悪態を駄々流しにしているところを見ると、ディレイド本人は無事らしいが、気体はもう動かないらしい。

「いったい、何が……」

『アイテア・タトゥーリ!』

その状況を図りかねてアイテアが考えていると、通信機からティクの声。

「なあに、軍人さん」

『無事だったようだな……まあ、それはいい。その機能は何だ? 一年前に渡された操縦マニュアルには、そんな装備のことなどひとつも書いていなかったぞ』

「さあ、ね。私にも解らないわ」

『お前が後付で搭載したものではないというのか?』

「ええ」

そう応えてやると、ティクは沈黙した。何か考えているのだろう。『……詳しいことは、その機体をこちらに引き渡してもらってから、調べるとしよう』

そういつてプラズマライフルを再び突きつけるティク。

「まっぴらごめんよ……!」

そういつて、アイテア。

『そうか……!』

ティクはそういつて、説得は諦めたとでもいうようにエネルギーを最小に設定したプラズマライフルのトリガーに手をかける。

『むっ!?!』

「へ!?!」

ふと、テイクのスプリガンが銃口を下ろしたかと思うと、横っ飛びに飛んだ。あわててアイテアがレーダーを確認すると、こちらに向かつて小型の熱源が二つ、超高速で接近中だった。

「ミサイル!？」

瞬時に判断して、しかし回避は間に合いそうにない。切り払おうにも、ハルバードは先ほど取り落としたままだ。

「なら!」

アイテアはSTを前方にひねりを入れて宙返りをさせてミサイルと正対させると、肩のモーターカノンからなけなしの弾丸を使って弾幕を張った。

ほとんどがミサイルに当たらないものの一発二発当たれば御の字だ。ついに弾丸がミサイルに命中する。しかしミサイルは爆発せず

……

「また煙幕う!？」

もうもうと立ち込めるのは、先ほど酒場にて放たれたものとは段違いの規模の対機兵用煙幕だった。

『っち、逃がすか!』

テイクの声。STのモニタを急いでサーモに切り替えると、イレズシザーを二体の小型ロボットが引っ張っていくところが映し出されていた。テイクがライフルの照準をつけていたが、どうやら電子的な広範囲ジャミングまでかけられていたようで、そうこうしている間にディレイドたちはいずこへと消えていた。

そして、これはアイテアにとっても好機である。

「ディレイドに助けられたってのは癪だけど……私もトンずらさせてもらおうわ!」

言うが早いか、アイテアは文字通り煙に巻くとばかりにダメ押しでステルスを作動させ、最大速度でその場を後にした。

『ま、まてっ!』

今日何度目か知らない、テイクの制止を聞き流しながら。

「……社長、ずいぶん遅いお帰りで」

ティー・ポッドオフィスにて、ほうほうのていで帰ってきたアイテアに、クシエット。時刻は午後9時、定時はとつくにすぎている。「いろいろあったのよ……」

クシエットの皮肉すら耳に入らないほど、アイテアは疲労困憊、といった感じで安物のOAチェアに深く腰掛ける。「直帰にすればよかったわー」などとうわごとのように呟く姿に、クシエットも多少の憐憫の情を覚えたが、何だかんだ言ってアイテアに苦労ごとを押し付けられていた彼女は、それを取りあえずすみ追いやった。

「それで、今日の収穫はどうでしたか」

この様子ならさんさんたる結果だろうことは目に見えていたが、それでも部下である彼女は様式的にアイテアに尋ねる。

「最悪ね。儲けどころか、どう考えても赤字よ。あのバーも、たぶんもう使わせてもらえないかもね」

深いため息と一緒に、多分にイラつきを含んだ声でアイテアは吐き出す。自棄酒でも決め込みたい気分だった。

「変なやつに目は付けられるし、しつこい男に追いまわされるしで、もうさんざん。殴られるわ投げ飛ばされるわと、ほんともう最悪」
言ってるうちにだんだんイライラしてきたのか貧乏ゆすりを始める若い社長の姿に、クシエットは苦笑する。

「そーいえば、今日採用試験があったんだっけ。……あー、今日はもう何も考えたくないから、報告は明日でいいわ。仕事がキリのいいところで、あがっていいわよー」

「あら、そうです？じゃ、お言葉に甘えて……社長、戸締りはきちんとしておいてくださいねー」

さらに深く深く椅子に身を預けるアイテアにクシエットはそういうと、手早く帰り支度をしてオフィスを出て行った。

薄情モノめ、相談に乗ってくれてもいいじゃないかとアイテアは自分勝手に思ってみるが、ここの所仕事場に缶詰だった彼女に、こ

れ以上無理はさせたくないというのも本音であった。

「……そういえば、あの犬。なんだったのかしら」

アイテアはクシェットがいなくなった無人のオフィスで、ポツリと先刻一瞬だけ見えたあの不可解なヴィジョンと、今も残る強烈なデジャビュについて思いをめぐらすも、特に何も思い当たるところはなかった。

「はあ、今日はほんと、最低な一日だったわ……」

T
o
b
e
|
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第4話

荒野に、咆哮が轟く。

それは力強く、勇敢でありながら。脆弱で、悲しい咆哮。

誰のために剣を振るうのか、何のためにその斧で首を落とすのか、何を護る盾なのか、いかような信念を貫く槍なのか。

それらに答えることもなく、ただ敵を殺す。己が生きながらえるためだけに。

かつて信じたものを忘れ、かつて愛したものを失い、かつて手にした栄光を奪われ。やがてその荒涼たる野には勇猛な、しかし虚しい声が響くのみ。

先より力を持つものはその力に溺れ、傲慢となる。

後より力を得たものはそれを過信し、やがて妄信となる。

狂気と力、恐れ渦巻く只中、人の命を奪うことに、何の躊躇もありはしない。

頑強な鎧を纏った一団は虹色に煌く剣を振り、ためらいなく敵の首を刎ね、胴を断ち、臓を突く。

漆黒の鎧を纏った一団は一樣に手をかざし、不可思議な力で敵をねじ伏せ、捻じ切り、踏み砕く。

両陣から煌びやかな閃光が走る。見ようによっては美しくもあるそれを受けたものはその場に臥し、動かなくなった。

閃光を避けて、交わして、鎧の男達は剣を”敵”に突き立てる。赤いしぶきが鎧を汚した。

そして異変は起きた。

血の色をした空に何の前触れもなく、ざわりと暗雲が立ち込めた。そしてまるで俄雨の如く、それは来た。

天より舞い降りるそれは徐々に容を成し、地に足をつけるころ、

それはおぞましい異形の姿を顕していた。

異形は吼えた。

さんざんこの荒野に響いたように、それはやはり力強く、勇猛で虚しい叫び。

異形は大地を踏み鳴らし、しかし実体のない霞のように流麗に、すべるような動作で破壊を振り撒いた。

唾然呆然としていたやがて人々は剣を取り、やがて手をとりあい立ち向かった。

剣は毀れ、斧は砕け、盾は割れ、槍は折れ……

そして荒野には、悲しさだけが残った。

UNITY FORCE—HEXA 〈リヴェラルクラフト〉

—— Stage004 アカツキノツバサ ——

西暦2201年1月26日。本編開始より二年前、東京国連大学考古学学部超考古学研究室。

23世紀を迎える節目の年だと騒がれたのも、半月もたてばただの日常に戻る。世界中の人々は23世紀突入というイベントを一通り終えたあと、極々自然にそれを受け入れてきた。ソレは、今も昔も同じようなものだ。そしてその今と昔を考えるのが考古学という学問で、そのさらに深い部分、人智の及ばないほどの古代、ついでに言えばそんな超古代に存在したかもしれない超超先史文明、所謂オーバーテクノロジーとかを大真面目に調べているのが、この研究室である。

「教授、用事ってなんでしょうか」

そんな雑多な研究室のさらにごちゃごちゃした資料の山と化している所長室に、部屋の主である所長を訪ねて一人の青年がやってき

ていた。

「お、天羽君。やっと来たか」

待ちかねたとばかりに、資料の山に埋もれたようなデスクの向こうから、所長である坂木教授が青年を手招きした。

「さて、天羽寛人君。君を呼んだのは、他でもない」

教授は勿体付けるようにそう前置きする。

「そんな前置きはいりませんよ」

と、苦笑する寛人。

「なに、気分だよ。さて、青森の遺跡の件、動きがあったよ」

「……ほんとうですか？」

青森遺跡と聞いて、寛人は目を輝かせる。去年暮れに青森県内で農村の開発行為が行われていた際に、耕作放棄地となっていた田園地帯の地下から出土した”街”の遺跡である。すぐさま学者チームが鑑定を行い、学術的価値が高いとのことで開発は取りやめられ、現在地元大学の調査チームが発掘を進めていたところだったのだ。

その遺跡の発見は、考古学会にとってもない波紋を及ぼすことになった。放射能測定の結果、この遺跡が建造されたのがおよそ1000万年以上前。人類発生以前のものであるとされたからである。

しかも、出土した建築物は高度な石組みの技術をもってして作られていることが判明されており、また遺跡の最北端には全長20mにも及ぶ横倒しになった門扉が発見され、さらに物議をかもし。明らかな人工物であるし、類人猿の知能で作ることなど到底かなわなような高度な彫刻の施された門扉は、半ばオカルトの域に達していた。

少年向け漫画雑誌では早速これをモチーフとしたミステリー漫画が多数掲載されるようになり、近日中にはテレビドラマも放映される予定と、一大ムーブメントと化している。現に、発掘現場は観光客と見物人で終日ごった返しているという噂だ。

幼いころから考古学に興味を持ち、大学院を出てなおこの研究室で研究を続けている寛人にとっても、それはとてつもなく興味を惹

かれる代物である。

「近々国連の遺跡調査チームが編成されることになってね。ウチの大学にもお呼びがかかってるんだが。天羽君、きみ、やってみるかね？」

にやりと笑って教授。もはや答えはわかりきっているといった顔だ。もちろん、答えはひとつである。

「いきます！行かせてください、是非！」

それから一ヶ月と少したった3月1日、厳冬期をすぎたとはいえまだ日中氷点下の青森での発掘作業は、ドキュメンタリー番組の特番を組まれるほどには困難を極めた。

そんな苦労も、ようやく大詰めを迎える局面である。例の門扉を細かく裁断し、設備の整った研究室へ運ぶための作業が、とうとう昼から始まるからだ。

参加している学者、作業員、マスコミからいやおう無く高揚を感じ取れる中、寛人は今のうちに昼食をとっておこうと、発掘現場に併設された仮設事務所棟で支給の弁当を広げていた。

「カントセーんぱい！ココアもらってきましたよー」

そういつて缶入りのココアを渡してきたのは、寛人の後輩に当たる大学生、星野美代である。研究室にたびたび遊びに来ていた彼女も、伝を伝ってこの遺跡調査に連れてこられていた。

「ヒロトだよ」

何度言っても呼び方を改めない彼女に、多少げんなりして寛人。

最近では研究室の他のメンバーからもカントと呼ばれる始末である。

「いーじゃないですか。慣れたンだし」

とうの彼女は悪びれる様子も、改める素振りも見せず、屈託ない笑顔で言った。

「そういう、テキストなところがなけりゃ、普通に美人なのにな。単位、たりてんのか？」

「んー、まあ、なんとか」

どうせ、またギリギリなのだろう。星野は頭をかいて苦笑した。
「でも、この調査に随伴するだけで、単位くれるっておじさん……
教授が言っていましたよ」

「そいつは、なんというか贅沢な補習だな」

身内ということもあるのだろう、何かと教授に目をかけられている彼女を多少うらやましく思いつつ、寛人は缶ココアを煽った。

「……甘いなあ」

「あれ、先輩、苦いほうが好きでしたっけ？」

「ん？……あー、いや、なんでもない」

砂糖がたっぷり入った甘ったるいココアは、寒さを吹き飛ばすにはちょうどよかった。

――キーンコーン

と、昼の休憩の終了を知らせるところか気の抜けたチャイムが現場に響く。しかし、現場の活気は最高潮で、緊張の糸がぴいんと張り詰めていた。

「いよいよですね、教授」

「ああ、長生きした甲斐があったと思うよ。これは、記念すべき瞬間だ」

“門”周囲を囲む足場の全体を見渡せる位置にて、寛人ら国連大学の調査チームは、作業の進捗を見守っていた。

「そろそろ、鋸入れるみたいですね」

門は、20×10mと巨大である。流石にそのまま研究室に運ぶのは困難を極めるため、特殊な機械を使いなるべく損失の生じないように、1〜2m角のブロックに裁断しなくてはならない。非常に神経を使う仕事である。今回は、門を全部で100ほどの細かなパーツに裁断する。

「……ん？カント先輩、あれ、なんでしょう」

機動兵装にも用いられる超振動ブレードが門を切削する爆音が響

き渡る中で、寛人の横にいた星野が何かに気づいたかのように指をさす。ちょうど、門扉のとじ目あたりだ。

「なにも……ないと思うんだが」

言われて寛人もその指差すほうを凝視してみるが、おかしいものは何もない。巨大な門扉があるだけだ。

「なんか、青い湯気みたいのがでてませんか？」

それでも、星野はやっぱり何か気になるようで、しきりに寛人に訴えかける。寛人も、またそれを凝視してみるが、やはり特に気になることはない。

「石の粉末が飛んでるんじゃないのか？」

「うーん、そんなんじゃないんですけど……」

作業現場は、切削の際に出た粉末が微量だが舞っていた。それではないかと寛人は聞くが、やはりどうも腑に落ちないようだ。

「なんか、だんだん濃くなって行ってる気がするんですよ」

星野は、目を凝らすようにしてまだ何事か言っていたが、いい加減うんざりしてきた寛人はそれを聞き流すことにした。

作業は、滞りなく進んでいく。ようやく一個目のパーツが、切り離されようとしたそのとき、それは起こった。

ズズズ、と重い地鳴りが辺りに響き渡り、激しい振動が襲い掛かる。

「地震か!？」

「せ、先輩! あれ! 門が!」

「ん な っ ……! ?」

切羽詰った声で、星野が門を指差した。寛人は、今度こそ絶句した。

「門が……開いてく!？」

(……ここは?)

気がつく、寛人は白銀の光の中にいた。ゆったりとした浮遊感が、彼の身体を包み込んでいる気がした。

（俺は……確か、遺跡の発掘現場で）

どこかおぼろげな記憶を、必至に手繰り寄せる。時間の感覚が、ひどく希薄だった。

（そうだ、たしか門が開いて、光があふれて……）

急速に、意識が明確になる。門からあふれた光に飲み込まれ、そのあと自分はどうなったのか。しかし、それだけはどうしても思い出せなかった。気を失ったのかもしれないと、彼は考察する。

『ようやくお目覚めのようね？』

ふと、寛人に聞きなれた声がかけられた。星野の声だ。しかし口調も違うし、何より耳からではなく頭に直接入り込むようにして聞こえた声に、言いようのない違和感を覚える。

『星野……！？』

寛人は声のしたほうに、感覚で意識を向ける。寛人自身が放った声も、やはり先ほどと同じように頭に響くだけだ。

そこにいた女性は、確かに彼の知る星野美代に似ていた。似ていたが、星野美代ではない。彼女は黒髪を肩口で切りそろえていたが、目の前の女性は腰までであろうかという透き通った白い髪をしていたし、言葉にしづらいが、どこか荘厳な雰囲気漂わせていた。普段の彼女からは、感じられることのないものだ。

『星野、じゃないな。あんた、一体？』

『君の知る、星野美代その人。……と言ったら？』

目の前の女性は、そう言ってくすりと笑う。

『……俺の知ってる星野は、そんな性格悪くないと思う』

『そう』

こんな非常事態（おもに寛人にとって）に冗談とも真実とも取れない、おそらく冗談を返してくる彼女に、寛人は多少の苛立ちを含んだ口調で言った。女性は、またくすりと笑う。

『そうね、確かに私は星野美代ではないわ。でも、この身体は星野美代のもの』

『身体？ 一体なんのこった』

トン、と己の胸を指差して女性は言う。寛人は、ワケがわからないといった顔をしている。

『私はただ、星の神。夜明けに太陽の到来を告げる、暁の星を司る者。そのよりしろとして、この子の身体を借りている』

『……カミサマとはまた、大きく出たもんだ。ガキのままごとには、付き合ってられないぞ?』

寛人は、半信半疑だ。というより、全疑といってもいい。なんとなくか、あまりにも胡散臭い。

『ガキのままごととは、心外ね。この状態が、君にはそんな安っぽい芝居に見える、カント・アモウ』

確かにこの状態、冗談にしては少々度がすぎる。不思議には思っていた。しかし

『……あんたもか。なんでアモウは読めて、ヒロトをカントと読み間違えるんだ』

寛人にしてみれば、名前を間違えられるほうが気になったようだ。外見が星野美代に酷似しているというのもあるのかもしれない。

『カントは大空をさす言葉。そちらのほうが響きがいいわ』

『……あんたも、改める気はないってか』

星の神を名乗った女性は、飄々と言つてのける。寛人は、もう返す言葉もないという風にはき捨てた。

『で、ここはいつたいどこなんだ。なんで星野の身体を使ってる。あそこで何が起こった?』

名前の件がひと段落ついたところで、ようやく寛人は本題に入った。いささか矢継ぎ早に、とりあえずの最優先課題を並べ立てる。『そうだった、あまり悠長におしゃべりしている時間もなかったんだ。長い間会話をしていないと、どうにも話が長くなってしまいうわね』

星野はそういつてポンと手を打ち、ひとしきり苦笑すると語り始めた。

『ここは、星楼殿』

星野がそう口にした瞬間、辺りの風景が一変した。白い光にあふれていた空間は明緑色の輝きを放つ。

『暁星の化身を使役し、常闇の従者の悉くを屠る為の玉座。真に神聖なる光の間』

『……そいつは、すごいな』

『茶化すな』

『動揺して、言葉も出ないんだよ』

星野が言葉をつむぐたびに、寛人の頭にガンガンと情報が流れ込む。そのおおよそが寛人には理解できないような難解なものだったが、どうやら目の前の女性が真正銘のホンモノだということは、理解できた。

『俺には詩のセンスなんてないから正直さっぱりだが、なんでそんな大層なところに俺がいるんだ？』

『時間もない。一気に説明してしまおう』

そう星野がいうと、不意に寛人の視界が光の空間、星労殿から彼がよく見慣れたものへ移り変わる。遺跡の映像だと気づくのに、1秒もかからなかった。

しかし上空から俯瞰するように映し出されたそれは、彼の知る遺跡のものとは遠くかけ離れた光景であった。

『何の特撮だよ』

『残念ながら、これが”外”の現状。君と星野美代は、死んだわ』
衝撃的すぎる事実である。寛人の目には、無残にも破壊された発掘現場の仮設建築物と、必至に逃げ惑う人々。そして開ききった”

門扉”と、それから現れた怪物としか形容しがたい――身長50mはあるのかという巨軀に2本の足と4本の腕を持った首のない不思議なモノが、現在進行形で破壊を振りまく姿があった。

『冗談きついな……』

『冗談じゃないもの』

再び星楼殿に意識が戻る。寛人の顔は、脂汗でじっとりしていた。『じゃあ、なんで俺は今こうやって、あんたと話ができてる？死ん

だんじゃなかったのか？』

『それが本題。君は確かに死んだ。けれど、カガセは君を装者として選んだ。死に行く瞬間にはじけた星野美代の感情が、カガセと、私の封印をといた。私は星野美代をよりしろとすることでこの世界に表れる理を得、君はカガセに選ばれることでこの世界にとどまる理を得た』

寛人の目を覗き込むように、星野は言う。

『チンプンカンプンだ。なんだ、カガセってのは』

『暁星の化身。光輝を背負い、闇を薙ぐ。世界を開く剣を携えた光の巨人。それが、カガセ』

『まるで正義のヒーローだな』

『似たようなものね』

星野の語る存在は、まるで寛人が幼い頃に夢中になった、テレビの中のヒーローそのままだった。星野は続ける。

『さて、今君は岐路に立たされている。カガセの装者としてこの星のために戦うか、それを拒み、この星とともに消えるか。道は二つに一つ。どちらを選ぶ？』

『ヘヴィーな二択だな』

星野はずいど手を突き出し、指を立てた。どちらをとるのかと。

『……俺がやらなきゃ、駄目なのか？その、カガセってのは』

『カガセが装者を選ぶのは、その一生に対して一度のみ。あなたが拒めば、カガセはこのまま、ただの土くれとしてきえゆくでしょう。もちろん、私も』

そっと目を伏せる。

『常闇の従者だけならば、カガセなしでも戦えるでしょう。けれど、その根源たる常闇の主神は、カガセでなければ倒せない。カガセが目覚めなければ、この星はじわじわと崩されて、やがて塵も残さず消滅する』

星野の言葉に、寛人は押し黙って考える。

『それを選ぶ権利が、カガセに選ばれた君にはある。見届けるもの

である私に、その権利はない。先ほども言ったように、もう時間はない』

寛人はたっぷり数秒考えて、閉じていた目を見開いた。

『やるよ。そのカガセってやつを』

寛人が出した答えは、イエスだった。

『人死にを黙ってみてるようなのは性にあわねー。それになにより、正義のヒーローってのはこの歳になっても懂れるもんさ』

『貴方はこの戦いで命を落とす事さえあるかもしれない。それでも貴方は戦うか？』

『折角決めたんだ。そういう揺さぶり、やめてくれよ』

寛人は、そういうつつも心に高揚を感じていた。これがカガセの力によるものなのか己のマインドによるもののかはわからなかったが、なぜか、今ならすべてがうまく行くような気がしていた。

星野は大きくうなずき、高らかに声を上げた。

『“契約”は成った。我は星神、朝の到来を告げる暁の星を掌るものなり。そはカガセ、闇を切り裂き夜明けを呼び込む御先の＜化身＞！ 顕現せよ、光輝を背負うアカツキノツバサ！』

それに最初に気づいたのは、足場の下敷きになっていた坂木教授だった。

最初の地鳴りと共に崩落した足場で地面に縫い付けられていた彼は、身動きひとつ取れないながらも奇跡的に大きな怪我をせずになでいた。しかし、それも時間の問題だろうと半ばあきらめてもいた。目の前をビルほどもある怪物が闊歩していれば、そんな絶望にかられても仕方ないところだろう。

（天羽君と美代……逃げ切れていればいいが）

いつの間にかはぐれていた彼らにこうやって思いをめぐらすのも、現実逃避の一種かもしれない。なんてことを考えているときに、彼は見た。

最初は、光の粒子だった。

エメラルドグリーンの光が、門の上に急速に集まっていっている。また怪物が現れるのかと教授が思っただけで、それは徐々に人のような容を成してゆく。やがて十分に光が凝縮したところで、それは一際強い光を放った。

あまりにも強い光に教授が思わず目を瞑る。それは何秒であつたか、次に目を開いた先にあつたのは、白亜の巨人であつた。

白銀のすらりとした体軀は先ほどの怪物と同じくらいに大きい。要所要所が輝く青で彩られ、いたるところに金のラインが走るその巨人は、怪物が与える絶望感とはまったく真逆の深い安心感を坂木に与えたのだった。

その巨人は現れるなりに坂木のほうへ頭を向けた。その深緑の瞳と、坂木の目線が交錯する。

巨人はゆっくりと足を踏み出す。ずしんと大地が揺れた。そのまま巨人は坂木の目の前で歩み寄ると、その身体を拘束していた足場の残骸をひよいと持ち上げ、遠くに放る。

「何がなんだかわからないが、たすかった！ありがとう！」

坂木はそういつて立ち上がって巨人を見上げた。巨人はそれにしつかりうなずくと、早く逃げろとでも言うように首で促す。坂木はその意思を汲み取ってか、ところどころ痛む身体を押して駆け出した。

それを見届けて、巨人――カガセは、いまだ暴れまわる怪物のほうへ身体を向けなおした。

寛人が最初に感じたのは、なんともいえない一体感だった。カガセの目が寛人の目になり、カガセの腕が寛人の腕になり、カガセの足は寛人の足となる感覚だ。

『……不思議な感覚だな』

高層ビルの屋上から見下ろすような視界に少し戸惑いを感じる。
『慣れるしかない。出来れば、後数秒でね』

星野の姿が、立体映像のように目の前に現れる。身体が数十倍に引き伸ばされた寛人にとって、見ようによってはふわふわと浮かぶ妖精のように見えなくもない。

『基本的に、普通に身体を動かせば良い。拳を握れ、膝を曲げろ……そう、その感覚よ』

星野に言われるまま、拳を握り締め、軽く屈伸する。なるほど、確かに普通に身体を動かす感覚で、白銀の鎧に包まれた身体が動く。『こいつはいいや』

寛人はまず、周囲を見渡そうと首を回す。人であったときは比べ物にならないほど、感覚が研ぎ澄まされているのがわかった。その鋭敏な感覚は、瓦礫の下敷きになっている生存者を察知する。

『教授……！よかった、生きてる』

数人の生存者の中に坂木の姿を見つけ、安堵する。どうやら、彼は助かったようだ。しかし、このままあの化物と戦えば、身動き取れない彼らを巻き込む可能性が高い。

『星野、生存者を救出する。あいつはひとまず後回しだ。いいか？』

『それは、君が決めることだよ、カント』

星野は、特に否定も肯定もしなかった。決定権は寛人にあるらしい。寛人はカガセを生存者の近くまで歩み寄らせると、瓦礫をどかしてやる。

数十秒で、その作業は終わった。寛人は坂木たちが逃げるのを待って、いまだ暴れまわる化物に身体を向ける。

『さて、と。どうやって戦えば良い？』

動かすことには慣れたものの、あの化物を相手にどう戦えばいいものか。寛人は星野に問う。

『それも、カント次第。武術の心得はある？』

『……ないな』

思い返してみれば、心得と呼べるほどの経験はない。せいぜい高校時代に体育でやった剣道と、自己流の喧嘩術くらいだ。

『そう。なら、とにかく掴みかかるといい。殴るなり、蹴るなり、

カントが一番効率的だと思うやり方で戦えばいいわ』

『アバウト極まりないアドバイスはどうも。じゃあ、やるかつ!』

寛人——カガセはそういつてパキポキと指の関節を鳴らすと、構える。

怪物のほうもようやくカガセに気づいたらしく、振り返って威嚇とも取れる構えを取った。二つの巨体が正対する。

『うおおオ!』

短い沈黙を破って、カガセが大地を蹴る。凄まじい瞬発力は、50m強の身体を一瞬で怪物の懷に滑り込ませた。

怪物は俊敏にガードの体勢をとるが、遅い。怪物が組もうとした4本の腕のあいだをすり抜けて、カガセの強烈なアッパーカットが決まる。とはいえあごがないから、ボディブローのようにも見えろが。

たまらず怪物がよろけたところに、カガセはバックステップで若干距離をとって右のミドルキックを叩き込む。が、今度こそ怪物は右側の腕2本をへし折られるもガードに成功した。同時に怪物の胴体に埋没したかのような口に光が集まる。ほぼ直感で危険を感じ、バック転で距離をとるカガセ。今しがたカガセのいた場所に光線が叩き込まれ、火柱が上がる。

肝を冷やしつつ、そのまま連続したバック転で一定の間合いを取るカガセ。

『光線まで使うのかよ……! 星野、なんかこっちにもそういった技はないのか!?』

『そうね……では、アレを使ってみましょう。カント、右の掌に力の奔流を、左の掌にそれを研ぎ澄ますようにイメージして』

寛人は言われるままに、おおよそアバウトながらも両掌にそれぞれをイメージする。

『右手の力を左手で研ぎ澄まし、弾き飛ばしなさい』

『よくわからんが、こうか!』

カガセが腰だめに構えた右手に、青白い燐光が集まる。チカチカ

と光るそれに左手をあてがいうと、一瞬の溜めの後に手刀を繰り出した。横に薙ぎ払うように繰り出された手刀が空を切ると同時に、右手に集まった爆発的なエネルギーが左手に導かれるように青白い刃を形成し、目にも留まらぬ速さで怪物に向け殺到した。

『これが、カガセ100の技がひとつ。スライサーエッジ』

星野が技の名前を口にしたのと同時に、それは怪物の左腕を名前にたがわぬ鋭い切れ味を持って切りとばしていた。

――GOA A A A A！

怪物が苦悶に喘ぐ声が響く。切断された左腕からは、青緑色をした血のような液体がこぼれていた。ヒュウっと、寛人が口笛を鳴らす。

『すごい切れ味だな。それにずいぶんカッコいい技名だ』

『言葉は時代と共に変化するからね。これはカントの意識の一部から付けられた名前だ』

『意識の一部、ねえ』

どういう仕組みなのかはよくわからないが、感慨深く呟く。

『ぼうつとしている暇はないよ、カント。アレは核を潰さない限り、永遠に再生する』

星野はそういつてあごをしゃくる。視線を向けると、先ほどの血のような液体が凝結して新しい左腕を形成しはじめているではないか。

『厄介だな』

『ええ。でも、だいぶ弱っている。最初の殴打……アレが効いているのかもしれないね』

星野はそういつているが、寛人にはまだ元気いっぱいに見えて仕方ない。現にすでに左腕の再生を終え、腰を落としてダッシュの態勢をとろうとしていた。こちらに突っ込んでくるつもりなのだろう。

『カント、身体を中心に力を集中。向かってくるなら好都合、一撃で沈めなさい』

言われたように寛人はカガセの中心、へその位置にイメージを集

中させる。するとどうだ、目の前にエメラルドグリーン粒子が集まり、何かを形成し始めている。それは、カガセが出現したときと同じ光だ。

『受け取りなさい、カント。之は遍く光を天上よりもたらし、陽を遮る暗雲を断ち切る霊剣……』

急速に収束する光は、細長い、剣のシルエットを作り出す。それと同時に、怪物が唸りをあげて駆け出した。

『抜き放て、クモナギノオオタチ雲薙大大霊！』

がっしと、カガセは実体化した剣をつかむ。柄に手をかけ、一気に引き抜く。

刀身が鞘より抜き放たれると同時に、まばゆい閃光と強烈な霊力の奔流が迸った。空間が、びりびりと振動するほどの力が解き放たれる。

『おおお！』

寛人の口から、おぼえず気合が声となって零れる。怪物はさらに速度を上げ、カガセに肉薄する。

刹那。

巨体と巨体が交錯するそのとき、カガセは鞘を大きく上空に放り投げ踏み込むと、両の手をして剣を逆袈裟に振り上げる。

一瞬の静寂。しかしそれは上空から舞い戻った鞘をカガセが手に取ることで終わりを告げ、飛沫を払うような動作の後に刀身が納められると、怪物はその瞬間大爆発を起こした。

時は流れ、西暦2203年。あの事件から2年の月日がすぎた。

青森に現れたあの怪物は、それを皮切りに世界各地に出現。膠着状態に陥っていたオーストラリアは怪物たちに占領され、それ以外の地域でも対応にあたった現地国連軍に相当の被害が出ていた。

国連は青森より現れた怪物たちを「夷」と総称。早急に対“夷”専門調査委員会を組織し、その実態調査及び対抗策の模索に取り

掛かった。

さて、その対”夷”専門調査委員会、通称「マレビト」の本部がある青森の地に、一人の青年が訪れていた。

「二年ぶりだな……」

4月。暦の上では春であるが、いまだどこか冬の寒さが残る。青年は懷からタバコを取り出し火をつけ、肺いっぱい吸い込んだ。タールがガツンと効いて、頭がクラクラしてくる。ジャングルなどに分け入る際、有害生物対策に使っていたのが、この二年ですっかり癖になってしまっていた。

「あまり奨められた行為ではないな、カント」

背後から聞こえてきた声に、青年、天羽寛人は辟易とした表情で煙草を踏み潰した。

「まだ、星野の意識は回復しないのか？」

振り返った先にいたのは、星野美代であって、星野美代ではない存在であった。白髪ロングは星楼殿の中限定らしく、現在は黒髪のショートだ。

「封印をといたときに、よほど力を使ったのだろうか。まだ、兆しは見えない」

「……そうかい」

少しため息をつく寛人。あのカガセになった日から今までずっと、星野美代本人の意識は戻らないままだった。代わりに、四六時中この自称・神に付きまとわれて、いい加減うんざりしていたりする。

「だがカント。意識が戻ったところで、この娘は戸籍上死んだことになっているのだろうか？」

「……まあ、なんとかなるだろ」

あの事件、青森遺跡夷事件は発掘現場をおとずれていたおよそ120人が死傷する事件となった。その行方不明者の中に、星野美代はカウントされている。

「そういった話も含めて、今日はわざわざアララテ山からこんなところまで来たんだからな」

そういつて、寛人は目の前にそびえるビルを見上げた。
「なんにせよ、これからだな……」

T
o
|
b
e
|
c
o
n
t
i
n
u
e
d
|

第5話

朝。教室は、いつものように和やかな喧騒に包まれている。

仲のいいもの同士が寄り合い、グループを作って種々雑多なお喋りに花を咲かせるが、今日ばかりは示し合わせたようにその話題は同じだった。

「転校生が来るらしい」。日々刺激に飢えているような学生にとって、それはめったにないイベントだ。特に高校になってからではなおさらで、すでにさまざまな憶測が飛び交っている。

——ブツン

スピーカーからアンプの接続音がこぼれ、それに次ぐように軽妙な音楽と、少女の声が流れる。

「えーと、フウちゃんのお天気予報の時間になりました。まだ今日の日誌を取りに来ていない日直の方は急いで職員室に向かってくださいね——」

放送部員である風靡流凜の明るく可愛らしげな声が、朝の放送をかねた毎朝恒例となりつつある天気予報をはじめが、しかし物珍しさのなくなった今となっては聞いているものはまばらだ。教室内は転校生の話題で持ちきりで、やれ「かっこいい人がいい」だの「可愛い子がいい」だのと、フウの放送は耳に入っていない。

「——今日の天気は、南西から心地よい風が吹いているので一日中すごしやすいお天気になりそうです。あ、でも4時過ぎから雨が降りそうなので、雨具の用意をしておいたほうがいいかもしれません。皆さん、今日も一日、がんばりましょう」

当の本人のフウは、あらかじめ予定していた放送を終えそう締めくくると、マイクの電源を落としてから大きく伸びをした。手馴れた手順で放送機材のタイマーをセットし、学校指定のクラシックをかける。

「んっ」

縮こまった背中を十分伸ばしてゆっくり椅子から立ち上がったフウは、施錠を確認すると放送室を後にした。

教室に近づくにつれ、フウの耳にも楽しげな雑談が聞こえてくる。その輪に加わりたいとは毎日思うものの、それでは朝の放送に差し支える。たとえ少数でも放送を聴いてくれている人があるならと、そのつどフウは自分の思いを押し殺していた。しかしそれでも、放送が終わって教室に向かうつど、そういう気持ちはわいてくる。

静かに教室の扉を開けると、無言で自分の席へ向かう。雑談に夢中になっているクラスメイトが挨拶を返してくれることがないことには、たいぶ前から気づいている。

「……」

あくまで静かに机に鞆を置くと、そのままそろりそろりと仲のいい友達の元へ向かった。

「おはようっ」

「うわひゃっ!? な、なに!?!」

「おはよ、フウ」

気配を消して近づいていたフウに、背後から抱きつかれた丸眼鏡が可愛い少女――高郷千華が慌てふためいてるのを眺めながら、その向かいに座っていた下郷真樹が、笑いを必死にこらえて挨拶を返してきた。「ぐっじょぶ」と親指を突き上げながら。

「あ、フウちゃんかあ……もう、おどかさないでよぉ」

あまりにもびっくりしたためか、目じりにうっすら涙を浮かべて抗議する千華に、「ごめんね?」と笑顔を浮かべながら説得力にかける謝罪をもって返したフウは、ようやく定位置に腰を下ろした。

「さて、これでやっと転校生の話ができるわ」

やっと落ち着いたのか、冷静さを取り戻した真樹が件の転校生の話へ誘導する。どうやら、二人はフウが来るのを待っていたらしく、毎朝放送を欠かさないフウに対するささやかな気遣いとねぎらいの気持ちだが、フウには感じられた。

「ズバリ聞こう。フウ、千華、貴女達はカッコいい派か可愛い派か、さあどっち？」

「え？えーと、私はカッコいいほうがいいかな」

「わ、私はかわいいほうが……その、いいかなあ」

どこかデジャヴを感じる会話に苦笑しつつ答えるフウと、尻すばみになりつつも自分の好みを伝える千華。そんな彼女らの答えに、満足したように真樹が口を開いた。

「見事に分かれたか。だがしかし、君達はひとつ失念していないかね？そう、件の転校生、その性別はわからないということをし！」

どこか芝居がかった、大仰な動作でそういう真樹。流石演劇部なだけあってか、その喋りが妙にさまになっていてなぜか感心するフウと千華。

「……あー、その、リアクションがほしいのだけれど」

どこかぽかんとした両名の視線を受けて、真樹は顔を赤くして「これでは道化では無いか」と呟く。やはりどこか芝居がかったそのつぶやきは、幸か不幸かフウたちには聞こえなかったようだ。

「え、ああ。ごめんごめん、つい見とれちゃった」

そう謝るフウの横で、千華は一心不乱にメモ帳になにやら書き込んでいる。文芸部と放送部を掛け持ちする彼女の夢は小説家である。日々の生活はそれだけでネタの宝庫なのだ。特に、このにぎやかな友達が横にいれば。

「見とれてくれるのはありがたいけど、会話を続けたいのも本音かな」

少し照れたような口調で、多少強引に話を戻そうとする真樹。

「真樹は、どっち派なの？」

「ぼくは、演劇部に入ってくればそれはそれで」

そう真樹が言ったところでちょうど予鈴が鳴り響く。まるで「さっさと席に着け」といわんばかりの聞きなれた音色に、名残惜しげながらも生徒たちは自分の席に戻っていた。フウもそれにたがわず、しぶしぶといった体で自分の席にもどる。それとほとんど同じタイ

ミングで、教室のドアが開いた。

「うーい、おはよう」

くたびれた中年という言葉がぴったり当てはまるような……とはいえ、まだ30代前半らしい担任教師が、教卓に出席簿を広げる。いつもならばドアを閉めるものだが、今日はそのままだ。その意味する事柄に、生徒たちの期待は一気に高まる。

「ホームルームを始める前に、今日からお前らと一緒に机を並べることになる転校生を紹介する。はいってきいていいぞ」

教師の言葉に答えるように、「はい」と廊下から短く簡潔な返事が返ってくる。声からして、転校生は男のようだ。少しばかり氣勢をそがれた男子勢は置いておいて、件の転校生がついに教室に足を踏み入れる。

「あっ！」

端正な顔立ちに、すらりとした長身。それでいて痩せているわけでもなく、全身を無駄のない筋肉が包んでいる。少し鋭すぎる目を除けば、それはどこから見ても「カッコいい美少年」に他ならなかった。自然と女子連中のテンションは高まる。

入室した少年を見るなり、真っ先に声を上げたのはフウだった。その少年の容姿、忘れようもない。昨晚のことがフウの脳裏にフラッシュバックする。

迷子の少女、エルディオルとの出会い。まだ幼い少年のような男が自分に銃口を向けていて、それに立ち向かうように現れたシオ……そう、シオ。魔法をこともなげに使う女性、ウィエルと、ミルナーヴァの幻想機……

それらが断片的に脳内に現れては、消えていく。

（何でここにいるの？）

そんなフラッシュバックを押しのけて、今度はあらゆる疑問が頭を支配する。

「ん、何だ風靡の知り合いか。ちょうどいい、学校の案内とか頼めるか？」

「え、あ、はい」

教師の言葉にほとんど脊髄反射でそう答えてから、やっとわれに返ったフウはその発言を後悔した。”知り合い”ということを否定できなかったことで、背後からの視線が痛い。

「諫驚驚だ。シオと呼んでくれ。趣味は格闘技観賞と、ギター」

彼の無難に過ぎる簡潔な自己紹介が進む中、フウは自分が何かとんでもないことに巻き込まれているのではないかという感覚に陥った。背中がぞわりと逆立つのを感じる。

単なる夢だ、単なる妄想だ。一晩明けて今日の朝、そう思っていたのに。思おうと勤めていたのに、あの時聞いた声と同じ声の主が今、自分の目の前で自己紹介をしている。

——あの夜のことは、やっぱり夢じゃなかったのかな。

『……嫉妬の匂いがする』

低く、うなるような声が思考に割り込んでくる。レイピルのそれだと理解するのに、さほどの時間はかからなかった。ともすればやはり、この声も現実なのだろう。

声は、警戒心をあらわにしていた。周囲から突き刺さる視線は、フウですら気づくほどだ。なんとなく、予想はつく。

抜け駆けは、いけないことだ。少なくとも、この女子の社会で生きていくならば。

シオは、どう鼻屑目に見てもカッコいい分類に入る。それでいて転校生という特殊な立場なのだ。クラスの女子の誰もが、彼と懇意になりたいと思っていることに違いないだろう。

だというのは、私は一步優位に立っている。フウは思う。顔見知りというのは、まったくの初見から比べれば、それだけでアドバンテージになりうる要素だ。嫉妬されるのも、無理はない。そう自分に言い聞かせる。

「よろしく頼む」

フウの後ろの席をあてがわれたシオは、席に着くなりそう声をかけてきた。隣の女子には挨拶のひとつもなく、だ。

「こちらこそ。教科書は隣の席の松田さんに見せて貰ってね。学校は休み時間に案内するから」

「ああ」

なるべく感情をはさまない、あくまで事務的な口調でこちら側の用件を伝える。他の女子への風当たりを少なくするためではあるが、少しばかり冷たすぎただろうかとも思う。無視してしまうことも考えたが、この条件ではマイナスにしか作用しないだろう。

当のシオは短くそう答えると、やっと両隣に挨拶を始めた。それも、あくまで事務的なものだったが。

ため息をつきたい気持ちを抑えて1限目の準備をすべく正面に向き直ったフウは、1限が体育だったことを思い出して盛大なため息をついた。

「はっ、はっ……」

五月晴れのすがすがしい空を仰ぎながら、フウはトラックを駆ける。心地のよい春の風が併走してくれるような陽気に、フウの足取りは軽い。

「……うあ!？」

姿のない優しい空気意識を向けていたフウは、突然進路上に突き出された障害物に対処しきれず、右足をとられてしまう。その障害物が他の女子の足、悪質な嫌がらせ行為であると気づくよりも先にフウの意識は眼前に迫る地面に向けられていた。突然の出来事に脳はまるで指示を出せず、その脳裏に浮かぶのは「転んだら痛いだろうな」程度の漠然とした感情だけだった。

そして数瞬後にわが身に襲い来るであろう衝撃に備えてか、ギュッと目を結んだフウだったが、彼女の予想に反して一向にそれはやっつてこなかった。代わりに伝わってきたのは、ギュウッと胸が圧迫される妙な感覚だった。

「大丈夫か、風靡」

聞き覚えのある声にうつすらと開けたフウの目に最初に飛び込んできたのは、自分の胸を鷲掴みにする男性と思しき手。そのままゆっくりと首を回すと、そこには件の転校生、シオの顔があった。ちなみに、男子の体育は体育館で行われているはずであったが、彼はいつの間にかそこにいた。

危ういバランスで立っているフウをしっかりと立たせるためにぐっと腕に力をこめるシオだったが、それは必然的にフウの胸をさらに圧迫することとなり、結果、フウが最初に抱いた感情は嫌悪であった。

「やっ……」

反射的にシオの手を払いのけてしまったフウだったが、自分の体勢を考えればこれは失敗だっただろう。前につんのめる形でとまっていた体は、そのまま重力に引かれて地面に倒れこんだ。グラウンドの粗砂が彼女の柔肌を削る。

「いたっ……！」

膝小僧がすりむけ、血がにじんでいた。じわりと、遅れて痛みがフウを襲う。

「すまない……」

歯切れ悪くシオは言うど、倒れこんだフウを抱き上げる。俗に言うお姫様抱っこというやつだ。

「え、あわわわっ……お、降ろして、恥ずかしいよ」

「……出血がある。足を怪我しているのに歩かせるわけにはいいかない」

足の痛みもどこかへ吹っ飛ぶほどの羞恥心がフウを襲うが、シオは特になんとも思っていないのだろうか、冷静にそう切り捨てる。

「いや、そうじゃなくて皆見てるから」

「仲間を心配しているのだろう。いい仲間を持ったな」

頑なにフウは抗議するが、返ってきたのは頓珍漢にほどがある意見だけだった。

「え、あ、う、うん……」

当のフウは苦笑するしかない。しかし、それは傍から見れば「お姫様抱っこをされて喜んでいる」図に見えてしまう。足をかけた女子は、さも面白くないような目で睨み付けていたし、女子連中は少なからず面白くなさそうな表情を浮かべていた。

そんな視線には目もくれず、シオはフウを地面に下ろすことなくヒョイと背におぶると、体育教師に短く告げて保健室へと軽やかに歩き出した。

ポカンとしていたその場の全員が、なぜ彼がここにいるのかという疑問にぶち当たったのは、それからしばらくしてからだった。

「あ、そこを右。で次の曲がり角を右ね」

フウは、方向音痴である。テンパっている今ならなおさらで、彼女の中の校内地図はめちゃくちゃになっていた。

「ここを左に曲がって300メートル」

めちゃくちゃである。300メートルも進めば、学校の敷地をゆうに飛び出している。

「……了解」

自分の暗記した校内図とフウの示す道順に違いがあることを感じていたシオは、それでもフウの指示に従っていたが、ちょうど廊下の角を曲がろうとしたとき、背後から呼び止められた。

「おい、お前たち何しとるんだ」

シオはそつと音も立てず、声の主である教師のほうへ向き直る。今は授業中だから、こんなところをぶらついていれば教師が声をかけてくるのも当たり前というものか。

「すいません。彼女が足を怪我したので保健室へ向かおうとしていたのですが……」

「……あー、もしかして転校生か。なら仕方ないか」

まるで明後日の方向へ向かおうとしているシオをとがめるように言いかける教師だったが、彼が転校生だということに思い当たった

のだろう。それ以上の追求をやめると、保健室への道を軽く説明した後、教師は「お大事に」と言い残して去っていった。

「ええ。ありがとうございます」

教師の背中にそう謝辞を述べると、シオは自分の知る最短ルートで保健室へ向かったのだった。

結局フウの怪我も軽い擦り傷で、痕が残ることもないという。一限の体育は見学したが、後は特に問題もなく、昼休みにいたる。

『お昼の放送です。今日は世界初の鉄道がイギリスで開通した記念すべき日であると同時に、世界で始めて鉄道事故が起こった皮肉な日です――』

昼休みが、いちばん教室がにぎわうひとときであるのは間違いないだろう。そんなお昼の放送をBGMに、仲のいいもの同士が集まり、与太話に花を咲かせるには一番の時間である。

そんな中で一際異彩を放っているのが、教室の一角を占めるほどに膨れ上がった女子たちだ。中心にいるのは件の転校生、シオであることは言うまでもない。

ほぼクラス中の女子が、シオのもとに集まっていた。なかには、敵対関係にあるグループだっている。

「ねえ、諫君」

「シオでいい」

キヤーと、巻き上がる黄色い歓声。

「私、島崎絵里。よろしくね」

シオを取り囲む一団の中で、ひとときわ派手な格好をした女子が笑いかける。クラスで一番の勢力を誇る派閥の、ボス格の女子だ。一限でフウを転ばせたのも、彼女の取り巻きである。

「……今朝クラスメイトは全員名簿で確認した。知っている」

シオは困ったような表情で島崎の顔を見るが、すぐに興味を失ったかのように弁当に視線を戻し、そっけなく答える。

「ねえねえ、シオ君でどんな料理が好きなの？」

「あ、それ私も聞きたーい」

別の女子からの質問。シオはやはり困ったような顔で箸をおくと、
「好き嫌いはない」と短く答えた。

「可愛いお弁当よね。シオ君のお母さんって、料理上手なんだ」

シオの今日の弁当は、卵焼きにタコさんウィンナー、ポテトサラダにデザートのりんごうさぎ。それと丸いおにぎりという、定番といえど定番過ぎるものだ。

「母はいない。これを作ったのは、紫藤れ……先生だ」

シオは複雑な表情で言った。どこか言いようのない苛立ちを、女子以外の何かに向けている。

「え、紫藤って、担任の紫藤先生のこと？」

「そうだ」

「シオ君、紫藤先生と住んでるの？」

「似たようなものだ」

シオの返答は、短く簡潔だ。それだけ、周りの女子連中に対する興味を持っていなかった。

「……風靡は、放送室か？」

それから、五分後。女子たちの質問攻めがいい加減煩わしく感じてきていたシオは、空になった弁当箱をそそくさとたたみ、席を立った。道を空ける女子たち。

「風靡さんは、止めておいたほうがいいと思うわ。……だって彼女、”魔女”ですもの」

一方その頃、放送室。

「んー、放送劇ねえ」

昼休みの放送といえど、常にフウがDJをしているわけではない。大半はクラシックや、生徒からリクエストのあった楽曲を流しているので、ありていに言って放送中は暇であった。

機材に囲まれ、気持ち程度に置かれた長机には、現在4人の男女

が顔をつき合わせていた。

「は、はいっ！この前の会議で、先生がおっしゃっていた新しい企画にどうかと思うんですけど！」

そう真剣な表情で、高郷は企画書を読む顧問、紫藤に訴えかける。両隣に座るフウト、演劇部代表の下郷も、やはり真剣な顔で親友を見守る。

「そうだな……面白そうでは、あるかな」

紫藤は、どうやらこの企画に賛成をしてくれたようで、高郷はほっと息をなでおろす。

「まあ、これは放送部だけじゃどうにもならんし、演劇部の榎本先生とも話をつけにやららんから、本決まりってわけじゃないぞ」

そういつて紫藤は下郷を見る。2年でありながら演劇部部長を務める彼女は、その視線に頷きをもって返した。

「じゃあ、こんどの職員会議のときに議題に挙げる。決まったら、必ず達成できるな？」

紫藤は、優しげに、しかしニヤリと微笑む。

「はい！」

グッとこぶしを握り締めて三人が唱和する。

一方その頃。

シオは、放送室へ向けて廊下を疾走っていた。

（風靡流凜が魔女……？報告になかったぞ）

一瞬前の会話が、シオの中で繰り返し再生される。

回想中。

「風靡さんは、止めておいたほうがいいと思うわ。……だって彼女、魔女”ですもの”

立ち上がったシオを、たった一言がその場に縫い付けた。

「風靡が魔女？どういうことだ」

シオは、爆弾発言を放った島崎に視線を向けて問う。視線は、鋭

い。

「あ、いえ。テレビの天気予報よりも正確に、百発百中で天気を言い当てるんですもの。魔法でも使っているようにしか思えないわ」
「そ、そういえば、去年の冬に足を滑らせて二階から落ちたのにぜんぜん怪我をしてなかったり……」

「そういえばこのあいだも、体育の時間にいきなり土砂降りがあったのに、あの子だけあんまり濡れてなかったよね」

わいわい、がやがや。

別にフウ自身が魔女を公言しているわけではないようだったが、これは確かめる必要がある。それも可及的速やかに、なんとしても。なぜかそう考えたシオは、一目散に誰にも気づかれることなく教室を抜け出た。

回想終わり。

ちょうど放送室の前に到着していた。放送中表示を無視して、絶縁用の重い扉を一気に開く。

いきなりの来訪者に、固まる女子三人とけだるげな紫藤。シオはそんな面々の中にフウを見つけると、大またで詰め寄る。フウも例に漏れず、固まっている。

「風靡、君は、魔女か？」

唐突に過ぎる発言にポカンとした表情のフウ。しかし見る見るうちに彼女の目じりに涙がたまっていく。

「ちょ、ちょっと君！いきなりなんてことを言ってるんだ!？」

下郷が憤慨する。

「ひどいです!」

一拍遅れて、高郷。

「なんで……っ」

声を絞り出すフウ。すでに涙は頬を伝って流れ落ちている。

「何でそんなこというの!？私は、魔女なんかじゃ……っ!魔女なんかじゃあ……」

ついに泣き崩れるフウ。そんな彼女を抱いて、キツと鋭い目でシオをにらみつける高郷と下郷。

「……諫、ちょっと来なさい」

黙って成り行きを見ていた紫藤が、口を開く。それは逆らえない気迫を持った声色だった。シオは、紫藤に続いてすごすごと放送室を後にする。

視聴覚準備室。

「……紫藤錬金術師、どういふことですか？風靡が魔女ならば、護衛のやり方を考える必要が……」

「諫実働部員、君こそどういふつもりだ？なぜ要監視者にいらぬ不信任を抱かせるようなマネをした」

紫藤の雰囲気が一変した。今までのくたびれた中年風の雰囲気は掻き消え、鋭く冷たい雰囲気、彼から発せられる。

「……それは」

シオ、どもる。確かに、いつもの彼なら犯さないほどのミスだ。

聞くのならこの目の前の男、錬金術師にしてシオの上司に当たる紫藤靖章に聞けばよかったことだ。

「……まあ、いい。幻想機の取得こそ我らが宿願だ……ヘルモンド錬金術師長が何を考えておられるのか、つかみかねると言えどな。今回は不問に処す。任務に戻れ」

「……はっ」

シオは、納得を心の隅に追いやって理解した。紫藤が教えないのなら、自分が知る必要がないということなのだろう。そう思っていると、唐突に紫藤が切り出した。

「風靡流凜は、魔女ではない。風の精霊を使役する”魔法使い”だ」紫藤の言葉に、思わず目をむくシオ。

「魔法使い……！？彼女が、ですか」

「ああ。まだその片鱗しか見せてはいないが、彼女こそが本物の”十人目の魔法使い”だ。間違いない」

放課後。フウは一人で帰路についていた。足取りは、重い。

「はぁ……」

気にはなっていた。わずかに聞こえてもいた。でも聞かない振りを、知らない振りをしていた。

“風靡流凜は魔女”

でも、あそこまではっきりと聞かれては、もはや知らない振りはできない。また、ため息。

何度目か知れないため息の、回数を重ねるたびに気持ちが沈んでいくのがよくわかる。よくわかるけれど、どうすればいいのかはわからない。

彼女には、5歳までの記憶がない。そして6歳の頃から、彼女は風の声聞いた。

フウの天気はよく当たる。絶対に外れない。このある種的能力を、彼女は特に嫌いなわけでもなかった。むしろ好きだった。しかし、今は。

また、ため息。ネガティブな感情が頭の中を支配して、苦しい。ため息にして吐き出しても、後から後からわいてくる。とどまるところを知らない。

フウは放送室に向かう気力が起きず、高郷に放課後の放送を頼んで校舎をあとにした。

『……敵ならば、噛み砕けばいい』

沈んだ心に、レイピルの声。ハツとするフウ。レイピルは続ける。

『お前が望むなら、敵のことごとくを我が牙にかけよう。お前が望むなら、お前に仇なす者すべてを引き裂こう』

「それは、だめだよ……クラスメイトだもん」

泣きそうにフウ。

『本心ではない。我が魂を持つものよ、お前の意識は我が意識。お前の心は……』

「黙ってよ！クラスメイトって言ったらクラスメイトなの！もう……一人にして」

激情にかられたように、しかし最後は力なく。それっきりレイピルの声は聞こえなくなった。

気がつけば、昔よく遊んだ公園に足を運んでいた。

遊ぶ子供の姿はない。錆の浮いたブランコに座る。彼女の記憶の深いところに、このブランコはあった。

ブランコに腰掛け、それを漕ぐわけでもなく、ただうつむいてじっとする。目じりからあふれた涙が、スカートにしみを作った。一人になったからかもしれない。とめどなく流れる涙を止めるすべはなかった。

やがて、つられたように空から雫が落ちてきた。フウは顔を上げる。空は暗くどんよりとして、彼女の心情を表すようだ。零れ落ちる雨だれは、容赦なく彼女の身体をぬらす。

「あめ、か」

ポツリと呟いて、またうつむく。いつそのまま風邪でもひいて、死んでしまえば楽になるんじゃないか、そんなことを考えるほどナースになった。自分でもわからないほどに、あの言葉は彼女を深く抉っていた。

冷たい雨は、どんどんフウの体温を奪っていく。それ以上に、心の温度が奪われていくように感じていた。

「凍えちゃいますよ？今日の雨、冷たいから」

頭上から言葉がかけられ、同時にフウに降り注ぐ雨だれが途絶えた。

「エル……さん？」

ゆつくりと顔を上げるフウ。そこには、優しげな表情で赤い雨傘を差し出す、エルの姿があった。微笑むエル。

「どうしてここについて顔してますね。だって、私はフウちゃんのお友達ですから。それと、そこでコソコソしている彼も、フウちゃ

んのお友達ですよ？」

「そこでコソコソしている彼も、フウちゃんのお友達ですよ？」

その声は、木陰でフウを監視していたシオの耳にも届いた。観念したように、茂みから頭を出す。

「なぜ……」

「言ったでしょう？ お友達ですもの」

わかった、と続けようとしたシオを遮ってエル。気配は完全に消していたはずだった。それに、ついさっきまでこの公園にはフウと自分しかいなかったはずなのにと、苛立ちにシオはわしゃわしゃと頭をかく。

「そうじゃ、ない！ あんたの目的は、なんだ」

おそらく、自身の持つ体術や初歩の魔法は、このエルフには通用しないだろう。詠唱を必要とせず高位魔法を使役できる目の前の女と戦えば、おそらく勝ちの目はない。

「昨日、お話ししたことがすべてですよ？ 私の目的は、皆さんを護ることです」

ほんわかとした笑顔で、こともなげにエルは言う。シオには、エルの笑顔の裏を窺うことは出来なかった。

「ずっと、いたの……？ 雨なのに、もしかして」

弱々しい声だった。本降りになってきた雨の、ざあざあという音にかき消されないか心配になるほどに。だが、それは確かにシオに届いた。

「……ああ。俺の言葉が、君を傷つけてしまった。すまない」

シオ、少し困った顔をしたあと、謝る。彼もずぶぬれだった。

「はいはい。これで、仲直りですね」

天真爛漫そのものな笑顔でエル。断わりなく二人の手をとると、引き寄せて結びつけた。

「わ、わ、わ」

「……これは？」

憂鬱な表情がぶっ飛んで、フウがあせる、照れる。シオも無表情をがんばっているが、やはり照れと、いきなりのことに多少の衝撃を覚えていた。

「握手。言葉は難しいから、だから心を繋ぐんですよ？」

「そっちのほうが、よっぽど難しい」

「あら、そうかしら？」

コロコロと笑うエル。気まずげに視線を交わすフウとシオも、それにあてられたようにぎこちなくではあったが笑った。魔法にかけられたような気分だった。

『風下に敵だ……！』

と、そんな少し和らぎかけたムードをぶち壊すように、レイピルがうなった。はじかれたように振り返るフウ。シオの片手は、すでに制服の下拳銃を握っていた。

「やあ。お久しぶり、って言っても昨日ぶりか。風靡流凜さん」

あたりはもう薄暗くなっていた。電灯の光に照らし出された男は、黄色い雨傘で顔を隠している。

「あ……！」

男は、雨傘をあげる。男の顔を見て、息を呑むフウ。

「金堂さん……！」

「や、シオ君。君はもうちょっと、護衛としての自覚を持ったほうがいいかな？」

現れたのは、金堂だった。昨日と同じ、人懐こい笑みのテクスチャを貼り付けている。

「あらあら。またお会いしましたね。今日はどんな御用で？」

「そうですね。昨日も言ったけど、風靡さんの同行。あと。個人的な用としては、おねえさんへのリベンジ、かな？」

朗らかな笑みを浮かべつつ談笑するようにエルと金堂。しかし、雰囲気は緊張している。

「と、いう訳で。風靡さん、一緒に来てくれないかな？」

「……い、いやです」

にこやかに手を差し出す金堂に、フウが示したのは拒絶だった。
「ん、同意してもらえないと、多少手荒にご招待することになっちゃうんだけどなあ」

はははと、頬を掻いて金堂。見る見るうちに彼の背後に巨大なシルエットが浮かび上がる。後ずさるフウ。

「させない！」

そういつて拳銃を構えたシオがフウをかばうように前に出るが、金堂は余裕綽々である。

「ははは、そんな銃じゃ、灯幻はとめられない。君もよく知っているだろ？」

歯噛みするシオ。

「さ、一緒に来てもらおうか、風靡さん」

灯幻のコクピットへテレポートした金堂は、そういつて灯幻をすべるように移動させた。

縮まる距離。巨大なロボットである灯幻にすれば、それは一歩にも満たない距離だ。巨大な掌が差し伸べられ、フウを掻っ攫おうとする。

「レイピル！」

その鋼鉄の指が彼女の体に触れようとした刹那、フウは大きな声で“それ”を呼んだ。

とたんに、弾かれたように灯幻がのけぞる。フウの眼前に展開した青い魔法陣が、ひとときわ輝いた。

——オオオーン

響き渡る遠吠え。青く青く輝く魔方陣から、まずは前足が現れて、いつの間にか止んだ雨の、切れた雲間から現れた真っ赤な夕陽が、その白銀の体躯を染め上げた。

「へえ、もうそこまで幻想機を操れるのか」

これは本心から意外そうに、金堂。想定外であったようだ。

フウは自身を青い粒子に変えて、レイピルの中へと飛ばす。鋼鉄

の狼の相貌に爛々としたひかりがとまり、もう一度啼いた。

「フウちゃん」

「エルさん？」

レイピルの操縦席に実体化したフウは、そこでエルからの通信を聞く。

「相手はお空が得意みたいだから、私とフェンヴィーに任せておいて？フウちゃんは、地上でサポートをしてほしいな」

「え、あ、うん。わかりました」

初めて尽くめの体験でパニック手前のフウは、エルの進言に大きくうなづく。エルもうなずいて、空に手をかざした。

「おいで、フェンヴィー」

その声と共に空に描かれた魔方陣から、白亜の翼を持つ幻想機が姿を現した。

「これは、ちょっと分が悪いな」

灯幻のкокピットで、金堂は苦笑する。いかに自分とはいえ、幻想機二体を相手取るのは厳しいものがあった。

灯幻が得意とするのは、高い機動性を生かしたかく乱である。しかし、フェンヴィーの機動力は、灯幻と互角か上回っていることは昨日の戦闘で実感していた。狼型の幻想機にいたっては、能力は未知数だ。

「金堂より本部。ゴーレムの転送を」

とりあえず、数で押す。金堂はそう結論付けると、すばやく本部への通信を開いた。

『こちら本部、紫藤だ。今からF型ゴーレムを3つそっちに送る。座標は灯幻の周囲で問題ないな？』

「紫藤錬金術師？珍しいですね、あなたが電話番号なんて」

『御託を言っている暇があるのか？3秒待て』

通信の先にいたのは、紫藤だった。研究者である彼が通信士の真似事をする必要があるのかと一瞬思ったが、とにかく今は目の前に

集中することにした。

緑の微粒子がふわりと舞い、それは見る見るうちに人の容を形成する。通信どおり、みつつ。

「くっ！ゴーレムか！」

一人生身のシオ。現れた3つの巨人の姿に、少し啞然とした。

「え、ええと……」

「あら、まあ」

「ああ、こういうことか」

それはフウとエルも、金堂でさえも同じようで、嫌な空気の空白が場を支配した。

ゴーレムの全長は、灯幻と大体同じ18 m。しかし、その容姿はあまりにも巨人には似つかわしくないものだった。

美少女である。

美少女である。妙に目が大きく、いろいろ物理法則を無視したような頭髮の巨大な美少女が、そこには立っていた。

「……紫藤鍊金術師も、この趣味さえなけりや渋いイケメンなんだけどなあ」

あきれ半分、笑い半分の様子で、金堂。まあ、でっかい粘土細工であるゴーレムであるから、こういうことだってできなくはないが、あんまりやろうとするやつはいない。

「あー、とにかく、気を取り直して。狼さんにはこの子達の相手になってもらうよ？」

仕切りなおすように、灯幻はMOFを作動させ、飛び上がる。

「燕のおねえさんは、僕とダンス。一緒に踊りませんか？」

「ふふ。しつこい殿方は、嫌われますよ？」

そういつて、空中でくると優雅に一回転するフェンヴィー。OKのサインというところか。

「フウちゃん、あの妖精さんは私が相手をするから、三人のエスコート、お願いしますね？」

「え、え、え？」

そうして、なんともグダグダと戦闘は開始された。

さて。

そんなこんなで地上のゴーレム3体を相手取ることとなったフウであつたが、どうにも外見が邪魔をして手を出しそびれていた。

『先手必勝、仕掛る。号令を』

「え、でも……」

対するレイピルは、フウの号令を今か今かと待ちわびているようだった。

『彼奴等はただの土くれだ。お前が心を病む必要はない』

「……」

フウは決断ができない。いかに中身が土人形だろうと、ガワは人間だ。肌なんて、みずみずしくさえある。……巨大だが。

フウは優しい少女である。覚悟がないともいえるが、つい昨日まで普通の女子高生だった彼女に戦う覚悟を持てというのは無理な話だろう。

——トゥルルル

「わあっ!？」

攻めあぐねていたとき、不意にポケットの携帯電話が鳴った。驚きに縮み上がるフウ。

恐る恐る液晶を覗けば、そこに表示されていたのは登録のなされていない番号だった。逆に友達からでなかったことに安堵しつつも、取るべきかとらざるべきか悩む。

電子音は鳴り止まない。目の前の巨大美少女も動かない。だんだん思考能力が奪われていくフウ。パニック秒読み段階だ。

「も……もしもし!」

結果、彼女は電話を取った。半ばやけくそだった。

『風靡か！俺だ!』

「し、シオ君!？」

電話の相手は、シオであった。足元に視線を向けると、携帯電話を耳に当てながらこちらに手を振る姿が。

「ど、どうして私の番号……」

『調べた』

しってるの?と聞こうとする時間も惜しいとばかりに、短くシオ。絶句するフウ。

「し、調べたって……」

『……その件についてはまた後だ。どうして攻撃をしない!?!』

シオのあまりにも身勝手な態度に、多少むっとするフウ。

「できないよっ!」

『どうして!』

どうしてと聞かれても、としばしの逡巡があったが、意を決したようにフウが口を開いた。

「だ、だって、見た目が……その……」

『……ああ』

シオも納得したようだ。頭を抱えたが、3秒後にそれなら、と打開策を提示していた。

『風靡、よく聞け。ゴーレムは文字を媒介に土の塊を操っている。』

どこか……おそらく首筋あたりに碑文が刻んであるはずだ。それを消せば、ゴーレムは自壊する!』

「ひ、碑文?わかるほどの?」

『保証はできない!……一瞬でわからないような場合は、直接戦闘で破壊するしかない』

シオは正直に答えた。シオの常識が通じるものかどうかは、実際見てみないとわからないのだ。

「わ、わかった!やってみるよ!」

フウは、脂汗を噴出させながらもレイピルの操縦桿を握った。レイピルの操縦桿は、己の意識をレイピルに直接伝えるための一種のインターフェースである。逆もしかりで、握った瞬間、レイピルの

意識が先ほどまでよりももっと強くフウの中に流れ込んできた。顔をしかめるフウ。

「……っ！レイピル、全速力でのゴーレムの後ろにまわって！」

『わかった』

言うが早いのか、レイピルはその四肢にグッと力を込め、跳ぶ様に走った。対するゴーレム3人娘も、それに呼応して徒手空拳の構えを取る。

ビュンっと言う豪快な風きり音とともに、先頭の一体が下段の蹴りをくりだした。レイピルはタイミングを合わせてその蹴りを足がかりにさらに高く跳ぶと、宙で一回転して背後を取る。

レイピルは狼型のロボットである。だからといってモニタに映る画像が白黒ということではなく、むしろ精密なセンサーが例の碑文を探り出した。位置は、シオの言うとおりの首筋。

「レイピル、あれを消して！」

『わかった』

短く返事して、レイピルはその鋭い爪の生えた前足の、手のひらの部分。ちょうど犬ならば肉球に当たる部位を使って碑文の位置を一撫でする。

スケール感のおかしいじゃれあいした後、ざりっと土を削るような音がして、フウが碑文の有無を確認しようと顔を上げた頃にはすでに、一体の美少女が大地に帰っていくところだった。

「やった！」

『油断するな！まだ2体いる！』

歓声を上げる間もなく、繋ぎっぱなしの携帯からシオの怒鳴り声が飛び込む。

「あっ、そうだった!？」

慌てて残り二体に振り向く。しかし、先ほどまで二体がいいたはずの場所にもぬけの殻で、あせりに視線をさまよわせるフウ。右にもいない、左にもいない、もちろん前にもいない。

『風靡っ、上だ!』

「え、あ、きゃああ！」

シオの声に意識を上に向けると、そこに探していた姿があった。どこからか取り出した武器を、コンマ数秒の間に叩き込めるだけの距離に。

当たる！フウはその瞬間が引き伸ばされたような感覚に陥った。

実にスローに、美少女ゴーレムが2体ばかりで武器を振り下ろすさまが見て取れる。今まさに自分をレイピルごと叩き潰そうとしている2体の、顔に不自然に張り付いたまま崩れることのない笑顔が不気味で、フウの思考回路はとくに極限状態を振り切って、むしろ何もかもがクリアに、鮮明に見えるようになっていた。自分の意識の外で、自分が悲鳴を上げているのを聞いた。

フウは優しい少女である。優しい少女ゆえに、悲鳴を聞きたくはなかった。誰しもが笑顔で暮らせるのがいいと思っていた。それがたとえ自分の上げた悲鳴であっても、彼女はそれを助けようとした。――風が、吹いた。

一方その頃。

エルの操るフェンヴィーは、金堂の灯幻と激しい空中戦の真っ最中であつた。

不規則なビル風が吹きすさぶ中、燕と妖精が超音速のワルツを繰り広げる。避けて、接近して、攻撃して。戦闘開始からこれまで、この3拍子は崩れない。

金堂の灯幻が、不規則な気流を手玉にとって接近。手にした高振動ブレードの薙刀を振るうも、フェンヴィー操るエルはこれを難なく回避し、お返しとばかりに無詠唱にて雷撃魔法を差し向ける。

昨晩はビル風に翼をとられていたエルだったが、彼女が二の徹を踏むことはない。巧みにフェンヴィーを操って、灯幻の攻撃を避け続ける。

『さすがエルフのおねえさん。当たっちゃくれませんか』

「うーん、どうせ当たるなら、宝くじがいいと思わない？」

『妙に庶民的なんですね』

「庶民ですもの」

と、そんな激しい戦闘を繰り広げていても、先ほどから交わされる会話はおおむねこのような、気の抜けたものだ。

『まあ、僕も仕事なわけで、仕掛けさせてもらいますね？』

やはり明るい口調で金堂がそう宣言すると、同時に背中蜂を模した羽根が抜け落ち、根元から新しい蝶を模した羽根が構成された。その間、わずか0・05秒。

「あらあら、ほんとの妖精さんみたい。それは魔法？」

『いや、これは科学ですよ。構造の再構築ってやつです』

「そうなの？魔法も科学も、行き着く先はあまり変わらないのねえ」しみじみ、といった感じのエルに、金堂は苦笑した。

苦笑しながらも、灯幻をすべるように突撃させる。対するフェンヴィーも翼をはためかせ、高度を取る。

灯幻が、手持ちの薙刀を投擲した。振動ブレードを形成していた分子構造が分解、再構築され、柄を軸に幾何学模様の円盤を形成する。魔法陣である。

それが攻撃のためのものでなく、こちらを拘束、ないし転送するためのものだと瞬間的に察したエルは、考えるよりも早くフェンヴィーを移動させたが、遅かった。灯幻の投擲した魔法陣からにわかに緑の燐光が迸る。それはフェンヴィーを包み込むように展開し、巨大なエメラルドグリーン色の鳥かごを形成した。

「あらあら」

エルは、困ったような顔をした。とらわれて動けないフェンヴィーの前に、灯幻がゆっくりと近づいた。

『今日は、僕の勝ちみたいですね』

につこりと笑顔を向けて、金堂。確かに今鳥かごの中にいるフェンヴィーには手の出しようがない。

「あら、ほんと、硬いのね」

エルは風の刃を作って柵の切断を試みるも、柵に触れた瞬間にた

だの風に戻ってしまった。

『ふふ、その鳥かごには対魔法処理が施してあるから、魔法攻撃は使えないよ?』

「そうみたいね。うーん、困った困った」

このような状況であるのに、エルはやりのんびりしている。まだまだ、余裕があるようだ。

「じゃあ、こういうのはどうかしら」

その言葉を残して、エルはふっと金堂の前から姿を消した。

『んなっ!?!』

この時初めて、金堂は驚きの声を上げる。エルは消えた。しかし、瞬間移動をしたわけではない。では、どうやったか。

「こうなるんだったら、スカートはいてくるんじゃないかかったかしら」
絶賛自由落下中のエルは、ぐんぐん迫る地面よりも風にはためくスカートの心配をした。

簡単な話だ。エルはフェンヴィーを送還し、自身は檻の隙間からポロリと抜け出したのである。

ピュウと、盛大な風きり音にかき消されそうな口笛。エルは落下しながら簡単な術を唱えて灯幻の真後ろにフェンヴィーを召喚した。

『たいした度胸だ!』

新たに作り出された風の刃が灯幻を襲う。金堂は辛くも回避に成功したが、代償として頭部のセンサーユニットを切り飛ばされていた。

『目』が使えないとなると……不利すぎるな。お姉さん、ここらで負け逃げさせてもらうよ』

不利を悟った金堂はエルにそう告げると、灯幻の魔術迷彩を作動させて空間転移。わずか数秒で、空は静まり返った。

「ごきげんよう、妖精さん」

今しばらくの自由落下を楽しみながら、エルはほくそ笑む。フェンヴィーがゆったり近づいてきているのを確認しながら、今度はこちらから遊びに行きますね、と笑った。

シオは、突然吹き荒れた突風に数メートル吹っ飛ばされて、ブラシコの防護柵にしたたかに後頭部を打ち付けたところで止まった。衝撃と激痛にふらふらする頭を無理やり覚醒させると、直後彼の目の前に飛び込んできたのはある種衝撃的な光景だった。

公園横の雑木林を、巨大な暴力が抉り取った痕があった。木々はなぎ倒され、大地は深くえぐれ、舗装のことごとくが砕かれていた。そこに武器を振り下ろす寸前だったゴーレムの姿はなかった。そして、レイピルの姿もなかった。

「これは……」

シオは信じられないようなものを見るような目で、辺りを見回す。「うっ……!!?」

鋭い頭痛が走った。いつの間にか自分の意思と関係なく体がぶるぶると震え、いやな汗がにじみ出ていた。

（怖がっているって言うのか、俺が）

それは長らく忘れていたものだった。いつもはちきれそうなほどの緊張を感じてはいるが、この”純粋な恐怖”は方向性が違う。慣れることができるものではない、もっと本質的に自分の本能が直接働きかけるような、あるいは自分の理性が総動員で行動にストップをかけるようなこの感覚は、本当に久々だった。

それでもシオは頭を振ってその恐怖を払拭しようと努める。ここで恐怖にとらわれて任務を果たせないようならば、今は亡き師に合わせる顔がない。

「……風靡！」

そして彼は見つけた。一際大きなクレータの底で、静かに寝息を立てる護衛対象の姿を。

「息はあるな、……脈も正常だ」

「でも、起こさないほうがいいと思うわ」

とりあえず、急を要するような事態でないことを確認すると、横

からエルの声。

「……いつからそこに」

「うふふ、ついさっき」

いちいち驚いているのも馬鹿らしくなってくる。シオは数秒頭を抱えたが、すぐに気を取り直してこの場を離れることにした。

「どうやら、覚醒したようです」

『おお、それはうれしいニュースだ』

紫藤は、真面目な口調で電話をしていた。相手は老人のようだったが、それを感じさせないほど陽気な声が、その老人の心情をよく現していた。

「まだ、完璧ではないようですが」

『ま、それは仕方ないだろうね。とにかく三つの幻想機が覚醒したとなると、少し金堂君では役不足かな？』

「はい。その件に関しては、天使錬金術師から打診がありました。

次は、彼……失礼、彼女に出てもらいます」

『ん、それが妥当だろうね。とりあえず、残された時間はわずかだ。それまでにはなんとしても仕上ておかねいとならないからね。なんだったらローゼンクロイツだって出してくれてかまわない。私が許可するよ』

「……わかりました。それでは」

そういつて紫藤は携帯電話を懐にしまいこむと、窓の外を見る。ちょうど、フウをおぶって校舎に向かっているシオの姿があった。

「……すまないな、俺たちは君らに、ひどく重いものを背負わせようとしているのかもしれない」

おそらくこちらの、いつもの中年然とした態度のほうが素なのだろう。

「俺は、その荷物を背負う手伝いしかできない。荷物を背負いきるだけの力を、その使い方を、君らに教えてやることしか……」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2668p/>

UNITY FORCE-HEXA ～リヴェラル・クラフト～

2011年1月24日12時55分発行